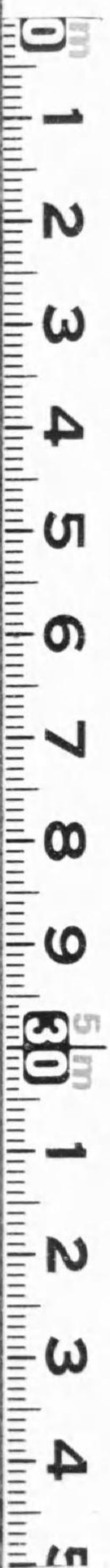


讀切
講談

太

閤

記



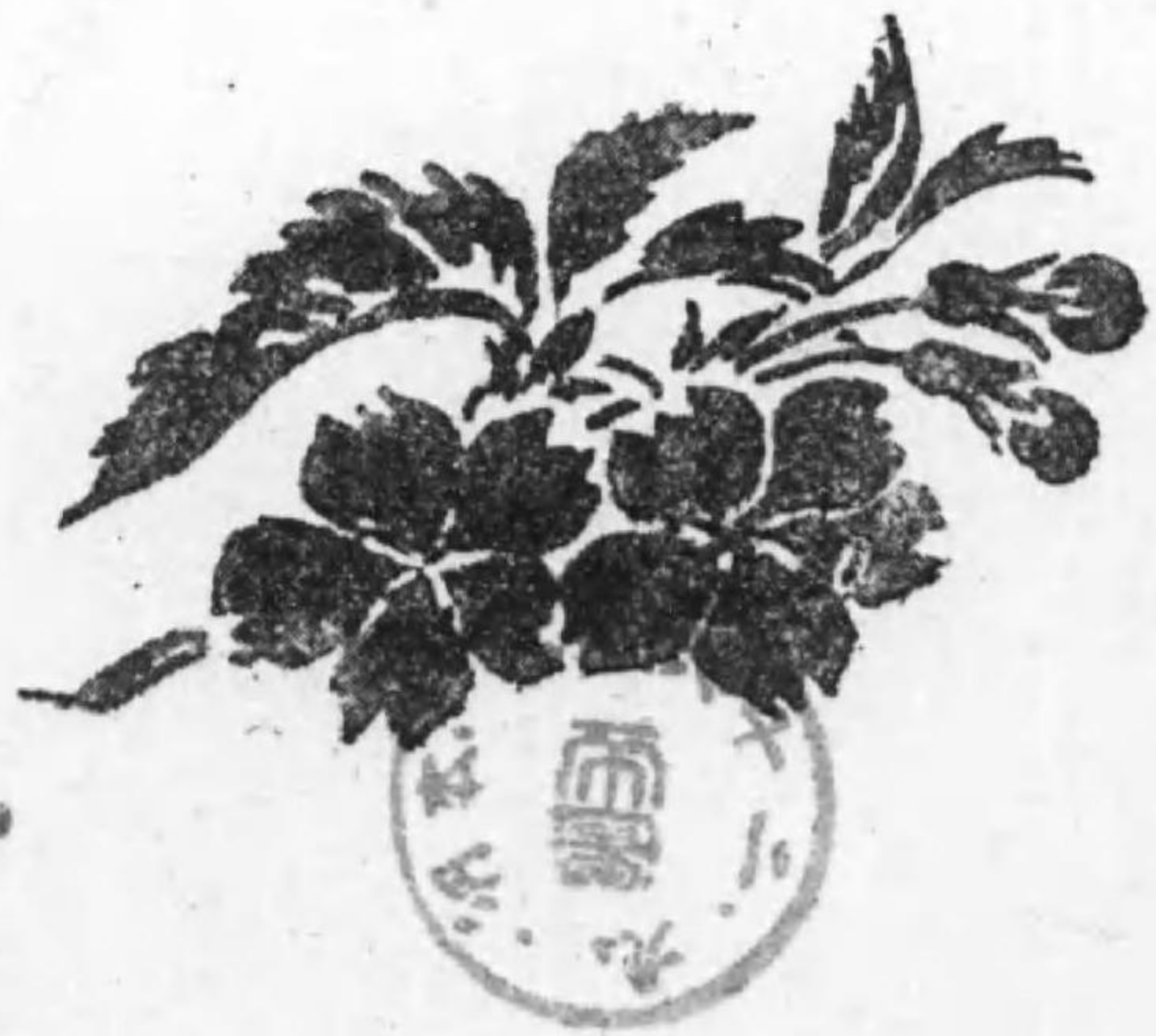
始



特220
578



演龍南邊田



出世太閤記

出世太閤記

八紘一字の大理想を以て今や東亞共榮圏の確立より更に進んで日本世界へ邁進しつゝある我が一億國民の健全なる讀物として、戦線へ銃後へ、偉大なる英傑物語を講演致す事を私は慶びとする者でございます。

さて一農家より身を起し位人臣を極めましたる大英雄、豊臣秀吉公は、尾張の國愛知郡中村の彌右衛門の子で、生れた時は、天文五年丙申正月元日の寅の刻と云ひますから、今の午前四時、産聲の大きかつた事と、其の顔が村中の評判でありました。小猿に酷似、彌右衛門も妻のお仲もびつくりして、檀那寺の和尚に相談すると、猿面異相の此の子は今に出世するよ、黒目の中をよく見なさい瞳が二つ兩眼にも重なつてある。珍しい相だ。大切に育てなさいよ、私がよい名を付けてあげよう。お前の家の前に見事な藤がある。いつ見てもよい藤の木だと思つて居る。あの木の様にぐんぐん育つて美しい、吉い藤といふ處から藤吉とするがよい。と和尚は一人で

喜んでをる。さう云はれて夫婦は安心致しました。

藤吉は丈夫に生長して七歳の時から、隣村の光明寺さんへ弟子入をさせられた。

両親は坊さんにする氣はなかつたが、餘り腕白亂暴で困るものだから、厳格しい和尚さんに頼

んだのでした。ところが益々腕白は激しく成り、村の子供を集めて戦ごつこをして飛廻つてゐる。

和尚もあきれ、

『お仲さんや、坊主には、とてもなれさうもないよ。氣の毒だが斷るよ。可愛い子には旅をさせ

ろといふ事がある。いつそ奉公に出して見なさい。なあ彌右衛門さん』

『方丈さんすみません。御苦勞かけました』

『和尚さんだから一年も預かつてくれたのだ有難うございました』

それから藤吉は奉公に出された。一ヶ月と辛棒が出来ず、ちぎ追出されて歸宅するのです。尾

州清洲のお城下、商家を三十餘軒廻つた中に、もう十二歳の春を迎へた。其の時は尾張長松の茶

碗屋に居たのです。此の度は半歳務めて居るので両親も喜んで居たら、(只今ツ、又出て来たん

です)と藤吉は笑ひ乍ら這入つて来た。

『お前珍らしく永く居るから、いゝあんばいだと思つてゐたのに困つた奴だ』

『藤吉や清洲のお城下ぢやもう奉公するお家はなはいよ』

『うん』

『どうして出て来るのだ』

『私はいつ迄も居るつもりだが、使ひきれないと追出すのだよ。今度の茶碗屋だつてさうだ。且

那が心配して居るからどうしなすつたのですと聞いたたら、悪い夢を見た、茶碗の中にお米が一杯

這入つて、真中に箸が一本立てゝあつた。まくら飯を供へられた夢を見る様ではもう直き死ぬん

だらう、と案じてゐなざるから、それでは私が三文の錢で其の夢を買ひませうとお錢を出したん

ですよ。したら旦那がどう云ふ譯だと云ふから、茶碗は穀物を入れる穀器でせう、穀器(五畿)

内の米を片つ端から三文で買った、安い〜目出度いと笑つたら、旦那がウ、ムと云つた。番頭

さんと相談して、お前の様な小僧は氣味が悪いから出て行つて呉れと云ふのでした。あゝもう少

し馬鹿に生れたら使つて呉れるんだらう』

『ウムーン、さうか困つたなあ』

『尾張では使つてくれないから、三河か遠洲へでも行きますよ。お父さんもお母さんも案じない

で下さいアハ……、姉さん、妹や弟達と久しぶりで遊ぼうか』と笑つてゐた。

夫れから七日程経つと、ふと我家を出たのです。其處彼處と漂泊ひ歩き三河の國に入り岡崎の

西を流るゝ矢矧川の畔に足を留めました。その翌日から矢矧の橋を住居とし雨が降れば橋下にこ

もをかぶつて、人の情に縋つて居た。或朝橋下に今眼を醒した藤吉を、橋上から呼んで居る侍があるから、

「何か用ですかい」

「そんな處に居ては成らぬ。上つて来い」

「へい何か呉れるのかい」

「慾張るな。此の橋の向ふに引込んでゐる。頭を下げて居るんだぞ。只今若君様が御通行だ」

「へい」と云ひながら橋際に土下座をして居る處へ、多勢の侍をお供に連れ駕籠の中から四方を見て居る七八歳程の若君が、藤吉の方を見て、につこり笑つた。

「やあ、きれいな若君だなあ。若し御家來様どうか御名を教へて下さい。どこの若君ですね」

「うるさい奴だ。黙つて居ろ」

「若し若し旦那聽かせて下さいな。可愛い若君だなあ」

「生意氣云ふな、どけッ」

「そんな意地の悪い事を云ふもんぢやアない。お侍様」と、ついて行く。

「エイ、きたない奴だ。片寄れッ」

「何處の御方ですね」

「まだ云ふか。徳川竹千代様だ」

「エ、竹千代様」

「どけッ」

肩をつかれて藤吉は、ぱつたり倒れた

「何をするんだ」と起上る間にはもう侍達は行過ぎた。廻りに居た見物は笑つて居る。

「おいお猿の乞食や、今の若君は此の岡崎の御城主様の若君だ。御七つにお成なさる。御家來を多勢お連れになつて、うらやましいか。お前は幾つだ。お大名と乞食、ハツハツ……」

「おい小父さん」

「何んだ小父さんだなんて云やあがる」

「みんなが馬鹿にするけれど、私はね、うらやましくも何ともない。今に見てみな、出世をするから」

「なに出世する。竹千代様の御草履取りにでもならうと云ふのか。出来るものかい」

「おつと小父さん、そんな小さな望みぢやない。ぐうつと出世して、徳川竹千代様を御供に連れて歩くのだ」

「この畜生ふざけた事をぬかしやあがる」とぼか／＼打たれた。

其の日は一日橋の上に居て夜に入つてから菰にくるまり寝入りました。
夜中の頃、折柄此處を通り掛りましたのは、尾張國海東郡蜂須賀村の野武士、蜂須賀小六正勝、配下の稲田九郎兵衛、稲田修理、青山新七、青山小助、長江半之丞、梶田隼人、日比野六太夫、松原内匠、川股團平、川口久助、樋口内藏之介等三十餘人、先に立つた川口久助が、藤吉の足を踏んだ。

「ア、痛い。人の足を踏んで黙つて行く奴があるか」

「痛いか」

「何だと、痛いか」と云ふ挨拶があるか。子供だと思つて馬鹿にすると承知しないぞ」

「いや怒るなく。元氣のいゝ奴だなあ。然し貴様も橋の上なんぞに寝て居るから踏れるんだ。文句を云ふな」

「何をツ、かうなつちやア勘辨ならねえ」

「生意氣いふな、我々を何んと心得て居るのだ」

「おい、お前達だつて夜中にそんな扮装をして槍や長刀、掛矢だの鉈なんぞを持つて歩いて、ろくな人間ぢやあるまい。威張るな」

6 「此の小僧奴」と、兩腕をつかみ中六間の橋上から身體を半分欄干より外へ突付け、「小僧どう

だ、怖くないか」と水を覗かした。

「些とも怖くない。突放されたつて下は水だ。さア遠慮はいらねえ、落すなら落して見ろ」

「ウ、ム」

餘りの大膽に嚇しも利かず久助は困つた。小六は感心して、

「いゝ膽力だなあ、久助もろ冗談はよせよ」

「こんな小僧は始めて見た。酷い奴だ」

「これ小僧こつちへ來い。度胸が良いなあ。俺があやまるから勘忍しろ」

「よし許してやらう」

「大きいぞアハ……。お前は何處の者だ。幾つになる」

「小父さん、お前は此の集團の大將だな。野武士だらう。他人の姓名を尋ねる時は先づ己れの名を名乗れと云ふ事がある」

「是はやられた。己は尾張の蜂須賀小六と云ふ者だ」

「幾つだい」

「二十二だ」

「若いんだなあ。俺は尾張の中村の者で藤吉、十二だ」

「今何處に居るのだ」

「國を飛出して今は此の橋に住んで居るんだ」

「こんな處に居ないで人の住む家に寝るがよい。俺の家に來ないか、蜂須賀村はいゝぞ。尾張の者なら丁度よい」

「さうかい、それぢあ一詣に行かう。頼むよ頭。おい川口さん」

「あれもう名を覚えて居るぞ」

「頼母しい奴だ。皆んなで可愛がつてやらうよ」

「山狩に行つた様な氣がするなあ、小猿が得物だ。アハハ……」

一同笑ひ乍ら藤吉を中に入れて、尾州海東郡へ歸つて行つた。

小六の父の彦右衛門正勝も事情を聞いて、藤吉を愛した。

或日小六と新七、久助の三人が藤吉を呼んで、

「お前の智慧には感心するよ。今日は智慧袋の紐を一杯に解いて見せな」

「何をすんです」

「已達三人を二階へ上げて見ろ、此の青江下阪の名刀をやるから、どうだ藤吉、其の智慧で上げる事が出来るか」

「夫れは無理だ。下ろすのなら直ぐでも出来るが大の男を三人も上げる事は何んぼ智慧でも六ツケ敷い」

「さうか。そんなら下ろして見ろ」と、二階へ上りあぐらをかいた。

「さあ下ろせ。どんな智慧だ」

「では刀を下さい約束だから」

「下ろせばやると云ふのに」

「上げると云ふから上げたんだ」

「下すと云ふから上つた」

「アハ……、さう云はなければ上らないんだ。それが智慧だ」

「ア、さうか、誰か氣が付きそうなものだなあ。猿にやあかなわねえ」

此の蜂須賀村には三年落着きました。十四歳になつた時見切をつけて蜂須賀父子に暇をもらひ、皆に別れて此處を立去つた。

尾張の國宮の熱田大神宮様へ詣で、一心に拜んで、御鳥居の外へ出ると後から、藤吉々々と呼ぶ者がある。ふり返ると伯父の宗兵衛であつた。

「おや伯父さん、暫くでした。御丈夫で」

「お前も無事で何よりだな。もう何年になる」

「エ、宅のお父さんや、お母さんは無事ですか」

「あゝ氣嫌がよい、皆な無事だよ。いつもお母はお前の事を案じてゐるぜ」

「ハイ」

「何處に居たのだね」

「三年程蜂須賀村の野武士の家に奉公して居ました」

「エ、あの蜂須賀彦右衛門や小六のかい」

「さうです」

「恐ろしい家に居たものだなあ。悪い事を覚えやしないかい」

「伯父さん野武士の中には悪い者も澤山ありますが、蜂須賀さんの連中は、皆な義理を知つて居て、中々よい人達ですよ。親切なものです。戦があると加勢に行つて、御禮に澤山なお金や品物を貰つて來るので、悪い事はしませんよ」

「あゝさうかなあ。蜂須賀さんの御先祖は、斯波尾張守高經と云ふ方だと誰かに聞いたことがある。お前が悪い事さへ覚えなければ宜いんだ。さあ宅へ來な」

宗兵衛は清洲のお城下の古道具商である。

藤吉は親姉妹に會つて、當分伯父の家に世話になることゝなつた。

「藤吉や、お母さんが來て、こんど奉公に行つたら、辛棒するやうによく意見しておくれと云つたよ。何んでも人間は一つ所にちつと辛棒が出来なくちやあ駄目だよ。樂な處へ世話をして上げようね。未だ十四だし、體軀は小さいし、お前は段々小さくなるようだねエ」

「冗談ぢめないハハ……。でも伯父さん、どうしても智慧の方ばかり伸びて、身體の方か縮むやうな氣がしますよ」

「未れた子だ、あんな生意氣なことをいつて」

話のところへ、

「御免ください」

訪ねて來たのは近江國の多賀明神の別當、觀音院順光坊といふ人、宗兵衛とは懇意の仲、年に一度は必ず訪ねて來て、一二夜は泊つて行くのです。話の末に宗兵衛「ん、郷から連れて來たお札配りの供が足を痛めて、國へ歸しました、誰か一人頼んで呉れと云ふ。これを聞いた藤吉が「伯父さん私をやつて呉れませんか、何處迄も御供をします。温順しく働きますから」「さうさなア、お兼どうしよう」「宜いかも知れないねえ」

程なく話がまとまり、順光坊の供をなし、清洲を立、行く先々で、

「へい今日は例年の通り家内安全の御札で御座います。近江のお多賀様で、明神の別當、順光坊の供、藤吉と申しますエへ……」

愛嬌者で、辯説がいと、先々好評をうけ自然御布施も多いので、

「お前は却々感心だ。是からズーツと一緒に歩いて呉れ」

「私も永くお供を仕度いのです」

それから駿遠参、三州を廻つた。遠江國濱名へ来ると、松下嘉平治之綱の屋敷に滞在した。

松下は駿河の今川治部太夫義元の軍師です。順光は之綱とは永い知人、藤吉は退屈のまゝ坊

ちやんやお嬢さんと呼んで、唄を歌ひ、大きな口を開いて、ベツカンコーをしたり、踊を踊つた

り、面白い話をするので、子供達はきやつくと笑つて喜んでゐる。嘉平治は襖の蔭から覗き藤

吉の顔を見て、すつかり氣に入り、襖を明けて中に入り、

「面白いの其方は何處の者だ」

「是は殿様ですか、退屈凌ぎにお子様方の御相手をして滑稽話をして居りました。観音院順光

坊さんのお供の者で尾張の中村の百姓彌右衛門の子で、藤吉と申します」

「何歳だ。両親は在るのか」

「十四で、両親は丈夫で居ります」

「顔をよく見せろ、ウ……ム」

「殿様唸りましたね、妙な面だ、猿か人間かと云ふんでせう」

「其方、武士にならぬか、武家に奉公せぬか、文武の道を教へてやるぞ」

「へエ、本當ですか。お侍になれる、それは有難い。どうか御願ひ致します。あゝ嬉しいなあ」

と、両手を上げて、坊ちやん、嬢ちやん踊りますよ、餘程嬉しかつたと見える。そこで松下は

順光坊に話をして、惜む藤吉を貰ひ受け、他の供を頼んでやり、順光を立てせました。

松下の家來となつた藤吉は、晝は武術、夜は軍學の講義と文武の兩道を學んだ。充分勉強した

ものです。

十七歳の時、元服をして、是からは男一人前となり、中村藤吉郎高吉と名のり、松下先生の御

蔭なりと、一生懸命に仕へて居る中に、弘治元年如月の中旬、相州足柄下郡の小田原の城主、

北條相模守氏康、息の左京太夫氏政は二萬五千の軍を率ひ、今川を討たんと領分境なる駿河の

富士川まで、軍勢を進めて來た。今川方でも、三萬の軍を以て富士川の西岸に陣をすゑた。松下

嘉平治は、小荷駄方の將となり五百餘人、輜重糧食の係りで御座います。實に大役、適當の地

に陣を立て、籠を築いて炊出しをなし、荷物の運搬、目の廻るやうな多忙となつた。

二月十八、十九、二十日、二十一、四日の間、川を中にして、睨み合ひの對陣であつた双方、敵が川を渡り来るのを待つて居る様子、本陣では軍議の評定があるので、松下も出席、其の留守の間、藤吉郎は松下の用人、山崎喜一郎に、

「山崎さん」

「何だ藤吉」

「一寸敵陣の様子を見物して来ます」

「見物、相撲や芝居だと思つて居る。氣樂な奴だ。忍びの者と間違へられるな。首がなくなるぞ。よしだらう」

「大丈夫です。すぐ歸りますから、殿様が御聞きになつたら宜しく云つて置いて下さい」

「氣を付けて行けよ。いゝか」

「ハイ」

粗末な皮具を着て、桃形の兜を被り、先年、蜂須賀に貰つた青江下坂の名刀を斜めに背負ひ槍を提げ、富士川西岸の上流の方に來たると、小高い丘があつた。そこへ上つて見るともう眞夜中、下弦の月は物凄く冴えて居る。味方の先陣は遠州掛川の城主、朝比奈備中守泰能の旗差物、篝火はギラギラ光る。

「ウーム、勇ましいなあ、戦ひは始まらないかなあ」

敵味方の陣立に見とれて居る内、夜明に近く成つて來た。折しも鑿々響く敵陣の太鼓、わあーと擧る関の聲、これこそ北條方に鬼神と呼ばれた、伊豆國伊東の領主伊東日向守平祐虎、二千餘人を従へ上流下流から、人筏を組んで、押渡つて來ました。

「アツ、來た、いよく戦ひだぞ。味方は何をして居るんだ。早く出ればいゝのに、何か策略があるかな、面白くなつたぞ」

一心に眺めてゐると夜明けになつて乗出した朝比奈勢と敵將伊東の勢が、大激戦となつた。藤吉郎の廻りにも、ビュービューと弾が飛んで來る。

「危いぞ、流れ弾は御免だ」と、丘を駆け下り竹藪の中へ半身入れて戦の有様を見て居ました。川を渡つて來た伊東勢は、朝比奈勢を捲くし立て、勝に乗じて攻め立てた。ドーンと一發、今川方に狼烟高く揚がると見る間に、左右より、飯尾豊前守、松井五郎八の二軍、伊東の軍を攻つければ、正面の朝比奈勢は盛返し三方より、押取巻き、火水になれと戦つた。流石の伊東勢、四分五裂に亂れて敗走した。藤吉郎は感心して、

「うまいものだなあ、朝比奈さんの軍法は、戦は斯う行かなくつては、あゝいゝ氣持になつた」と喜んでゐる目の前へ、トツと馬上で來る敵方の大將分と見える立派な武者一騎、傷を負つ

てゐるものか、大分疲れてゐる様子血に染まつた陣太刀をさげてゐる。
『やア来たぞ、大敵々々、立派な大將だなあ。初陣の功名に一ト槍見参して見よう』
藪の中から大膽にも槍を下げて、のこ／＼出掛けた。

『ヤア／＼夫れなる敵將に見参せん』

『下郎、汝は何者だ』

『遠からん者は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。我こそは駿遠参、三州の大守今川治部太夫義元の家來、松下嘉平治之綱の又家來、さる者ありと云はれたる、中村藤吉郎高吉なり。いざ勝負に及べ』

『下郎下れつ、雑兵葉武者を相手にする我でない。命は助けてやる歸れ／＼』

『歸れ下れとは何事だ。拙者が恐ろしければ降参いたせ。命だけは助けてつかはす』

『眞似をするな、下郎』

『イザ一槍を』と、突ツ掛かる。エ、面倒なりと、左に手綱を掻い繰り、藤吉郎目がけて蹴殺さうとする氣か、馬を躍らせて向ひ来る。藤吉は體をかはして突き掛けた。松下に習つた槍の極意は、疲れては居るが、強い敵將を、命がけで突伏させた。

『あゝ、骨が折れた。強い大將だつた。よく討てたなあ』

小刀を抜いて首をあげた。

『俺を下郎々と云つて名も名乗らなかつたが、姓名を知りたいなあ』

言物でもあるかと敵將の鎧のかくしをさぐると、弦袋が出て來た。

大將分は弓弦の掛換を入れてある弦袋を誰でも持つてゐる。其の中を見ると、伊豆の國伊東の住人、伊東日向守平祐虎と書いたものがあつた。エ、……と思はず其處へ坐つて了つた。

『こりあ大した敵だ。關八州に名高い勇將だと聞いてゐる。名乗られたら討てなかつたらう。不思議な功名だ。よーしもつと見て置かう』

又々乗出して見てあれば此時、北條方二陣の大將大導寺駿河守が、竹筏を浮べて富士川を渡り來り、伊東方の敗兵を取纏め、今川勢を防ぎながら引揚げて行く。戦の掛引は鮮かなものでござ

します。
『見事だなあ、退口は六ヶ敷いと云ふ事だ。敵乍ら天晴なものだ』

獨言を云ひながら、松下の陣へ歸つた。

『唯今』

『藤吉何處へ行つたんだ。殿が御心配なされておいでだ』

『遅く成りました濟みません』

「藤吉無事か。前夜から見えんと云ふから案じて居つた」
「ハイ、敵陣を見て参りました。朝比奈様の軍略は見事で恐れ入りました。夫れから敵將の退口にも感心しました」

「ウム、實戦の見學をして来たか、夫れも宜からう。藤吉其首は何處で拾つて来た」
「殿、討取つたのです。名乗を掛けて」

「夫れは偉い。どうして討つた」

「川邊りの藪の脇で出會ひました。只一騎引揚げて来る處を槍を付けました。下郎下れと云つて相手にしません。漸く討つて、此の袋を見て驚きました。御覽下さい、伊東日向守です」

「何だ、大そうな功名だな。皆聞いたか」

「これは、第一番の功を藤吉にしてやられました。大手柄です。ウム」

「御大將に此の事を御披露するのだ」

松下も子の様に思つてゐる藤吉ですから、我事の様に喜び、義元の本陣へ披露すると、

「今實見した、日向守に相違ない。天晴れの功名だ。其の藤吉郎と申す者これへ呼べ」

「ハイ、陣外に控へをりますれば直様同道仕ります」

喜んで藤吉を連れ來り義元侯の前へ平伏させた。

「伊東日向を討ちしは其方か。苦しうない面を上げよ」
「ハツ」

靜かに顔を上げた。義元は一ト目見て、居並ぶ將士と顔見合せ、ふツふツと苦笑ひ、

「猿面異相、妙な面だのう、アハ、……。汝には日向は討てまい。見苦しい、退げろ」

お褒めの言葉どころではない。松下も可哀さうになつた。

藤吉は聲高く、

「恐れながら御大將へ申し上げます。私は日向守を討取ました。いつはりには申し上げません。みにくき猿面、小身にも働きは大きく致します。聞く處によりますと、三河國牛窪の産、山本勘助晴幸は、片眼にて、跛の不具者なれども日本六十餘州を武者修業なし、軍學兵法に勝れ、武術に長じ、今は甲州の武田信玄公に重用せられ、軍師の役を務めます由。人は見掛によらぬもの。宜しく御一考の程願はしく存じ奉ります」
義元は大いに怒り、

「だまれ、無禮者、下れ、永居をすると斬捨てるぞ。嘉平治早く下げろ」

朝比奈備中守が氣の毒に思ひ、

「殿、彼は匹夫の身の大將の御前に出でて、狂氣でも致したものでありませう。何卒御怒なきよ

う」と義元をなだめる内、松下は藤吉を我陣へ連返つた。

「氣の毒であつたなあ。其の内折を見て、殿へ申上げ、汝の功を無にはせんから、萬事拙者にまかせてくれ」

「エ、御心配を掛けて恐入ります。何とも思つては居りません。これしきの事を。アハ、……」と平氣な顔で笑つてゐる。

此の合戦は甲州の武田家の扱ひに依り、間もなく和談が成立して、皆陣拂ひ、松下一門も濱名へ戻りました。

其後、今川侯に藤吉の話をしたが、義元は耳にもかけない。

「藤吉や今度の事は、嘸残念であらう。腹も立つだらう。然し人は虫の居所の宜い時と悪い時がある」と云ふから、あの時は大將の虫の居所が悪かつたのだらう。折を見て取成さうから、今暫くの間我慢をして呉れ。此度の軍功は五百貫の價値は充分ある。私からやり度いが、他の者の釣合も有るから三百貫を遣はして置く。怒りを静めて、此の濱名に永く留まつて呉れ」

「誠に有難き御言葉で恐れ入ります。決して怒りは致しません。御奉公を續けます」と機嫌よく勤めて居りますが、嘉平治は考へた。

（却々此の非凡の英傑が乃公の所に長く留まつて居る氣遣ひない。何れ此地を去るだらう。何と

かして氣分を引立てやり度い）と思つて、

「藤吉郎、今日からお前に松下の姓を許すから、向後松下藤吉郎と名乗るが宜からう」

「何かと御心配下されまして有難く心得ます」と下俯向いて考へて居たが、「思召は結構ですが、

此の度の戦功に就きまして、三百貫も御恩賞を頂いて居りますのに、其の上御姓迄賜はりましては恐れ入ります故、他の方々の思惑も如何かと存じますから、松と云ふ文字の木篇だけ頂きます、此の後何か功を立てましたる時、公と云ふ字を戴きます。先づそれ迄は木下と名乗り度く存じます」

「オ、左様か。それも宜いであらう」と云つたが、嘉平治は後で又考へた。

（松と云ふ字は木篇に公と云ふ字、何で彼は篇ばかり取つたのだらう。……ハ、ア、作の公を捨てるやうでは彼は乃公の所に長く居ないな。是れはいけない。如何かして引留める策はなからうか。待てよ、ウ、ム、そうだ、女の黒髪にて纏れる綱には大象も繋ぐと云ふ、美人の妻を世話してやらう。然うしたら此處に留るであらう」と斯う考へましたので、大勢ある家來の中を見渡すと、河村治兵衛の娘きくと云ふのが美人であります。或日治兵衛を招いて、

「其方の娘きくは今年何歳になるな」

「十八歳でございます」

「ウム、何れかへ縁組の約が整つて居るか」

「未だ何れへも」

「ウム然らば私が媒酌して遣はすから嫁にやれ」

「有難き仕合せに存じます」

「後には必ず一城の主と成つて天下に名を現はす非凡の勇士であるぞ」

「誠に有難いことでございます」

「然し其方ばかり喜んで、本人に否哉はあるまいか」

「イエ、親の許します縁談を娘が兎角申しまするとも、親の威光で違背は致させません。必ず婚禮を取結ばせます。して相手方は何方で……」

「此の度の富士川合戦に非凡の大功を現はしたる木下藤吉郎である」

エーツと治兵衛は大いに驚いた。

「武士に二言はあるまいな」

「へエツ恐入ります」

今更になつて否とは云へない。とんだものを引受けたと、泣々承知を致して我家に戻り、妻と

娘に此の事を云ふと、おきくが、

「阿父さん嫌ですよ、あんな面の人の所へ行くのは」

「嫌でもあらうが殿様の前で斯々云つて承知した。今更お前が嫌だと云へば腹切道具、どうか假令三日でも先方へ行つて、何か氣に入らん事があつたら、其れを云ひ立て、出て來なさい」

「では阿父さん出て來ても……」

「ア、宜いとも」

「それでは行つて來ませう」

と、行く前から出て來ることを親が得心。日を定めて主人の媒酌に依り婚禮をしたが、此の夫婦が睦まじく行く譯がない。翌日から箸の上げ下しにも喧嘩だ。それもおきくが毎日々々怒りつけて居るからでした。

時しも七月申旬、遠州の秋葉山へ松下の命に依つて藤吉郎、武運長久の御守札を受けに行きました。甲子年で、七月の甲子月で甲子の日、滞りなく参詣終つて立歸る途中、濱名街道へ掛つて來ると、足へボンと打かつたものがある。何氣なく行くと、又ボンと片方の足へ打かつた。何であるかを見ると、土で造らへた三面の大黒天。彩色などが施してあつた。誠に綺麗だから、其儘袂へ入れて立歸つて來て、御守札を主人へ納め、役目了つて我が家へ歸つた。

「おきく今戻つた」

「お歸りかえ」

「何だお歸りかえとは、どうもお前は禮儀を知らんで困る。先づ主人が歸つて來れば女房が、其れへ出迎へて、お歸り遊ばせ、御役目ながら、御苦勞に存じます。嗚呼暑う御座いませう。サア御洗足の水を取りました位のことを云ふのは當然だ。其れに何だ、襷を掛けて、臺所から、おやお歸りかと鼻の先きで應待するといふは怪しからんことだ。亭主を亭主と思はんからだ」

「何を生意氣なことを云ふんだねえ、亭主どころか猿見たやうな顔をして」

「何だと、亭主關白の位といふことを知らないな」

「關白が聞いて呆れるよ。お前さん位、世話を焼かせる腕白はないよ」

「あゝ云へば斯ういふ、仕様のない奴だ」と座敷へ着物を脱いで、縁側で冷たい水で身體を拭きながら、

「おきくや、其の汗ばんでる帷子を早く始末をして呉れ」

「アイよ」とおきくが脱ぎ捨てゝある帷子を取つて、

「あれお前さん何だつて此の袂の中へ子供ちやあるまいし、物を入れるんだね……オヤオヤ大黒様。どうしたの」

「ウム、今歸つて來る濱名の街道で一度ならず二度まで、足へ躓づいたから、見ると大黒様だ。」

近所の子供に遣つても宜いと思つて袂の中へ入れて來た」

「まあ藤吉さん、お前さん位運の好い人はないよ」

「何だ」

「今日は甲子の年の甲子月、甲子日で、秋葉大権現様へ武運長久の御守札を受けに行つた。其の歸りがけに二度まで躓づいて拾ふなんといふ、此の大黒様は一面に付いて千人の福を授けるといふ。三面の大黒天なら三千人の福が授かる。眞正にお目出度い。此の先どうなるか知らないが、縁あつて三日でも夫婦になつたものだから、お前さんの出世をするやうに豆の御飯でも焚いて祝つて上げやう」

と、其の大黒天を神棚へ上げ、後へ下つて三拜したおきくが、勝手の方へ行かうとすると縁側に涼んで居た藤吉郎は、にこ／＼笑つて左の手を伸ばし、大黒天を持つてすと立出で、目よりも高く差上げ、敷石を目掛けて叩き付け、微塵に碎いて了つた。此の時に藤吉郎が心の中に、此の大黒天へ祈願をしたといふ、この御尊像は一面に付いて一千の福を授けられるとか、三面にして三千の福を下し賜はるは、誠に有難く存じまするが、私の身に取つては、三千人では不足で御座います。恐れ入りますが、尊像を今石に當てゝ打碎きますから、破片一つに付いて三千人の福をお授け下さるやう、大願成就をした折柄には、あなたの尊像一萬體を建立して、御利益に報

い奉りますと云つて打碎いた。大きな事を願つたものです。後年、大願成就の御禮として此の大黒天の尊像を一萬體建立せんと思つたけれど、今泰平と成つた様なれど、未だ戰國の餘風は全く去らない。秀吉が迷信を起して、其んなことをしたと云はれては、威嚴に拘はるとあつて、是に換へて大佛を造られたと云ふ事で御座います。

此れを見て居りましたおきくは、烈火の如くに怒つて、
「お前さんのやうな罰當りはない。勿體ない事を知らないのかえ。そんな人を一日でも良人として居ることは出来ないから今直ぐに離縁をしておくれ」

「ナニ離縁、宜し、離縁して遣る」

「私も若いんですからね、お前さんの所を出れば、外に良人を持たなければならぬ。其の時に紛糾があると不可ないから、三行半の離縁狀を書いておくれ」

「宜しい書いてやらう」とにこ／＼笑ひながら筆を執つて、認めながら、

「扱ておきく」

「何だえ」

「離縁狀は望み通り書いてやるけれども、能く聞け、覆水再び盆に還らず、破鏡再び照さずと云ふことを知つてゐるか」

「知らないよ、其んなこと。唐人の寝言見たやうなこと……」

「知らなければ云つて聞かせる。昔唐の殷の紂王の頃に、呂望と云ふ者があつて、女房を媽氏といつた。毎日々々渭水と云ふ川へ行つて釣竿を垂れて居たが、一日として小魚一尾釣つて來ない。夫がどんなことをして居るか或日媽氏が來て見ると、眞直な針を以て釣をして居た」

「何を云ふんだね。眞直な針で魚が釣れるものかね」

「サア其所だ。夫の愚である」と云ふことを見限つて離縁を求めた時に笑つて之に應じた。是は魚を釣つて居たのではない。天下の俊傑を釣つて居た。器量人を釣つて居たのだ。終に西伯昌と云ふ方が呂望を見出して、之を軍師となし、而して殷の紂王を亡ぼして周の世を建てられた。是を周の文王と申上げたと書物にある。時に今話した呂望は太公望の稱を賜はり、駟馬の車に乗つて多くの家來を従へて街を通る時に、車の前へ去つた女房の媽氏が跪つて、前非を悔ひ、詫言をして、何うか元々通り夫婦になつて呉れと頼んだ時に、太公望は怒りの色も見せず、盆へ一杯の水を持って云つたので、媽氏は、其の通り持つて來た。其れを地上へあける、云ふが儘にあげた、其の水を今一度盆に盛つて見ろ……」

「何をつまらない事を云つてゐるんだね」

「サア入るまい。太公望は笑つて、覆水再び盆に歸らず、破鏡再び照さず、と云つて其儘車を走

らせたこと云ふ事がある。乃公は今斯うして居るが、一朝時を得て、回天の勢を現せば、一國一城の主となり、アハ好くば、日本六十餘州を平定しようと考へてゐる。去るは素より易いけれども、決して後に悔むな』

『生意氣な事をお云ひでないよ。何日其んな夢を見たんだね。藤さん左様なら、あばよ』
ふふんと笑つて出て行きました。後年、藤吉郎が關白に昇進なし、車に乗つて小田原を通行せられた時、漁師の女房になつて居た此のおきくが、土下座をしてをりました。關白は笑つて昔語りをなし、黄金を遣したと云ふことで、きくは大きな出世を逃して了つた。

扱て松下は、おきくが去つたと云ふ事を聞き、失敗つた、其れではもう乃公の所に居る氣遣ひはなからう、困つたことが出来た、何とか引留める工風はなからうかと、思ひ詰めて居ると、或日藤吉が、

『殿、承はれば、此の頃尾州の清洲に桶革胴の鎧と云ふ丈夫にして、着易い物が出来ました由、お用ひになりましたら宜しからうと心得ます』

『如何にも用ひ度くはあるが、如何せん清洲は敵國であるから、求める道がない』
『私の郷里でありますから、仰せ付けられれば、容易に求めて参ります』
『ウム、然らば其方に頼む。鎧一領を求め呉れろ』

『委細長まりました』
黄金三枚を渡されて、

『それでは行つて参ります』と暇を告げて立つて行く。後ろ姿を見送つた嘉平治、持つて居りました扇子をポロリ落して、ア、到々乃公の所を去つて行くか、と思はず嘆息を洩らしたから、傍らに控へた若侍が、

『殿には何で御嘆息を遊ばします』
『ウム非凡の英傑到々去つた。再び歸つて来まい。大膽は荆棘に止らん』
『ハア、でも清洲迄鎧を買ひに……』

『イヤさうではあるけれど、再び歸らぬ心で出て行つたに違ひない。藤吉郎の宅を調べて来なさい。何か書いた物があると思ふ』
『左様でございますか』と近習が二人木下方へ行つて見ると、留守宅の机の上に短冊が一枚、何か詩のやうなものがある。其れを嘉平治の前へ持参して、

『斯様なものがございました』
手に取上げて見ると、『勇は關羽に及ばずと雖も、智謀は勝る。何ぞ黄金三枚を以て繋がんや、曹操の錦として故郷へ去る。厚恩終生忘れず……』と書いてある。唐三國誌の故事を引例して、

斯う云ふ事を書いて行つた。魏の曹操の爲に關羽が捕はれとなつて、魏の都に居つた。どうか曹操は此の關羽を味方に附けやうと思つて、種々優待して、馬に乗れば黄金を與へ、降りれば銀を與へると云ふやうに致したが如何なる珍器を贈るとも如何なる寶器を捧げるとも、喜ばない。或る日馬上で關羽の戻つて來る姿を見て、關將軍、御身の乗れる馬は瘦せたりと、自分の乘馬を關羽に與へた。是千里獨行の駿足、赤兎馬といふ名馬である。關羽大いに喜んで之を受けた。曹操不審を打つて、關將軍、貴所は今日迄如何なるものを參らせても、喜びの顔を拜見いたさん。此の馬一頭の爲めに左程にお喜びになるは如何なる理由でござる。關羽之に答へて、されば也、今我此所に有りと雖も、義兄玄德、何れにあるや、更に其の音信を聞かぬ、此の馬は千里獨行と承はる。兄の在所が知れた時は、一鞭加へて、其の跡を慕ふことが出来ると思へば、喜ばしく思ふ。曹操驚いた。逃げる器械を與へたやうなもの。後に玄徳の在所が知れて關羽赤兎に跨り、五關を破つて玄徳の跡を追ふ。曹操跡を追ふて、關羽を引留めんと赤地錦の直垂を贈つた。關羽は馬上にあつて、曹丞相の賜袍何時の世にか報ぜんと思つて去つた。後に赤壁の燒打ちの時、曹操は玄徳の奇計に陥つて既に命の危ふいと云ふ時に、關羽は自分の身が危ふき所まですゝみて、之を救つた。其の故事を引いて、武勇は關羽には逆も及ばんが器量は以上である。三枚の黄金を持つて尾州清洲へ桶皮胴を買ひに行くが再び歸らぬ。必ず何かの時には此の恩報をするといふ意

味で右の書置を残して行つたものであります。そこで藤吉郎は道を急ぎ尾張國愛知郡中村へ行かうと、通り掛つた三河の國岡崎の西を流るゝ矢矧川、矢矧の橋まで來た時に思はず足を留めた。水面をながめてホットト息、

『アーなつかしい橋だなア、乃公が此所にゐたのは十二歳の時であつた。雨がふると橋の下へ這入つたのだ。さうく、可哀さうな小僧さんと云つて、よく餅を呉れたお婆さんがあつた。モウ十年になる。無事でゐなさるかしら。徳川竹千代の家來に突き倒された事があつた。見てゐた人達が笑つたから、今は乞食同様でも、後には出世して竹千代を供に連れて歩くと云つて見物人に打たれた。出世どころか未だ浪人だ。ウフ、。蜂須賀小六に會つたのも此の橋だ。小六や、彦右衛門一家は其後如何して居るか、思ひ出の多い矢矧の橋だ』

と、しばらく足を止めて居りました。ふと五六間先を見ると、十五六人集つて一人の易者を取り巻いてゐる。近寄つて見れば、机を前に置き、笠で顔を隠し、箆竹を並べ、天眼鏡を左の手に持つて人相見をしてゐる。

『此の先生は實によくあたる』

『本當だ。神様の様だ』

『私の村から見てもらひに來る人がたくさんある。遠くから皆んな來るだよ。先生よく見てくだ』

せえ」

藤吉郎は横の方から見てみると、その易者が木下の顔をちーツと見詰める。藤吉は行き過ぎやうとすると、

「ア、モシ、御武家暫らく」

「何んだ」

「失禮ながら只今不計も貴所の御顔を拜見致しましたが珍らしい御相貌でござる。何とも恐れ入つた儀でござるが、觀相をさせては頂けませんか」

「ウム、拙者の顔が見たいと言はるゝか。望みとあれば見せんではないが、實は拙者空腹である。腹が空いては自然に相も變るかと思ふから橋を渡つて食事をして歸つて來れば宜いが、少し先きを急ぐからさういふ冗も出來ぬ。折角ではあるが御斷り申す」

「ハア然らば誠に失禮ではあるが持合せの辨當がござる。どうぞ之をお食しくだされて御相を御觀せ下さい」

「其れほどまでの所望なれば觀てもらひませう。そして遠慮なく御馳走にならう。之れは昆布の煮つけ、味噌漬の香の物か。岡崎は味噌の名物、これは結構」とムシヤ、喰つて、

「サア御覽を」

「誠に御無禮ぢやが」と天眼鏡を取つて藤吉郎の顔を熟々と見、年齢を聞き、筮竹を揉み、算木を置き、下つた卦面を判斷した。

「ウーム、ア、恐入つた。貴方は今こそ不遇の御身であるが、中年から晩年に至つて、非常な御運がある。後には三公の位に昇られて、天下の政權をお握りなさる事にもならうかと思ふ」

「ア、左様なア、それは樂みだ。行く先が明るい。千萬忝けない。厚く御禮を申す。先を急ぐに依つて是で御免を」

先幸宜しと思つた藤吉郎、心の中で喜びながら易者に別れてスタ、と橋を渡り切らうとする時にヒヨイと振り返つて見ると、易者と見物人と何か大聲で争つて居る様子、バラ、ツと馳せ戻つて見ると、這は如何に、易者は算木筮竹天眼鏡をト纏めにして、橋の欄干へ身を寄せて河中へ投げ込まうとして居る。それを三四人が留めてゐるのだ。

「アイヤ易者殿、暫らく待つた。何で斯様なことをする」

「イヤ御留めに預かつて恐入る。只今貴方の御顔を拜見なし、易を立て、下つた卦面に依れば、確かに高位高官に昇る非凡の相、其旨を申し上げた。さうして貴方が行く後ろ姿を見れば、丈は五尺に足らず、失禮な申し條だが、相貌は猿に似て居らるゝ。此の小身變面の御方が、如何に出世なされたとて、三公の位に昇る謂れがない。然れども易の面にはさう表はれて居る。私は今後も

永く易道を以て世渡りをなさんと心得しも、之を以て見ますれば易は誠に頼むに足らんものであらんと、豁然悟る所あつて、此の道具を河中に投じ、向後此の業を捨て、他に道を求めやうと致しましたのです』

「ウム——併しながら易者殿、あの向ふに見へる松の大樹だ、あの大木も始めから大きなものではなかつたらう、最初は小指程の木の芽であらう、それが年毎に大きくなり、幹となり枝を生じ、葉が生れ、幾百年の後にはあの様な大樹となつて松の緑の美々しくも榮えてゐる、拙者も之から努力と運で、幾十年の後、大將軍、關白様に、なれないと誰がきめた。アハ、ハ、ハ、易者殿よ、論が小さい、易を信じなさい。己れが出世をしたら今日の見料として十萬石やらう』

『エ、十萬石』

『遠慮なしに取つておきなさい』

「ア、恐入りました、貴方の御論は大きい、御出世を待ちませう。然うして後々の爲十萬石の書付けを頂きたい、御立身の時願つて出でます故』

『之は面白い、書かう』と、易者の出す紙と筆をとりさらりと書いた『何んといふ姓名かね』

「ハイ、私は元中國の浪人にて竹田竹若丸と申、京都に参り、愛宕の僧となり、頓藏主惠瓊と申します。今は竹田惠瓊と名乗り感ずる處あり易を以て諸國を廻つて居ります』

「ウム拙者は木下藤吉郎と申し尾張の中村の者だ、夫では此の一書を』

『有難く存じます、扱見物の皆さん、御心配をかけました、又易人相を見ますよ』

「ア、驚いた、十萬石の書付を出す奴も奴だが易者も易者だ、正氣の沙汰ぢやアあるめいぞ』

見て居る人の言ひ分とすれば無理もないが、後年之が實現されたから妙なものであります。

それより道を急いだ藤吉郎、故郷の中村へ歸つて來ますと父は隠居をして姉婿彌助が家を相續してをりました、兩親や弟、姉夫婦は久々の歸國を喜んで近親や村中に告げて歩き毎日馳走をつゞけてをりました。

十年振りで我家に歸つた藤吉は、天下の名將に仕へやうと八方に目を配つた。英雄や豪傑名將智將は戦國の時代ですから、幾らでもありますが、天の時は地の理にもしかず、といひまして、京都に遠い地に居る大將では見込がない、地の理のよい京都に近い大名達で、藤吉郎の氣に入る人が見付からない。

良禽は樹を選んで棲む、賢明な名君は居ないかと調べてゐたら、目と鼻の先に居る英雄を見出しました。

その御方は、尾張國清洲の城主織田上總介信長公、尾張國の内僅に半分を領して居るのでした。將來天下に名をなす大人物だと見抜いたのは流石に藤吉郎の眼力であつた。

それから信長の出先をつけて機會の來るのを待つて居ました。時しも永祿元年九月一日、信長は小牧山に狩りを催し鳥獸の獲物が多數あつて、御機嫌よく、夕刻歸路に就きました。折から横道より突然飛び出した藤吉郎、道端へ兩手を付いた。

「恐れながら、御大將にお目通り、お願ひの者でございます」と平伏した。織田家の家老柴田權六郎勝家、進み出で、

「ヤア無禮者、我君へ直訴せんとは不届至極、直訴とは偽ならん、敵國の間者であらう。怪しき奴、ソレツ、各々、引つ捕へて拷問いたせ」

ハツと答へて士卒達はバラ／＼と立ちかへり、藤吉郎を取巻かうとする。

「先づお待ち下さい、拙者は決して敵國の間者等ではござらん」

「黙れつ、怪しき奴に相違ない、取調べてやる」

「多寡の知れたる私一人を大勢かゝつてお騒ぎになる必要もござりませぬ、之しきの事に大業な御下知は些か笑止に存じまする」

織田家の黒鬼と呼ばれたる勝家に向ひ恐るゝ色なく平然として申述べた。

「曲者黙れつ、汝はこの勝家を悪口するか、今一言云つて見ろ、手は見せんぞ」

と云ひながら刀の柄へ手を掛けやうとすると、馬をすゝめた信長公。

「權六待て」

「ハ、」

「其奴中々の勇者ぢや、これへ呼べ」

「ハイ」

「汝は信長に何用ある、目通り許す、申して見よ」

「ハツ、直々のお答は恐れ入ります。お傍の方まで申上げます。殿様は今日この尾州小牧山に御狩をなされます事、少しは武を練ることに相なりませうが、數多の鹿狼を獲給ひても天下國家の爲に益するところはござりませぬ。然るに拙者一人を獲給ふ時は、忽ち天下を平定し、戦國の亂世を全く靜めることが出来ませう、此事を言上のため推參仕りましたのでござります。いや途方もない大言を吐きましたものですから御供の人々は只呆れて互ひに顔を見合せてをりました。

信長公はにつこり笑ひ、

「左様か、其方は變り者ぢやの——然らば武道は何が勝れてをる」

「ハツ、文武二道に達しをりまして、上は天文を悟り、下は地の理に通じ之ぞ辨へすと云ふことなく、何卒御召抱へあつて其の能をお試しなされますれば成程とお解りになることと存じます」

と鼻の頭へ小皺を寄せ、齒を剥き出して、猿面そのままの顔をして、雄辯謀々と申述べましたので信長は大聲あげて笑ひだし、

「アツハ、。面白い奴だ、何處の者で姓名は何といふ」

「愛知郡中村の農彌右衛門の伴、木下藤吉郎と申します」

「さうか抱へてやらう、役や食祿に望みがあるか」

「人として祿の高きを望まざる者もなく、役の重きを好まざる者はございません。然し殿様の御鑑識に因り何なりと仰せ聞け下され度く存じます」

「ウム、然らば其方に馬の口取りを申附ける、それでも宜いか」

「ハ、ツ、有難き仕合せ。御免を」と信長の傍により乗馬の前へ出で、其口をヒタと取つて頭を下げた。

「皆のもの能く聽け、小牧の狩倉に、第一の獲物は猿ぢや。是に越すものはない、猿が馬の口を取つた、馬猿目出度い」

と仰しやつた。言ひ附けた信長も偉いが、快諾して直ぐ馬の口を取つた藤吉も偉いものです。

武家の奉公は別當が一番主人に親しい、身分の懸隔はあつても、馬に乗る時は始終傍を離れず言葉を交へることが出来る。依て藤吉の氣量を見やうが爲めに言ひ附けたものと見える。其れを

悟つてお受けをしたのですから清洲の城中へ御供してから御乗馬を熱心に扱かつて居ります。信長は非常な癡癡で、寒三十日の間、朝の六ツ時（午前六時）に起きて、一時（二時間）づゝ征馬をするのが常で、夜もオチ／＼安眠をしたことがない位の方、

「參れ」

「ハ、ツ」

「何時であるな」

「明六ツでございます」

「オ、征馬をいたす」と仕度をして御出掛けになる。

何時行つても馬場に藤吉郎が馬の口をとつてゐる。必ず殿をお待ち受をして居ります。或朝のこと、相變らず信長公は寢所で、

「參れ」

「ハ、ツ」

「何時ぢや。六ツであらうな」

「ハ、左様でございます」

「征馬を致す」と仰しやり馬場へ御出でになる。人の顔も更に分らん位、見ると相變らず馬の口

をとつて藤吉郎が控へて居る。

「藤吉、寒氣は強い」

「御意の通り、殿様、今朝は大層お早うございます」

「例日より早いか」

「ハイ、只今七ツ（今前四時）を報じましてございます」

「何じや、今のは七ツか」

「御意の通り」

「一時早かつた、後刻参るぞ。取次の者、憎くい奴ぢや」と行かんとするを、

「暫く御待ちを願ひます」

「なぜ留める」

「只今よりお歸りに成りますと御近習の者狼狽致し失禮がございませう。折角是へ御出でに成ら

せられたる事ゆゑ御征馬が宜しうございます」

「イヤ六ツ時より一時稽古いたす事に定めある、今朝六ツ時であらうなど申したるに、近習共七

ツと存じながら、左様でござると答へたるは、近習共が予を嘲弄いたしたのぢや」

「其れは殿が、六ツであらうなどの御言葉に由り、左様ではございませんと申上れば、不信の罪

41 と存じ、左様でございまして御答へを致しましたるものと心得ます。曲げて御征馬が御宜しうござ

います

「ウム、左様であるか、小賢しい奴だ。然らば征馬を致す」と馬に跨がる。程なく聞える六ツの鐘、

「藤吉、今のが六ツか」

「ハイ」

「ウム、戻るぞ」

「未だ御早い、今一時の御征馬を……」

「予は一時に限る」

「一時餘計に征馬を遊ばせば其れだけの御利益と存じます」

「なれども予は寒氣に耐へん」

「其れは未だ征馬が御充分でないからでございませう。最前から拜見いたし居りますに、手前が後歩で駆けますよりは、御馬を走らせる殿の方が御遅いやうで」

「何ぢや、予が緩いと申すか」

「ハッ失禮を申上たる御咎めなれば、私の跡へ御馬で追ひ附てい御覽じろ」と藤吉郎前方へバ

テ／＼駈け抜けて、信長の方へ向つて、鬻をバタ／＼と叩いた。
「無禮な奴だ。追ひ着いて其方の無禮を咎めるぞ、ハヨーツ」と馬場の中を藤吉郎が駈け出す跡から追ひ掛る、幾ら藤吉郎が早足でも馬と競争は出来ない、終ひには疲れてヘト／＼になつた處へ近寄つて、

「予に過言いたしたな」鞭を揚げて後から、藤吉郎を打たうとした時、

「私は殿の御馬に及ばずして、御鞭を頂戴いたしますが、御尊體は如何にございますか。未だ寒氣に御耐へ難うございますか」

「ウム……」云はれて見ると、聊か汗ばんでゐる。

「オー暖氣を覺えた」

「失禮とは存じながら、過言を申上たのは御身體を暖むる爲めに……」

「ウム、予が誤りであつた」と馬より降りて履物を御履きになると、暖かい。

「藤吉、汝は予の履物をいつの間に履き居つた、暖かいぞ」

「御馬上で汗ばんで在せられる所へ、冷たきものが當りましては、御毒と心得、御履物は懐へ入れて暖ためて置きました」

「ウム、能く細かい所へ其方は心附くな」と云つて、喜ばれた。

總て斯ういふ工合でありますゆゑ御氣に叶つて、

「役目は馬の口取りであるけれど、今日から其方を足輕に取立て得させる」
「有難い事でございます」

信長公の御聲掛りで足輕となりましたが足輕などは輕微祿のもので、城將の與り知る所でないのを、藤吉郎に限つて御聲掛りになりましたのですから、多くの足輕の中へ入つても巾が利くのです。足輕頭、藤井又右衛門の組下となり、誰が云ふともなく、御聲掛り／＼と綽名をするやうになつた。

織田家の御小姓頭取役を勤める前田犬千代丸利家といふ御方は、尾張國海東郡荒子の城主前田縫之助利勝の六男で、美男と武勇の評判が高いのでした。

藤吉郎の組頭、藤井又右衛門は、尾州清洲の近村藤井村の郷士であつたが織田家へ仕へて中々信用の厚い人でした。夫婦の中に最愛の一人娘お八重といふのが十九歳で非常な美人、辨天娘など噂が高い。

犬千代丸が此の娘に懸想して妻に迎へたいと思ふけれど、其昔は氏素性などといふことを、兎角厳ましく云つて、近親に頼んだが對手にしない、郷士上りの足輕頭の娘、貴殿は管公、天満宮の後胤、萬石以上で織田家の重臣、などと云つて取り合つて呉れぬ、犬千代は考へた、人を頼む

より直接に父の又右衛門に話してみようと、或日登城をして藤井に会い、別の小座敷に呼び、

「藤井氏、他聞を憚かる御願ひがござるので」

「ハ、ア、何事ござりますか」

「イヤ、チト恐縮の話であるが御身の娘お八重どのを拙者の嫁に頂きたいのである、他に縁組も定まつて居らぬなら、如何でござるか」

「前田様、御擲掄になるのばござりませんか、本當とは信じ兼ねます私の娘風情を」

「イヤ全くの話である、申すも恥かしい次第だが思ひきつて御願ひした」

「眞實の仰せであれば誠に有難い事で、何で違背がござりませう」

「御承知くださるか」

「結構なことで、こんな喜ばしい事はありませぬ」

「藤井氏は御承知下されても、肝心のお八重どのが否やを云ふやうな事は……」

「イエ、決して間違ひはござりません、親が許す縁談を萬一娘が拒みますやうなれば申譯の爲めに切腹してお詫を致します」

「其れほど堅く承知して下されば安心だが、卜易などに見て貰つたら好くないなど、いふ事はござるまいな」

「イエ御心配は御無用、決して左様なことは信用いたしません」

「成程、それまでに御受合下されば千萬忝けない。然らば善は急げ、話の極つた日が吉日、立ち

戻つたら用人の中田彌兵衛を以つて結納とやらを取交せ申す」

「心得ました、一刻も早く、愚妻と娘に申傳へて喜ぶ顔が見度う存じます」

又右衛門は役目を終つて我家へ急ぎ、駈上るやうに座敷に入り、

「お八重、おときも早く此處へ御出で、喜ばせる話があるのだ」

「御歸り遊ばせ、何か宜い御話がありましたの」

「ア、八重も座りなさい、今御殿で前田犬千代様にお目に掛つた、御美男で評判の好いお方だ、御家柄と云ひ、御武勇と云ひ、誰でも噂をしない者はない。あの犬千代殿が、八重を嫁に呉れたいふ御話だ、願つてもない良縁だ、此んな結構の口を外してならんと思ふから二つ返事で取極めて来た、何んと喜ばしい話ではないか」

「マア本當ですか貴方」

「後刻、彌兵衛さんを以つて結納を取交せるとまで仰しやつた。何んと宜い話ではないか、喜んでくれ、娘、大出世だ、こんな目出度いことは有るまいな」

「さるで夢の様な話ですと、お八重が前田様の奥様になれるとは、八重や嬉しいだらうねえ」

下俯向いて聽いて居りました八重はやうやく顔を上げ、

「阿父さん、お母さん、折角ですが、これはお断り下さる」

「エ、何んだと、御断りだと」

「お八重、よく考へてござらんよ、此良縁を御断りするなんて、お前どうかして居るよ」

「何んでいやなのだ、考へ違ひをするな、上下擧つて評判の好い御方を、鐘や大鼓で探しても又

とはないぜ、何でお前は嫌ふのだ」

「私のような不束者を、有難いことではございますが前田様とは身分が違ひます、均合はぬは不

縁の元、物には相当といふことがあります。末永く續くものではございませぬ、どうぞ前田様の

御立腹ないやうに御断りなすつて下さる」

又右衛門夫婦は呆れ返つてしばらく無言、

「ねえ貴方、どうも判らないのですね、私達が、是ほど喜んで良い縁だと思つても、八重が嫌

ひではどうも仕様がありません。是までの縁と諦めて、御断りなすつて下さる」

「それが出来ないのだよ」

「どうしてですの、仕方がないぢやありませんか。宅へ戻つて本人に話をした所が、心に濟まな

いと申しますから、残念ではございますが、御断り申しますと云へば、其れでも無理には仰し

やる氣遣ひはありますまい」

「其れが何んだよ、お前が承知しても本人が不承知ではと云はれたから、いえ、親が許した縁談

を嫌ふやうな事があれば、私が腹を切つて御詫をするよと云つたんだ」

「アレマア大變なことを仰しやつたんですね、夫では易を見て貰つたら、此の縁は永持がない

といふことだからと申したら如何」

「イヤ其れも駄目、易を見て心が變りはせんかと、念を押されたから、左様な事は決して信じな

いと云つた」

「マア其れも不可ませんの」

「相手が立派な御方だけに、あれほど堅く約束をして來たものを、今更どうすることも出来ぬ、

えらい心配が出来たなア」

今までの喜びは打つて變つて顔の色も青ざめ、太息を吐いて、迎も良い考へは出ないから、

親類の力を借りやうと迎ひにやつた。二三の親類が集つて相談を開いたが、名案も出ないので、

娘は一間に引籠つて涙ぐんでゐる、其混雜をして居る所へ勝手口から、

「今日は、よいお天気で」

「誰だえ」

「エ藤吉郎です……」

「ア、能く御出でだが、今日は少し家に取り込みがあつて、親類の御方がお集まりになつてゐるから折角だが又遊びにお出で」

「へエ、何でございます。御心配といふのは」

「何でも宜いよ」

「伺ひたいですね、一河の流れ、一樹の蔭、躑ぐく石も縁の端、まして組頭と云へば親も同様、組下と云へば子と同様、其組頭の一大事、心配するのは當然です、死なば諸共、生きなば諸共」

「不可ないよ、お前大きな聲で困るねエ、良人でも術計盡きて少し快惱て居るから、静かにして

お呉れ私が叱られるから……」

「誰だ、勝手の方で大聲をするのは」

「エ、藤吉郎が参りました」

「エー御聲掛りか。又輕口を利きに來たのだらう、今日は心配事があるからといつて歸しなさら」

「今さう申して居るところですが、心配事が聞きたいと云ひますので……、アレ、お前奥へ行つては不可ないよ」

「イエ、少々御組頭に御聞きしたいので……。エー是は御親類の皆様御揃ひで、何か御心配事が

おありとのこと、どういふお話で、膝とも談合、私にもお聞かせを……」

「お前は能くベラ〜喋舌るな。相談しても仕方がない、歸んなさいといふに」

「之は御言葉とも存じません。組下の私が御聞きしないで歸れますか、さア伺ひませう」

「蒼蠅な、ちやア話だけはするから、決して此事は他へ行つて話してはならんぞ……。實は今

日前田様から娘をくれと云はれて又とない良縁だから承知して歸つたら娘がどうしても嫌だと申

すので、先方から程なく結納品を持つて來ると云ふし、困つてゐるのだ、斷り切れないので」

「へエ然うですか。そんな事は譯はない。譯はなしコン〜チキだ」

「貴様はすぐ夫れだ、何が譯なしコン〜チキだ」

「良縁と存じ、御受合して歸りましたら娘が嫌だと申しますから、悪しからずといへば夫迄で」

「其んなことで濟む位なら心配はせん、若し八重が得心しなければ拙者が腹を切ると云つた」

「成程、流石は貴方だ、其の位の御覺悟はあつても宜い、能く仰しやつた。腹を御切りなさい、

私が御首を持つて言譯の御使に行きませう」

「黙らんか、腹を切るくらゐなら何で相談をするものか、何とかして、先方にも立腹なきよう、

此方の身分にも拘はらんやう、心配して居るのだ」

「御尤も、是は私に御任せ下さい。先方へ行つて何とか破談にして参りませう」

「お前が破談に出来るか」

「是しきの事、少し智慧袋を開けませう、エツヘツへ、」

「おい、又始めたな藤吉」

「宜しいです。纏める話は難かしいが、打毀すことなら造作ありません。萬事は私の胸の中。

貴方に瑾が附かず、お八重さんにも瑾附かず、先方でも心持を悪くしないやう、三方納めれば宜

いでせう、一寸行つて参ります」と立ち上るから、又右衛門は驚いて、

「マア、待ちなさい、滅多なことを云つては可けない」といふ中に、藤吉郎はドシ、急いで

前田家の門前迄参りました。

こちらは前田犬千代丸。御殿から戻つて参り、

「彌兵衛や、今日藤井家と縁をきめた」

「あのお八重どのと、それは御目出度うございます」

「ウム、喜んでくれ、話の定まつた日こそ吉日であるから結納の取交せだけ致して置きたい。御

苦勞ぢやが其方使ひを頼む」

「承知いたしました」

「ソコでかういふ目出度い時に人が来て、話などをする中に、不吉の言葉などが出るとどうも心

持が悪いから、誰が来ても只今來客だといつて断つて上んやうにしてくれ」

「心得ました……」

「エ、御頼み申します、頼みます……」

「オヤ、モ、誰ぞ参りました」

「断つて呉れよ」

「ハイ」

彌兵衛は強い近眼の人です、玄關へ出て障子をサラリ、

「入つしやいませ、何方様です」

「是は、彌兵衛さん」

「何んだ藤吉郎か。頼む、なんて馬鹿にするな、お辭儀をさせをつて、……」

「貴方がよく見ないのが悪いぢやアありませんか」

「貴様は玄關から頼むなぞといふ奴ではない、又喋くりに来たのだらう」

「エ、少々旦那様にお目通りを」

「今御來客だから歸んなさい」

「へエ、左様ですか、お目に懸れませんか、ぢやア歸りますが一寸申して置きますよ、何時もの

藤吉ならば勝手元から参りますが今日は藤井又右衛門の使ひに伺ひましたのですから御玄關より参つたのです、御來客とあれば口上は言はずに歸つたと、申上げて下さい左様なら」

「マア少し待て、御來客ではあるが一寸御取次をするから」

「エへ、願ひます、お早くどうぞ」

彌兵衛が奥へ来て、

「アノ藤吉が参りました、御聲掛りが、今日はいけませんな、猿面は。猿は去るに通じます。宜しくございません」

「追ひ歸せ〜」

「歸さうと存じましたら藤井殿の使だと申します、で御取次をいたします。友白髪の八千代まで、其御縁談の話の中へ彼の顔は不吉で、猿面冠者では、然し如何致しませう」

「マア宜い、會はふ、此方へ通せ」

「ハッ」

案内に連れてチヨロ〜と這入つて來た藤吉は頭を下げ、

「へエ今日は、前田様には益々御氣嫌よろしく」

「藤吉、藤井殿の使とはなんだな」

「イエ使ではないので私が申述べたい事がありました」

「コレ藤吉、馬鹿にするな使だと申たでないか」

「さう申しましたかな、ハア」

「貴様はどうも呆れた奴だ話にならぬ」

「アハ、、、何の話があるか知らんが今日は歸つて又來るが宜い」

「へエ、實は貴方様の御縁談の儀につきまして」

「ア、さうか、お前の耳にも這入つたのか、早いものだのう、それで祝詞を述べに來たのか」

「どう致しまして、ア、情ない」

「コラ〜そんな言葉はよせ、目出度い時に」

「ちつとも目出度くないのです、涙が出ます」

「彌兵衛、大變な奴を引張り込んだなア」

「相すみません、突き出します」

「マア待て、藤吉話があるなら聽かう、なんだ」

藤吉郎は席をすゝめ、

「それでは申上げます、此度の御縁談は破談になさいませ、其御意見に参りました……」

「何と申す、どうしてだ」

「ハイ、貴方は數萬石の御城主、御先祖は菅原の道真公、又右衛門とは御身分が違ひます、釣合ぬは不縁の元」

「イヤ宜ろしい、お前は歸れ、爲を思つて呉れる親切は禮を云ふぞ」

「御當家の不爲と存じ、日頃御最負を頂きます私故、御注意申上げますので、御一考なさいませ」

「ウム、未だ申すのか、誰かに頼まれて來たな、八重は拙者を嫌ふのだな」

「イエ決して」

「それならモ一宜いから歸つて呉れ」

「あの親不孝な娘を、あの曲つた心の娘を」

「イヤ、誰が何んと申しても、武士の一言、今更破約にはいたさんぞ……」

「ハア……之まで申し上げても……」藤吉はちつと考へてをりましたが、

「モウ斯うなつては隠し切れません、本當のことを申します」

「こんどは何を云ふ、次ぎくに考へるな。アハ、ハ、ハ、ハ、眞實の話とは」

「エ、申します、アノ娘には、アノ娘は親の目を忍んで深い約束をした密夫がございます」

「眞實の話か、よも偽りではあるまいな、他の事とは違ふぞ……」

「エ、全くです、種々な事を申上げて、御氣を變へやうと存じましたが御聞き入れがないので」

「それなら直に破談としよう。然し藤吉、密夫の名は知つて居らうな、知らぬと云へば偽りだぞ」

「エ、知つてをりますとも」

「ウム聞かう何者だ」

「ウ、夫れは知つて居りますが申し兼ねますので」

犬千代丸は一刀を引寄せ、

「サア申せ、言はねば偽言ぢや、拙者を偽つて婚儀のさまたげをする奴ならば斬つてやる、サア言へ」

用人の彌兵衛も刀を手に、

「藤吉の大馬鹿者め、智慧者だなどの評判は、猿智慧だつたのだな、サア言はないか」

藤吉郎は兩手を上げて、

「申します、申述べますからお靜かに願ひます、實はその私で……」

「何だお前か」

「へー私……」

犬千代は、ブーツと噴出した。

「其方が八重と」

「左様で、此世ばかりか二世の約束……」

「アハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、」

「ハ、ハ、ハ、ハ、」

犬千代と彌兵衛も笑ひが止まりませんでした。

「可し、其れでは拙者が又右衛門に話をし、早速公然夫婦に纏めてやらう」

「イエ夫れには」

「彌兵衛面白い事になつた、結納どころではない。人の媒酌をしなければならぬ、兎に角藤井へ参つて、御約束を致しましたが仔細あつて破談にすると云ふてくれ。理由を聞かれたら、何れ主人が御目に掛つて御話をするとな」

「ハイ」

藤吉郎が挨拶をして歸らうとするを、犬千代は止めた。

「ア、待て藤吉」

「未だ御用がありますか」

「今の話だが、お前と八重が夫婦にならぬと、偽られたのだから其方と又右衛門に、刀を持つて挨拶を聞くぞ」

「へエ……」

「夫婦になれば、祝儀の品を仕はさう、藤井殿にも宜敷言ふてくれ、モウ歸つてもよい」

ハイと答へて前田家を出た藤吉郎は考へた。

「妙な事になつたぞ、扱此納まりはどうならうか、少し困つたぞ、組頭が怒るだらう……」腋の下へ流るゝ汗を拭きながら藤井の家へ歸つて來ました。

「へエ只今」

「藤吉や御歸り、御苦勞であつた、前田様へ伺つたかえ、何とか御話がついたかえ、娘は未だ泣いて居るのだよ」

「藤吉、犬千代様にお目にかゝつたか」

「お目通りをしました、さうして破談に出来ました」

「それは本當か、オイ藤吉」

「マア夢の様な話だと思つてゐたが、斯うなつてお前の力で無事に納まるとは考へられなかつた。ほんとうに夢のようだ、お八重、藤吉に御禮をお言ひ」

「マア少し待つて下さい、之からが六ヶ敷いので」

「何を、早く話せ」

「組頭と前田様が確かり約束なすつたものを無理に破談にするのですから口から出任せにやりました」

「何と言つた」

「お八重さんは親不孝だの、曲つた根性だのと、マア終りまで御聞きなさい。何を言つても、犬千代様は平氣な顔をしてゐる。仕方がないので、エ、申しにくいがお八重ちゃんに密夫があると言つたのです」

「何んだと、此野郎」

「藤吉、お前は〜……」

「マア〜お待ちなさい、手を出しちやいけませんよ」

「ウ、ム。夫れから如何した」

「其方が跡形もない事をいつて、此縁談を破りに來たのだらう、といふのです。本當の話です、と言つたら密夫の名をいへ、言はねば免さんと刀を出されたのです。私も困りました。人に迷惑も掛けられぬので、私だと云ひました」

又右衛門も、妻のおときも呆れて顔を見合せて居りました。

「何だお八重が變つて居ても、此猿面に……」

「夫れでは破談にする、己が媒酌をしてやる、八重と夫婦になれ、ならねば偽つたんだ、又右衛門にも汝にも、刀で挨拶するといふのでした、此先貴方の御考へは……」

「其れは困つたな、おとき、どうしたら宜いのだ、このお喋舌の馬鹿者が、前より尙悪くして來をつた」

「此んな事にしておくれと誰が頼みませう、お前は如何する氣だえ……」

「私は今考へたのです、貴所方からお嬢さんに話をして、假令三日なりとも、私へ嫁に來て公然夫婦になれば宜いのです、表面だけです、三四日経つたら、木下家の家風に合はぬ女だから離縁すると」

「生意氣云ふな」

藤吉郎の考へ通り外にとるべき手段もないのでお八重を呼んで夫婦が右の話をする、下俯向いて居りましたが、

「お父さん、お母さん、前田様では、身分の相違と御ことわり申しましたが、藤吉さんなら末の望みのある人ですから一生添ひ遂げ度うございます、どうぞお嫁にやつて下さいまし」

之を聞いて夫婦は、一度は呆れましたが、よく考へて見れば、我子ながらも八重は利口、顔は醜いが才氣は勝れ、足輕ながらも殿様の、御覺え目出度い御聲掛り、出世の見込みはある人と、娘は考へたらう、と理屈を付けた。こゝで相談一決致しました、處へ前田の用人中田彌兵衛が破約を申込みに来たので、藤井又右衛門は、赤面しながら恐るゝ、近親のものに連れられて、犬千代の屋敷へ、詫かたゝの挨拶に出ました。

之を聞いて、流石は犬千代、不快な氣分を、サラリと捨て、此婚禮の仲人を引受けた。さうして信長へ申上げ、御許しをうけて、足輕長屋で兩人は盃をあげました。

此時、藤吉郎の着た禮服の肩衣は、古い轡を應用したといふことですから、可成貧乏であつたと見える、このお八重さんは後年、北の政所と崇められた、お彌々の方であります。

良い妻を得た、木下は御主人大事と勤めて居りますと、茲に伊勢の國大河内の城主、北畠前大納言具教卿の大軍、尾州清洲を攻めんと注進ある。敵は早くも、佐屋川まで來ると聞いて、織田家は八千人、急ぎ出陣の用意をした。

藤吉郎は森三左衛門の配下になり、愈々出陣となる、其時お八重が、
「貴方、目出度い御出陣をお祝ひ申します」

三寶の上にあります、土器にて水盃、肴は勝つて勝栗よろ昆布、

「目出度く御歸りを御待ちいたします」

「ウム、馬に乗つて歸つてくるよ」

之は出世をして歸陣するぞといふ自信の言葉でありました。

扱て總大将織田上總介信長は大奮に呼はつた。

「敵の北畠勢は二萬五千と聞く、我軍は八千人あり、戦は軍勢の多少に依つて勝敗を決するものにあらず、速に出陣して敵を微塵に砕きくれん、汝等も豫て聞かずや、木曾の冠者義仲は養和元年木曾の桐岸に旗を揚げ、越後國日出山の強勇、城の太郎資長の五萬餘騎を小勢を持つて微塵に破り、それより筑摩川に出馬せし時、義仲の軍集めたれども僅かに五千五百、其れよりして忽ちの中に北陸七州を蹂躪なし、平家の大軍十萬餘人を加賀と越中の境、但利伽羅峠に討破り其勢旭の昇るが如くとあつて、自ら旭將軍と名乗つたと云ふ、それに比ぶれば八千の軍を以つて、萬餘人にあたる、何んぞ恐るゝ敵にあらず。それ、佐屋川まで進軍致せ」

勇ましき信長の言葉に意氣盛となつた織田勢は佐屋川邊りに陣を立てた。
先陣の大將森三左衛門義成の陣に居た藤吉郎は喜んだ。

「今度の戦ひには功名を現はしたいな、富士川の時のやうな事はあるまい」と戦の始まるのを待

つて居ると川を境に三日の間睨み合つて居る、敵は戦ひを仕掛ける様子が見えない。
「ハテナ、ウーム敵方に何か策略が有るな、大軍を以つて押寄せながら小勢に向つて三日も對陣
睨み合つて居るのは合點がゆかぬ、宜し己が敵陣の様子を斥候してやらう」と陣外に出で革具足
に身を固め、陣笠を戴き太刀を背負ひ、小刀を前差となし二間の槍を引下げスタ／＼佐屋川の堤
から川邊へ出て遙か向ふを見ると、敵方先陣の鳥矢尾石見守、安保若狹守の旗馬印が風に翻つ
て居る。

「オ、勇ましいいなア」暫らくちつと見て居たが、

「ハテナ、敵の陣立が川より餘程離れて居るぞ、ウム計略々々、宜しつ」

何を考へたか陣笠をぬぎ、革具足を脱ぎ、櫛鼻禪一つになつて刀を背負槍を携へ、ザブリ／＼
川の淺瀬々々と探り／＼涉つてゆき、丈の立たない處へ行くと拔手を切つて泳ぎました。萬能に
達して居る藤吉郎は水練も又達者、河童が呆れて弟子入りをする位ですから水中は平氣なもの、
向ふの河岸へ上り、水振ひをして河岸を半丁ばかり堤に添ひ四ツ這になり、草叢からソツト顔を
出して堤の下を見たのは、敵の鐵砲組弓組の備へがありはしないか、と見届けたのです、然し何
の備へもなかつた、又四ツ這となつて前へ出ると二丁程先に茂れる森があつた。其中へ潜り込ん
でソツと立上り、木蔭から遙かに敵陣の様子を窺ふと、左の方に備へたは鳥矢屋石見守、安保若

狹守兩軍とも一千人宛嚴重に備へを立てゝゐる。

暫く見てゐた藤吉郎は、今川の軍師松下之綱の許で軍學兵法の奥儀を極めて居ります。殊に駭
河の富士川で戦ひに大功を顯はし今度は二度目で戰場へ出ても建の上座に居るやうな心持、木
つく／＼と敵陣を見てゐると、左右の茂れる森の中にこそ／＼居るのは人の氣配、所謂殺氣、木
下の目には之を看破る事が出来た。伏勢である。翺けて來た鳥が森の中で羽搔を休めずに直ぐ彼
方へ飛び行くのであつた。森の中の兵を恐れて……。

「成程、尾張の軍勢が攻込むのを待受け、左右から引挾んで討たうといふ計略だな。こんな拙き
計略に掛けやうとは、織田家の家來に木下藤吉郎高吉といふ、陳平、張良、孔明を欺くやうな
軍師の居ることを敵の奴等は知らぬと見える、アハ、ハ、ハ、」

笑ひながら再び踵を回して四ツ這ひになり、林の中から川を渡り返し、脱いである具足を着け、
陣笠を頂き、槍を下げて先陣の森三左衛門の陣へ來ました。

「お願ひ申します」

「木下か何の用だ」

「是は近藤か。森様へ藤吉郎がお目に掛つて申上げる事があるから取次をして貰ひたい」
「何だ高慢な顔をして、用の次第をいへ只御目にかゝりたいでは取次が出来ぬ」

「イヤ軍事についてお目に掛りたいのだ。こゝで話をする譯にはゆかぬ」
「ウフ、鼻の頭へ皺を寄せて軍事についてなど言ふ面ぢやない」
「オイ、冷笑すなよ。面構がわるくもどんな剛い事を腹の中に貯へて居るか分らないぜ。マア宜いから早く取次いで呉れ」

「待つてろ面倒な奴だ」

ぶつ／＼言ひながら足輕が順を以つて三左衛門に此趣きを告げた。

森は藤吉郎が新參の小身者ではあるが尋常ならざる人物といふ事を承知して居たから、今しも采配取り八人を集めて軍議の處でしたが直ぐ面會を許した。

「藤吉か、近く寄れ」

「早速御目にかゝれまして有難く存じます」

「何か軍事に付いて話があるか」

藤吉郎は邊りを見廻した。

「秘密の儀を申し上げますので、御傍の御方々失禮ながら御遠慮を願ひたく存じます」

「さうか、各々暫時遠慮をしてくれ」

立上つた八人の采配取りは、輕輩の分際として烏計がましい奴だと嘲けりながら其座を去りま

した。

「何事ぢや、申せ」

「さて森様、敵方が備へを立てゝ居て、川を渡つて戦ひを仕掛けないのはどういふ譯か御認めがつかましましたか」

「ウム、其事に付いて考へて居る。大軍の敵が川を渡り戦を仕掛けるのが當然ぢや。夫れをせんのは何か軍略があるものか、どうかして其策を看破りたいと、今も諸士を集めて評議をして居るところだ」

「ハア、何時まで此方でお待ちになつても敵軍は戦を仕掛けては來ません」

「夫れはどう云ふ譯だ」

「實は拙者先刻此の川を涉りました」

「ナニ、川を涉つたと、ウム」

「二丁程川向ふへ參つて敵陣の様子を見極めますと、先陣の安保、烏矢尾の軍は、サア私の目算では先づ二千位でせうか、さうして左右の森の中に伏勢が居ります」

「ウム、さうか、成程」

「此方で悶かしく思つて此の川を涉り、進みますと敵は軽く戦つて退却いたしませう。勝に乗じ

て追駈けると、左右から討つて出で伏勢が味方を破らうといふ計略と存じます。然れば當方で

も又敵の計略の裏を掻く名案をお考へになるのが宜しきかと存じます」

「ア、感心した。能く敵の戦法を看破つた。早速此段我君へ言上致す同道せよ」

直ぐ三左衛門は藤吉郎を連れて信長の本陣へ参りました。今本陣では、織田家名代の采配取りが、綺羅星の如くに居並び、軍議評定の真最中、

「申上げます。森三左衛門がお目通りを願ひます」

「オ、森か、どうだ敵軍はまだ動かぬかな」

「ハイ、其事に就きまして罷り出しました。只今私の組の大島筑後の組下木下藤吉郎が、川を越

し敵陣近くへ参り、敵方の戦法計略を見て立ち歸り、細かに語りました。敵の戦法は斯様でござ

る」と藤吉の述べたことを申上げました。

「ウム、左様か、卑怯な奴だ。併し藤吉は愛い奴ぢや。三左衛門藤吉を連れて参れ」

「お幕張の外に控へさせてムいます」

「目遣りを申付けける」

早速三左衛門は藤吉郎を同行、再度君前へ出る。藤吉は遙かに退り、平伏をした。

「オ、藤吉か、近う寄れ。其方が敵の計略を看破りしか、其の働き天晴なれば今日より士分に取

立てるぞ」

「ハハッ」

「祿は追つて定めてやる。尙ほ評議衆の一人に加へ遣はすぞ」

「ハッ、重ね々有難き仕合せに存じます。只敵の戦法を見定めましたるだけにて士分にお取

立、其上評議衆にお加へ下さる段、厚く御禮を申上げます」

太閤様も初の出世で、餘程嬉しく感じたものと見えました。

「當座の褒美として甲冑を得させよう。コレ、藤吉に黒絲の鎧を遣はせ」

「ハッ」

頂いた甲冑を直様陣外へ出て着け直し再び罷り出しました。

「お蔭様をもちまして武士の端に加はりました有難く心得ます」

「オ、革の具足と違ひ其の鎧を着した姿は中々立派だのう。藤吉、男前が上つたぞ。アツハ、

ハ、」

信長公も膽力は大きい、大敵を目前に控へてまだ戦はぬ先に道化を仰しやる、と藤吉郎はにつ

こり笑つた。

改めて評議となる。軍師平手監物が進み出でた。

「味方は先づ敵の策に乗ると見せ、此方にも伏勢の用意をし、敵陣へ繰込み、敵の伏勢の出づる時、却つて敵の後から急に伏勢を起してこれを打破る時は、味方の勝利疑ひなし」と申上げた。信長始め諸將は此の作戦に勇み立ち、何れも手配り嚴重に、先陣の將森三左衛門は八百人の勢を引いて佐屋川を渡れば、續いて柴田權六郎勝家の五百人、佐久間右衛門信盛の五百人、旗馬印を伏せ佐屋川を渡つて場所よき所に潜伏をした。此時森の軍勢は態と敵の計略に乗ると見せて戦を仕掛けた。敵方の先陣鳥尾岩見守、安保若狭守始め一度にドツと攻め来るを織田方は戦ひながら敵の伏勢の出ようとする處を味方の伏勢を起して、其の背後より戦ひを仕掛け、火水になれと攻め立てれば遂に敵方は總敗軍となつて退却いたしました。織田勢は戦ひ上手に、引鉦を鳴し佐屋川の西方へ引揚げ茲に陣所を構へました。扱て此の上は敵の本城へ進軍なさんと評議をしたが誰一人として猶豫をせんとする者はない。次の大勝利を今から語つて居る。

ところへ陣中見張りの者が本陣へ來た。

「エ、申上げます。只今陣外へ斯様な立札がございました。御覽に供へまする」

持つて來たのを見ると、四分板を、半から割り青竹を割て真中へ挟んである。假名文字が書いてある。

いきほひに、じようぜんとするものは、もつともあやふし。いはにうたれて、しするものなりと二行に書いてあるのを信長公が見て、

「是は何だ」

柴田、池田、森、丹羽の人々も更に文字の判断が付かない。平手監物が進み出で、

「是は恐らく敵の計略で斯かる立札を致し、味方の勇氣を挫かうといふのでういませう。斯かる小事にお構ひなく、直に御出馬なされるよう」

「ウム、然し待てつ、藤吉を呼べ」

「ハッ」

早速出た藤吉郎、

「御用でござりますか」

「今陣外へ斯様なものがあつた。皆が判じたがわからん。汝は何う見る、判断いたせ」

「ハッ、御一同様が御覽になつてお分りなき事を、私が拜見しても分らうとは心得ませんが、折角の御意、拜見仕ります」

立札を暫く見てハタと手を打ち、

「拙者愚案を廻らしますに、いきほひは、勢州の勢といふ字、いはは岩倉山の岩、かゝ判じます

る。勢に乗じて敵國へ深く乗込む時は、味方最も危し、岩にうたれては、殿様とは御同家ながらも御仲の悪い、岩倉山の御城主、織田信澄公、常に清洲城を狙つてをられます故、我君遠く軍をお進め遊ばさるる時、其のお留守へ、岩倉勢突然攻め掛る時には清洲城一刻も堪へられず乗り取られます。何者か味方へ忠告の立札と存じます。宜しく御賢慮を願ひたく」と殿の御顔をぢつと見上げた。

「ウム偉い藤吉、能く判じた。一同如何ぢや」

藤吉郎は苦笑した。自分で書いて自分で判じたのを。木下の智に今更の様に感心して、一同木下の顔を見た。

ソコで又々評議。さらば岩倉山を攻め滅し隣國を安泰に致して、而して後に勢州へ向はん、ソ

レ岩倉山へと云ふ事になり、夫れより清洲へ引返し、直に手配にかゝつた。程なく先陣は柴田權六郎とさだめ、第二陣は池田勝三郎の五百人宛一千人は岩倉山へ急進する。續いて佐久間、森、佐々等の軍勢、堂々と出陣なす。

此時、岩倉方は大將織田伊勢守信澄病中なれば、若殿鶴千代丸十六歳、城主信澄に代り總軍を司どり堀尾忠左衛門、山内忠左衛門、織田源左衛門、此の人々は其の頃岩倉城の三家老といはれ有名であつた。鶴千代を輔佐し、敵軍取詰め來るも更に動ぜず、二千五百の城兵に下知をなし、

狭間、多門櫓等に弓鐵砲を配りて大手城門前には柵を構へ、敵軍城外に近寄らば微塵に破らんと、手壓引で待ち受けたり。

岩倉は小城なれども難攻不落、山の中央に城廓があつて、其昔赤松則村入道圓心の築いた城、城外より城中を見透す事は如何なる手段を用ひても決して出来ぬ。折柄柴田池田の猛軍は、何程事やあらん只一ツ時に攻め落せと、信長公の軍令を破り、急速の戦をしたところ、小敵と軽く見た爲め、敵方の三家老が必死の勇戦にめちやゝに破られて、敗走した。是がために三陣四陣も後退した。

城兵はドーツと、勝鬨を揚げた。

信長はハツタと怒り柴田池田の兩軍を後陣に下げて謹みを申付け、森三左衛門、佐久間右衛門を先陣二陣にすゝめた。

其の翌日は信長の下知に依り交代した森、佐久間の軍勢、大手城門へ押掛けようと鼻を突く許りの急坂を潮の湧くが如き勢ひにて、激しく鐵砲を撃掛け、攻めかゝつた。

然るに城内は静まり返つて恰も人なきが如くである。此の様子を見た森、佐久間の兩將、さては味方の勇氣に恐れ、敵は手向ひ出来ぬとみえる、それつ、柵を破れ逆茂木を破れと烈しく下知に及べば、血氣の面々我もくと柵を破り逆茂木を引抜き、城門際へ取詰めんとした。

此の有様を見た堀尾忠左衛門、織田源左衛門は高檣から下知を傳へて居つた。充分織田勢を櫓の近くに引寄せおいて、狭間多門を一度に押開き、鐵砲の筒口を揃へて拳下りに撃出し、玉を填め換へ詰めかへ、矢弾の飛ぶこと雨霰の如くであつた。

織田の先陣二陣は將棋倒しにドツと崩れた。岩倉方は城内に籠つて戦ひますから有利である。織田勢は足場の悪き無理なる戦ひ、味方の同勢を費すばかり、之を見た信長は、『先陣の戦ひ難儀なるぞ。進め、後陣と變へろ』と采配を振り切るばかりに下知をなす。心得たりと八千餘人入れ換へ、差換へ力を盡して攻め立てたが、堀一重だに破ることが出来ませぬ。

流石の信長も此の小城に斯許りの將兵を傷つけ、堀一重をも破れず、此の上長く戦つてもますます味方の不利益と、引き鐘を鳴らして備へを遙かに後方に下げた。此の後は如何にして破らうかと、先づ遠巻きにして敵の様子を窺ふのであつた。佐屋川の合戦に燃えるやうなる勢ひを得た信長公も、岩倉攻めは失敗であつた。藤吉郎は只一人、後陣の柴田權六郎の陣を訪ねた。

「是は木下殿、折角ですが當陣は御上の御怒りに觸れて謹み中です。御許しの出ない内は謹慎して居られますから御面會はなりませんまい」
「夫れは知つて來たのだ。何でも宜いから藤吉が來たと取次いでくれ」
「ハア、然らば暫らく御待ちを」
柴田權六郎は軍令に背いて敗れた爲めに後方へ下げられ謹みを申しつけられ味方の敗戦を聞いて齒をかんで居た。

「何だ」
「只今評議衆の木下殿がお出になり御面會をと申されます。御謹慎中ですと申しましたら、夫れは心得てをるぞ、と斯様申します。如何致しませう」
「ソーか、然らば此方へ通せ」
案内に尾いて藤吉郎が柴田の陣へ來て見ると、勝家は熊の皮の敷皮へ安坐をかい居た。其の怖い顔ときたら、北向きの鬼瓦か、鹽辛を嘗めた閻魔様のやうだ。

「藤吉、何の用があるのだ」
「此度はお氣の毒に存じます。御心中お察し申します」
「ウム残念だ。己が未だ下知をせぬ内に先手の奴等が功名を急ぎをつて、軍令を破つてしまつた。」

己の心中を察してくれ」

「左様で、然し戦に勝てば御免になつたでせうが、あの敗軍では、エへ、、、」

「それを言ふな。聞いては居られん」

「併し味方の續いての敗軍は、誠に大慶至極」

「馬鹿、馬鹿者、何を云ふのだ。挨拶の致し方もあらうに味方の敗戦を大慶至極とは、歸れつ」

「アハ、、、御怒りに成りましたか。マア御聞き下さい。柴田様、池田様お兩人に取つては大慶と申した意味で」

「黙れ、未だ言ふか。何んで兩人が大慶だ」

「然し、交代した森、佐久間の御兩所が充分の功を現したる時は、貴所と池田様は如何なさる。

御兩所の働らく役を他人に勤められ、大功を立てられたら先づ武士道として切腹でせうな、さう考へますと味方の敗軍がお二人の命を繋ぐこととなり大慶かと存じます」

「ウーム、其方が始めからさう言つて呉れれば腹は立たん。實は左様にも考へられる。だが味方の敗軍は残念だな」

「ソコです。私の參つたのは其の話です。私が案内しますから御兩人の力で此の城を抜いてお了ひなさい。さうすれば御怒りも解けて御賞美になります。夫れをお勤めに出しました」

「ウム、然し味方の軍勢必死の戦ひにも堀一重破れぬ城を、両手千人では如何に戦つても城を抜く事は出来まい」

「奇計を用ゆるのです。必ず破れます」

「藤吉郎、見事に破れるか。大丈夫か」

「お勤めに來る位ですもの、智計妙計肺肝にあり。御安心あれ今宵から明日の明方迄に落城させます」

俄かに元氣の出た勝家は、池田勝三郎を迎ひにやつた。之も元氣のない池田は何事かと早速柴田の陣へ來た。

「オイ池田、急用だぞ」

「何の用だ。ヤア藤吉郎、來て居るのか汝は立身、己達は謹慎、面目ない」

「之は池田様、元氣がありませんな。アハ、、、」

「笑ふなよ。貴様が見たら己達は馬鹿々々しいだらう」

「オイ、池田、此方の話を先に聞けよ」

「如何いふ話だ」

「今木下が來て、我々の爲めに斯う云ふ話だ。名智の藤吉が案内するといふ。藤吉に頼んで城攻

めにかゝらうではないか。サア勇氣を出せ、木下の智計を信じて行かう」
「藤吉が我々の恥辱を雪いでくれるか、宜うし、行かう。木下頼むぞ」
「御二方、細工は流々仕上げを御覽じろ。此の計略は今申上げません。拙者をお信じください。併し私一人では出来ません。御兩陣から五十人づつ足の達者な、身體の強い足輕を御借しください。藤吉の下知は御二方の下知と心得、何事も背いてはならんと一同へお申し付を願ひます」
「宜し、言ひ付けやう」

「それから必要の物は、火薬が一箱、細引と太引、松火二三十本、草鞋は穿き代一足づゝ、三度ぶりの辨當の用意、それに斧、鋸、カケヤ等で宜しうムいます」
「それ丈で宜いか。どう云ふ計略か聞きたいのう柴田」

「計略は密なるを以て可しとす。エツへ、。明朝七ツ時頃と存じます。岩倉山に出火致しますから、火事が始まつたと見たら、兩將より御本陣へ届けを出し、奇計を案じ候間、我々兩人の手にて城を只今破ります。大手よりは總攻めを願ひたく、と斯様に申上げるのです。然らば其方達に任せると云ふ御意があるに相違ない。さうしたらドシ／＼大手へ攻め掛けて下さい。其時はモウ城兵共、手向ひは致すまい。城門を開いて白旗を揚げるでせう。兜を脱いで降参をいたしませう」

「オイ藤吉、そんなに都合宜く行くな。貴様は、敵も味方も一人でやつて居るやうだな」
「拙者の云ふ事、なすことに間違ひはない。マア御安心を、さうして今迄の御恥辱を一遍に注がれます。若し出来なければ腹を切つて申譯をいたします」
兩人は大いに喜び、組下の足輕の中から五十人を撰み出し、それぞれ仕度をさせて木下の供を申し付けた。

藤吉郎も身輕の挺装をして先に立ち、岩倉山を指して裏道傳ひに、下山を越して頂上近くに
つた時、
「サア是れから仕事を始めてくれ。皆んな手分をして枯木枯枝を拂へ」
下知の下からド／＼木を切倒す。斧や鋸、カケヤなどで細かくして足輕達に背負はせて、上へくと上る。疲れると休息させて又昇る。峯吹く風は物凄く、ゴ、ゴーツと鳴りひびく。

「此處は何處だらう」
「恐ろしい風だ凄いなア」
「皆んな此處へ来て見な。どうだ下の方は綺麗だらう」
「こゝは何處でムいませう」
「いゝ景色だなア」

「アツ、目の下に城が見える」

「成程城だ」

「捨て松火や篝火で一そう綺麗だな。目の下は岩倉城だ」

「ア、左様ですか、味方の陣から見ると高い様ですが、此處へ來ると下にある。不思議だなア」

「アハ、。何が不思議だ。左の方にヒツソリ、餘り燈火も見えぬやうな、あれが汝等の陣だ」

「ヘエ、あれが我々の陣屋ですか」

「サア是からだ。背負て來た粗孕や薪を皆なこゝへ積んでくれ」

藤吉郎は差圖をして、松の木を切つたのを下にして、其の上へ松葉を乗せ、又其上へ火薬を少しづゝ入れ、松の枝を積み、又松葉を積み、小山のやうにした。其の幅は十間ほど、長さは三十間ぐらゐに、

「それ、松火の火を點ける」と下知すれば、火薬へバツト火を移したから、松の木、松葉がブシク煙つてくる。おひくく煙るので、松葉燻しの大々的なもので盛んに煙るく。一面の煙りとなつた。

エヘンくく、ハツクシヨく、八方で咳や嚏をはじめた。これは堪らんと涙をこぼして居る。

藤吉郎は、ちーツと空を見上げて居ると、夜の明ける頃、ブーツ、ブーツと吹き下す朝嵐に此の煙りは城内へ入る。城内にては見廻りの人達が、

「オイ、各々恐ろしい煙だな。火の要心に氣を付ける」

「何處から煙るのか火の用心は充分して居るのに」

エヘンく、ゴホンく、アレく、コレハく、と云つて居る内に煙のために口が利けなくなつたので、俄かに城中は大騒ぎとなつた。

「サア見ろ、城中は大混乱になつたぞ。いよく大功を現はす時が來た」

「どうだい此の風向きは」

「さうだ敵の方へばかり吹き付けるぜ」

「木下様は天文を知つて居るんだぜ」

「何んでも出来る智者だなア」

「皆んな、簀へ入つて竹を切つて下枝を拂へ。さうして燃えてをる松を下の方へ叩き落すのだ」

「心得ました。ソレ火攻めだく」

多くの燃えさしが城中へヒラく火の雨のやうに降つて行く。城内は上を下へと大騒ぎ。

「ソレ二の曲輪へ火が付いた」

「武士詰所へ火がかゝつた」

「アレ本丸へ飛火がした」

といふ内に四方八方火となつた。

此方は信長の本陣、今岩倉城の方より非常な煙り、向の山には激しき火の手、これは如何いたした事であらうと見て居る處へ柴田、池田の兩將から言上、我々此度の恥辱を雪ぐため、城内へ後方から火攻めにいたし候、何卒、大手より一度に總攻を願ひたう存じます。これを聞いて信長公殊の外喜び、

「兩人を呼べつ」

兩將は御沙汰をきいて、雀躍なし御前へ出た。

「能くも致したり兩人、謹み許す、先手を申付ける、早々攻め掛れ」

「ハツ、有難く存じまする」

御受けをなして陣へ歸り、二手の軍一千餘人、雁金の旗は權六郎、揚羽の蝶は勝三郎、関の聲を上げて大手の方へ攻掛る。之につづいて森三左衛門、佐久間右衛門、佐々内藏介等々の軍勢、我も我もと攻上がる。ワー、ワーツと関の聲を揚げてすゝむ。

此時、城中では織田伊勢守病床にて、天を仰いで嘆息なし、三家老を呼びました。

「最早斯く相なれば致方なし。我は切腹なす。鶴千代を連れて降参せよ。味方を一人も死なすな。皆で鶴千代を守つてくれ。信長も同門、一門の事なれば許さぬ事はあるまいと思ふ」

三家老は落涙なし、

「残念ながら御言葉の如く仕ります。若殿の御事は御心配なく、殿に代つて我々が……」

言葉は詰まつて、主従顔を見合せた。

やがて鶴千代は、父と運命を共にせんとするを家老達に引留られ父子は一世の別れを告げ、涙ながらに一千五百の士卒と共に、大手の城門押開き白旗を上げて胃を脱ぎ、柴田の陣へ降参の取次ぎを申入れた。

信長は大いに喜び、本陣へ鶴千代を迎へて降参を許した。其内柴田、池田の同勢は、城中へ乗込み火を揉み消しました。

爰に惜しくも病大將、織田伊勢守信澄侯は御切腹、忠臣堀尾忠左衛門は、織田源左衛門、山内治左衛門の二老に鶴千代殿を頼み、主君の御供と切腹いたしましたは誠に勝れた忠士でございます。……死するも忠義、残るも忠義、この治左衛門の子、猪右衛門少年が、後年天下に英名を輝かせたのであります。

さしも難功不落と云はれた岩倉城も、遂に落城して、柴田、池田の二將も面目が立ち、木下に

厚く禮を述べられ藤吉郎は千五百貫の知行を頂く事になり先手組長柄の將に御取立てと申しますから、槍組の足輕頭に出世したものでございます。然うして藤井又右衛門とは同格となつて、拜領の馬に跨がり、これも拜領の鎧、桃形の甲で我家へ歸つて來ましたから、足輕長屋の大評判で妻のお八重は大喜びで出迎ひをいたしました。

然るに、永祿の二年八月の中頃から三日に掛けて恐しい嵐があつた。颱風襲來と申しますか、中々被害が多かつた。清洲城の大手、多聞櫓の廻り、石垣が百二十間も崩れ、其他の崩壊で城外から、城内が見えるやうで、若し此處から敵に攻め入られたら堪りませんので早速修繕する事となりました。普請奉行を命ぜられたのは山口九郎次郎、此の人は尾州鳴海の城主山口左馬介の倅、修繕工事に數百人の石工、大工、人足等が奉行の差圖に、セツセと工事に取掛つた。ところが、十月の中頃になつても、未だ半分も出來ないので、それへ目を着けた藤吉郎、

「是は怪しいぞ。泰平無事の時は違ひ、一日も早く堅固にして置かねばならぬところを」斯う思つて仕事場に、職人達の仕事を見ると、念か這入つて居ない。熱がない。奉行は叮嚀にせよ、取急いで疎忽の工事をすると手數ばかり掛けて居る。それから木下は、奉行の内幕を探りました。驚ろくべし、織田家の敵今川義元へ内通をしてを

る。今川が清洲城を攻めに來るも近い内と、此普請を延ばして此所から今川勢を引入ようとして居る工事の裏面が判明した。そこで密かに信長公に拜面した。

「何事だ藤吉」
「此度の修繕工事を、殿には如何思召ます。大分長く掛ると思召すでございませう。然し他に御考へはござりませぬか」

「何か仔細でも有るのか」
「ハイ實は私も思ひの外の難工事にて日數の掛るもののみ存じ居りました。然るに山口九郎次郎は父左馬介と共に、今川家へ内通致しをる事を取調べました」

「何んと、夫は誠の事か、間違ひはあるまいな」
「間違ひ等はござりませぬ。苦心の末に調べ上げました。彼の父は鳴海の城主、鳴海は織田今川兩家の領地境、兩家手切の節に、防ぐも攻めざるも最も大切な處であります。御當家で大切な場所は今川家でも大切に思ひませう。それ故何時しか山口親子を手に入れたものと心得ます。表には忠義と見せ掛け、裏へ廻れば今川の間者となつて居ります」
「何ッ、憎つくい奴だ、獅子身中の蟲とは彼等のことだ。引つ捕へて首を刎ねん。不忠者の見せしめに」

「先づお待遊ばせ。彼等は其儘になされて殿は知らぬふりを成され、百事私に御まかせ下されませ、彼等の手を持つて敵を破る計略があります。一石二鳥、いや三鳥を獲て御覽に入れます。然も其内の一鳥は大鷹のやうな大物でござります」

「その大物とは」

「戸部新左衛門を自滅いたさせます」

「え、ッ」

是には流石の信長公も驚いた。戸部は笠寺の城主にして今川の妹婿、十萬餘の將士の中で、今川家第一の勇士と評され、常に織田家を白眼んで居る大敵である。

「就ては明日、斯様々々に成されたら宜しからうと存じます」と席を進んで殿へ耳うちをした。

「ウムそれは宜い。汝は如何にしてさう全身に智謀が廻る。感心致したぞ」

「これは過分のお言葉、恐れ入ります」

「其の翌日、信長は俄に鷹狩の觸れを出して、大勢のお供揃ひ、お城を出て普請場の所まで参りますと、馬を停められた。

「九郎次郎参れ」

「ハ、ッ」

「城に關する工事は、特に取急ぐべき筈のものなるを、見れば、少しも抄取つてをらぬ様子、これは如何したものだ。職人共を呼べ」

九郎次郎は青くなつた。織田家の動靜を細大漏さず駿河の今川に知らせて居た事が知れたのではないか。工事を延し、城の石垣の出来ない内に今川勢を引き入れようといふ魂膽が、露見したのではないかと、藤吉郎が察した通りの人物であるから。又職人一同は、棟梁を先にして、恐る恐る其處へ土下座をした。

信長は一同を見廻し、

「其方共は今日迄何を致してをつたのだ。去る八月半より工事に掛り、モウ十月ではないか。見受けるに工事は三分の一も出来てはをらぬ。永い間何をしてをつた。この修繕の成らぬ内に、敵國より攻め来らばどう成ると思ふ。落城して信長が臣等と共に討死したら、敵のため兵火に家を焼かれ、親兄弟妻子と共に、生死の程もわかるまいぞ。城が丈夫で我々が健全なれば、敵に一歩も入れさせず、汝等は永く城下に住み、妻子を抱へて安樂に居られるのではないか。然れば工事普請の事、申しつけられずとも自ら進んで急速に修繕致すべきであらう。それが汝等の爲でもある。國防の大切な事を存せんか。然るに領主の不爲になることを致す不届者、汝等は敵も同然、サア生かしては置けん。鐵砲の用意をせよ」

鐵砲組の足輕一百人、筒口を揃へて職人衆に差し向けた。皆一同ガタ／＼震へて齒の根もあはず途方にくれて居る處へ、暫く、暫くと、お供の中から藤吉郎、

「御立腹の段恐れ入ります。然しながら、職人共のことゝで、別に心あつて致した事ではござりませぬ。私より篤と彼等に申し聞かせ、只今迄の取返しのため、明日より向ふ三日の間に必ず出来させますれば、何卒御助命の儀を御願ひ仕ります」

「何、是迄掛つて出来ぬものを、三日の間に拵へさせるか」

「ハイ出来させて御目にかけます」

「然らば普請奉行を、改めて其方に申付ける。山口は休め。足輕共、鐵砲の筒拂ひに及べ」

「ハッ」

足輕は鐵砲を取直し、筒口を空に向け一度に發砲いたしました。素より空砲で彈丸は這つてゐないのだが、其音に膽を冷して居りました。夫れを見て藤吉郎と顔を見合せ、苦笑をしたる信長は、狩場の方へお出でになる。九郎次郎は青くなつた顔を漸く上げて、木下に向ひ、

「木下氏、口添を忝けない。どうなる事かと心配した。餘りに入念の仕事をさせた爲め、夫れも御城を大切に心得たため、とんだ御怒りにふれて、イヤ木下有難く御禮申す」

「だが山口氏、此度は貴殿も少し手抜きでござつた。もつと職人達を働かしたらよいに、何んば

大切な普請でも」

「いや、大事を取過ぎた。然し木下、此の工事を三日で仕上ると申上げたが、どうして出来る」

「出来ます」

「まさか天狗ぢやあるまいし、人間がやるのに」

「何とかやらして見る。あの場合、あゝでも云はなければ、御怒りが強いから、貴殿がお氣の毒、それに職人達の命を助けるにはと、御氣に叶ふ様申上げたのである」

「成程、ウム成程」

「兎に角、是からは貴殿は肩拔けだから御安心だ。拙者が皆んなへ相談致さう。一同此處へ来てくれ、話があるから」

「エー木下様、お蔭様で命が助かりました。有難う存じます。一時はどうなる事かと生きてる心持はしませんでした」

「皆、懶け過ぎたな」

「それがどうも、お奉行様から念入にと、つい悪氣があつてやつて居たのではありません」

「餘り宜い氣でもあるまじ」

「へエ、どうも恐入ります」

「今日から拙者が普請奉行に成つた。で遣り方を従来とは違へるから、さう思つてくれ」

「どういふ工合になりますので」

「まづ破損の場所を、工事の残りが百間と見積り、これを百に分ける」

「へエ成程」

「一ヶ所一間を大工二人、左官一人、石工一人、手傳二人、六人掛りで三日間に仕上げてくれ、出来るだらう。無理なやうだが先刻の殿の御言葉に感じた者は遣れるだらう」

棟梁達は乗り出し、

「拵へますとも、よしんば出来なくつても遣ります。石に嚙り付いてもやります。ナア皆んな」

「へエ遣りますとも、今から直ぐ掛つて夜明し遣つゝける」

「マア待て、其意氣は感心するが、矢つ張休む時は休み、働く時ははたらいた方が、工事はすむ。今日は休んで道具調べをして、明朝から仕事にかゝれ、三日に仕上げたら、一日を五日分に

して十五日分、お上から頂いてやる」

「へエー、十五日分有難いなア」

「若し出来ない組の者は入牢だぞ。仕上げた組の者は、出来ぬ組があつたら助けてやれ」

「なに出来ぬエ事が有るのですか、木下様」

「それから明朝より明け六ツ時から、夕刻六ツ迄が仕事の時間である。早く来いよ。第一番に御通用門に入つた者には、五日分別に頂いてやるぞ」

「いよゝ有難い、エ、木下様、二番はどうなります」

「ウム、三日分だ」

木下様は足輕から出世した、年は若い苦勞人だ。さうして命の恩人だ。三日に仕上げ、あの方の、言ひ條をたてなきやア済まねえと、話ながら一同が家路をさして歸つたのは、日の暮過ぎでありました。中にも石工の留吉は、町の端れの我家へ歸り、

「おはつや、今歸つたぜ」

「御歸んなさい、今日は遅かつたわねえ」

「うん、殿様に怒られてよ、モウ少しで鐵砲玉を喰ふ處だつた。懶けて居るつてんでよ、木下さんと云ふこんどの御奉行に助けられた。皆んな青くなつちやつた」

「マア恐ろしい、だから私が云はない事ぢやない。樂な仕事で長續きがすると、ぶらゝ遊び半分で、只手間賃を貰つてるからさ。でも助かつて本當に宜かつたわねえ」

「明日から三日に上げると十五日分の手間が頂けるとよ、それから一番に御門を這入つた者は、五日分別に褒美が出るんだ」

「宜いわねえ」

「だから明日は早く起きてくれ。いざと成りやア寝坊の留でも、へん這那ものだと、働きぶりを
見せてやりてえから」

「ア、宜いとも、今夜つから三日位、寝ないでもいゝから夜中起て、早く起きてあげるよ」

「ウン頼むよ」

翌朝は未だ暗い内から起こされて飯を噛みく、道具を下げて通用門の前迄来た。

「どうだ、まだ真暗だ、己が一番だ、皆な来たたら驚くだらうな」

「今頃来て一番だなんて、アツハ、」

「オヤ、誰だ其處に居るのは」

「宗吉だよ」

「アツ大工か、早いなア、お前が一番か己は二番だな、三日分か」

「駄目だよ、二番にやア這入らねえ」

「三番か」

「ウフ、モ一三十人から来て居らア」

「ウーン、誰が一番だ」

「左官の作造だ」

「オイ作、早いなア何時頃来たんだ」

「ウン、アレから直ぐ来たんだ」

「エ、早いわけた。何處に居るんだ、暗くつて」

「御門の開き目に寄り掛つてるんだ」

「どうしてだ」

「六ツの御太鼓が鳴つて御門が内側へ開くと己は轉がり込むんだ」

「ヘーエ、考えやアがつたなア」

こんな工合で一同は、定刻前に集り、藤吉郎の新案した、割普請に各組合は自然競争の形となつて、他の組より、能く、さうして早く拵へようと、皆一生懸命となり、此分業法とでも申しま
すか、工事の成功、見事の出来榮え、三日目にはまだ日の高い内に、この難工事を築き上げまし
た。

信長公の喜び一方ならず、能い家來を持つたと、藤吉郎はますます主君のお覺え自出度く又々
昇級いたしました。之を木下の三日普請と申します。

信長公は或日、家老を始め士分大半を集めて軍事の御相談をなされた其末に、

「當家の槍は、長柄組とは申しても長槍もあり短槍もあり、まち／＼にて定まつて居らぬ。戰場へ臨んで不利な場合も有らうと思ふ。これは長短何れかに一定いたさうと思ふ。何れに利があるか腹藏ないところを言ふてくれるやう」

座中言葉を出すものなく考へこんで居りますから、柴田勝家が進み出で、

「これは長柄組に意見を述べさせましたらば如何でムります」

「ウム、さうぢやの。長柄組は遠慮なく申して見よ」

先手長柄の組頭は六人ある、福富平左衛門を筆頭に、藤井又右衛門、大島筑後、津川大藏、上島主水、木下藤吉郎、其の福富がすゝみ出で、

「槍の改正は中々の事と考へます故三日の間に我々共充分談合の上御答へ申上げます。夫迄御待つを願ひます」

藤井と津川、大島も同感と申上げる。此時上島主水が進み出でた。

「私の考へを申上げます、御改正になりますならば短槍が宜ろしうムります。自慢致すように甚だ恐入りますが、私指南致しをります九尺が宜しく、短槍は長き時間も持ちこたへ、狭い場所にも用ひられ、第一槍先に力が這入ります、槍術の極意は短かきにあります」

「ウム、左様か」

上島の言葉に、他の組頭は赤面した。

「これ／＼、藤吉郎はどう考へる」

何んでも藤吉郎にお聞きになる。此智慧者が槍についての意見はどうだと、皆木下を見詰めて居る。

「私は一丈八尺が宜いと思ひます、槍は長きに利があるものと心得ます」

これを聞くと組頭達は喜んだ。能い助け船が出たと、顔を上げて上島の顔と、木下の顔を見競べました。

「長槍の利は」

「ハイ用ひ方で槍先に力が這入ります。狭い場所に入れば槍を切りまする、何尺にしても、長い時間持ちこたへの出来ぬやうなる者を戰場に連れて行きましても役にたちませぬ、御當家ではそんな弱者は、小者の中にも居りませぬ。大は小を兼ねると申します、御改正は有利な長槍こそ然るべきかと存じます」

「ウム、さうかた」

上島は目を丸くして、

「木下殿、論は無益でござる拙者は短槍にて御相手致さう、貴殿は長槍にて、御前に於て試合を

仕らう」

「マア御待なさい、我君の御言葉には御家中一同の持槍を御改めになる思召、夫れを二人で試合つて、勝敗が何になります」

『それではどうすれば能いので』

『左様……ウム斯うしたら如何、我々は長柄組、組下の足輕は皆誰でも槍の心得はある、夫ではいけませぬ、槍を知らぬ仲間小者を五十人づつお借して、三日間長短の術を教へ、四日目には御前に試合を致させませう。多勢にて勝たる方が利の有ること、判明いたす、此儀は如何』

『宜しい、然し三日で槍術が教へられますか』

『時によつては一日でも』

『ウム、恐れながら御開の通りに試合御許しを願ひます』

『ウム、夫れは宜からう、許す』

これは面白い試合にならう、槍の名人と智者の争ひだが、なんぼ智計の木下でも上島の槍にかかつてはなア、と語りながら下城をする。

福富、藤井、津川は藤吉郎を呼んで、

『木下有難う、新参者のくせに槍の出来るのを鼻にかけ我々を眼下に見下げ、あの高言は怪しか

らん奴だ。然し木下があゝ言つて呉れたので主人め、グーッと言ひ居つた、長槍はいゝかね』

『イヤ何とか致します。まア當日を御待下さい』

『オイ、始まつたな藤吉郎又氣樂なことを言つて』

『木下はそれが能いのだ、いつも呑氣な事を口では言つて居るが、心の中では眞劍なのだ、どうか負かしてくれよ』

そこで福富平左衛門が掛りと成り、一番部屋の仲間、若いものを百人撰み、五十人づゝ兩家へ槍を習ひに行けと申し付けた。

『オイ、今日から四五日は木下方、已達は敵となるんだな』

『ウ、上島方お前達はいゝなア、槍の名人に習ふんだものキツト勝てらア、此方は木下様、情のある能い人だが智恵ぢア槍は駄目だらう、お殿様の御前で、御家老、中老、物頭皆様の前でよ、大敗しちアたまらねえ、なアオイ木下方は困つたなア』

『サア苦しい方へ廻されたもんだ』

木下方はしよんぼり。上島方は元氣一ぱいで翌朝揃つて出掛けました。

『お早うございます、上島様今日から槍の御指南を願ひます』

主水は下役を連れて庭へ出でた。

「皆んな此方へ廻れ、其所に用意してある袴をはいて褌をかけ鉢巻をして、股立を高く取れ、さうしたら一列に並べ」

「へーい……」

「批者の通りに槍を持ってつ、それから、左の手は軽く右の手は堅くもつのだ、くりだし、くり引く事の便利のため、斯う體へ槍をグーツと付けて、口を結んで、息は鼻でするのだ」

「へい、へい」

「敵の槍は長いから、此方は槍を頤で冠つて劔あげろ、頤で冠れ」

「オヤ、むづかしいぞ、頤で冠るんだとよ」

「こんな事で好いんだらうかしら」

「何をして居る、頤を槍の上へ乗せる奴があるか、斯う、下から冠る形に敵の槍を劔あげ、入身になつて敵をつくだ、それを頤で冠るといふのだ」

「へ、ー、成程」

「下腹へウンと力を入れて、槍は手でのみ持つと思ふな、腹で持つ氣になれ、汝等槍を腹で持つて」

「サア、又むづかしいぞ、オイ、槍を腹でと云ふと、エー斯んな工合では如何で」

「何んだそれは、槍を腹の上へ乗せる奴があるか、如何に槍の心得のない仲間達でも、餘りに馬鹿々々しいぞ、槍を腹にグツとつけて、ヤツ、エーイ、と斯う繰り出すのだ、腹にうんと力を入れて、夫れを云つたのだ、エイツ、エーイと斯う云ふ氣合を出せつ」

「エ、エ、エーイ」

「モット、勇氣を出せつ」

「エーイ、エ、エ、エ、エ、」

「馬鹿つ」

「御免なさい」

「呆れた奴だ、是位の事が判らんか、頤ばかり動かして、夫では手の方が動かない。乃公の様に、そらつ、稽古をしろ、何をして居る。ア、下手い奴等だ」

名人の上島でも、三日間に短槍の術を速成させようとするから、無理であります。終日突かれ擲かれ、ア、痛い、此の鹽梅では三日稽古をしたら、身體が動けまいと、ひよろしくしながら一番部屋へ歸りました。

此方は木下方の五十人、どうせ負けるに違ひないと始めから元氣もなく、時間もおくれて出掛ました。

「今日は、木下様御槍の稽古に参りました」

藤吉郎は中村彌助と家來の淺野彌兵衛を連れて庭へ出で、五十人を呼びむかへ、

「イヤア、皆早いのう、御苦勞々々々」

「ヘイ、早くないんで」

「イヤイヤ、早いとも午時には」

「オヤ、氣まりが悪いなア」

「まア一同座敷へ上つてくれ」

皆ぞろぞろ上がる。

「エ、私共は木下様方になりました三間の長柄を教へて頂くさうで、福富様から申付けられて、

ヘイ、どうか餘り酷く負けたく無いので」

「オイ、氣を付けて口を開けよ」

「どうか御教へを願ひます」

「ア、教へよう、まア急がないでもよい」

「イヤに、落付いて居なさるな」

「さうだなア、どうせ負けるんだから、教へても仕様がなないと云ふ腹かな」

「ヨセヨ、聞えるぞ」

「そろそろ辨當の時間が近く成つた。ちと早いが仕度が出来たさうだから、遠慮なく食してくれ」

妻女が先達で彌助や彌兵衛が禰がけで、酒や肴を澤山其所へ並べた。

「サア、お前方見て居らんで食つてくれ呑んでくれ、酒のいけぬ方は甘味の用意もしてある、何を考へて居るのだ」

妻のお八重も共にすゝめて、

「皆さんどうぞ、遠慮なく食がつて下さい」

「お槍を習ひに來ましたので、こんなに御馳走をして頂いちや濟みません、それに木下様があんまり落着いていらつしやるんで、何だか心配だと皆んなが思つてるやうで、私もさうなんで、先へお槍の稽古を願つてから御馳走になりたいんで、なア皆んなさうだらう」

「さうだとも」

「アハ、中々皆んな熱心だのう、夫れにしては出が遅かつたなア」

「ウヘー」

「然らば稽古いたさう、裏庭へ出てくれ、其所に並べた長槍を持つて先づ一文字に並ぶのだ、さうだ宜しい、あの向ふの赤松の邊を我君御見物の御席と見る、左の手は帯の邊に、右手の槍は地

につき一同御席の方を見る、拙者が采配を振り御禮と下知をしたら、槍は右の小脇に、左手は腰を下ろして大地につき頭を下げる、直れつ、と云つたら元の位置になる、處へ上島方が来るから、先手に二十人槍を中段につける、中段とは槍先を上げず下げず、石突きを上げず下げずといふのだが、少しの上下はかまはぬ、持ち宜いやうに致せ、次に三十人はツーツと下つて、丸くなつて居るのだ。槍は下げて、そこで槍合せに成ると敵は短槍故、下から刎上げ頭で冠つて付け入り突かうとするであらう、二十人は突合ながら後へ下がる』

『ホーラ、負け始める』

『イヤ、之からだ、先手が下つて来たら、三十人は十五人づゝ左右に分れる。右側は槍を頭の上に乗せる、これ木下流の上段だ』

『へエー、妙な槍だなア、まるで劍術のやうだ』

『左の十五人は、横に槍をかまへる、これも木下流の下段だ、敵は味方の二十人を追立てゝ来るから、分れーエ、と下知をしたら左右に分れるのだ。勝に乗じて突込来る敵を、頭ア、と下知をするから陣笠の上からボカゝ擲る』

『へエー、是は驚いた、殿様に叱られやアしませんか』

『其時は拙者が申開きをしよう、左の方には、向脛えー、といふから足を擲るのだ』

『こいつア妙な槍だなア』

『分れた先手は引返し味方の中へ敵を引包む、必ず勝てる』

『是は勝てますだらう。だが殿様の御叱言が心配で』

『案じるな、己が心得てる。次に槍一筋を分捕る者へは、褒美として百文をつかはす』

『へエー、これは面白い。敵を生捕ましたらどうなります』

『生捕はむづかしい。然し生捕つた時は一貫文』

『主水先生を生捕たらば』

『それは無理だ』

『でも功名しました時は』

『アハ、ハ、ハ、其時は一兩金だ』

『メたぞ、己は主水先生ときめた』

『一人できめて居やアがる、慾張つた奴だ』

『貝役は彌兵衛である、太鼓の役は治助としよう、ブー、ブーウ、ドン、ドーン、と聞いたら敵へ突込むのだ、只今の掛け引忘れぬように』

『へい誰だつて覚えませア、譯はねえ』

「これは敵に知られぬ様、注意をしてくれ、計略は密なるを以つて好しとす、宜いか」
「承知いたしました」

これならモ一案じる事はない、勝てるに極つた。サア安心して御馳走にならうと喰るは〜…
。日暮になつて木下方は一番部屋に歸つて来ると、先へ歸つた上島方の唸り聲が聞えたので。

「オイ待ちな、敵方も御馳走が出たと見える、喰ひ過ぎ呑み過ぎで唸つてる奴があるぞ誰だらう」
「さうか、そんなに呑むなア重吉かも知れないぜ」

「ヤア木下方歸つたか其方の槍はどんだ、己達の方は荒つぽかつたぜ、皆んな痛い思ひをして
唸つてるんだ、此方でさへ苦しいんだお前達はひどかつたらう」

「ウ、夫れは氣の毒だつたなア、己の方は樂だつた」
「何樂だ、變だなア重吉」

「ウン己が一番苦しんだ、オイ木下方どんな工合で樂なんだ、話せやい」
「オツト、上島方、此の疊から此方は木下方だから、今日から四日間は這入つて来ちやア困るよ、
敵方に槍の話は出来ないね」

「なんだ、生意氣云ふな此野郎、ようし手前達覺て居る、試合の時には頭で冠つて勿ねあげるか
ら、さう思へ片つ端から突き倒すぞ」

「へエー、頭で冠る、これは面白い、冠つてくれ、此方は、ブー、ドン〜と來らあア」
「何がブードンだい」

「イ、ヨ頭に氣を付けろ」
「よせよ」

「ナニ頭を妙な事を言やアがるなア」
「マアいゝや生捕られねえ様に氣を付けな」

「何を言やアがる、上島流の槍を喰つて驚くな」
「エツヘツへ、、計略は密なるを好しとす、かね」

「イヤな野郎だなア、變な笑ひ方を仕やアがつて」

さても三日の稽古はすみましたがあ上島方は身體は疲れ、青い息を吹いて居りましたが木下方は、
元氣益々盛んになり、當日は城の御馬場を差して乗り込ますると、正面に棧敷を設け、定紋附い
たる紫の幕を張り、織田公は欣然と控へられ、柴田、森、平手、池田、佐久間を始め重役の面
面左右に列座をなし、其他家中の大勢控へられた。

藤吉郎は鉢巻、陣羽織の小さな身體を馬上にて、采配を大きく打振り禮をなし、
「御禮ーツ」と下知すれば、一文字に並んだ五十人、バタ〜と腰を下して頭をさげた。

「直れーエ」

「バタ／＼と立ち直る、其見ごとな禮式に、信長公は感心した。

「三日の間に能く教練まで行き届いたのう」

「ハツ仰せの如く」

是はばかりやつて居たから上手に成る譯だ、一ト足遅れて上島主水の一隊は、禮式が行届いて居りません。槍の速成にのみ熱中して、禮儀はいさゝか負けたかも知れぬが、槍で大勝してくれようと、馬の頭を木下方に向け、

「木下殿、イザ試合を」

「オ、長槍の味を御目に掛けん、それつ」

木下の采配に貝、太鼓の音も勇ましく、長柄の二十人先手に進み突いて掛れば、上島方は下より冠つて入身にならうとするを、長槍を組並べて試合ふ内、たゞと下つてくれば、上島方は勝に乗じて突いて来る。此時藤吉郎の采配高く揚がれば、三十人は二手に分れ、右の十五人は槍を頭上に振り冠つた、信長は目を丸くした。

「こりや、汝等藤吉の方を見よ、珍らしい構へぢやな」

「あゝ云ふ槍を見た事が御座りません」

こんどは左の方に十五人、槍を横に構へて敵の足を狙つて居る、又信長公は呼びかけた。

「勝家、あれを見よ、いよ／＼妙だぞ」

「藤吉郎の致します事は誠に不思議でござります」

これは／＼と見てゐるゝ時、藤吉郎は大音に、

「分れエー、分れエー」と云ふやいなや、十人づ、左右に分れた、其真中へ五十人、突込み来るを、

「頭アー——」と言ひ終らぬ内に、右側の十五人頭上の槍をバラ／＼／＼アーと、打下ろした。陣笠の上からボカ／＼うたれてぶつ倒れた……。アイタ、。痛い／＼／＼、亂暴だあア、上島方の驚く處を、向ふ脛一、と木下の下知に、左の十五人は敵の足を拂つた、ア、ツ、と上島方は横に倒れた、信長初め皆、呆氣にとられて見てゐる内に、二十人は引返し作戦通り引包んだ、めちや／＼に負けた上島方が、逃さうとするところを、槍を掴むで引張るから、

「ウーン、己の槍をどうするのだ、離せ」

「ナンデモ能いから槍を渡せ一本分捕れば百になるんだ」

「ア、イタイ、槍がなけりやア歩けない、杖にするんだ」

「文句を云ふな、生捕るから来い」

「生捕られてたまるか」

「一人生捕ば一貫文になるから、己と一緒に、ぐづぐづ云はずに來いよ、後で半分わけてやる」
相談して居る奴があります、生捕一人、槍二本、エ、此方は槍つき一人、木下様現金で願ひますよ、彼處でも組打の様にどたばたく、此處でも取組合、イタイく離せ、腫物があるんだ、宜し其腫物が目的だ、サア生捕る、イタイタ、助けてくれ、此騒ぎには信長公、家來と共に腹をかへて笑はれた。生捕は二十八人、分捕は三十一本です、と呼ぶ聲が聞こえた。
それ大將を生捕れと十人ばかり、上島の廻りを取巻き、突き落さんとするを、槍を四方にふり立て突き立て、一方を開いて逃出した。

藤吉郎は人数を改め、勝鬨を三度揚げさせて、馬を棧敷の下迄すませ、

「只今御覽の如く長槍の勝利充分なれば、御改めになります時は長槍こそ然る可くと存じます」
見物の方々は餘りのことに笑ひが留まりません、此時、上島は烈火の如くに憤り、馬を飛ばして引返し、

「木下殿、あの槍術は何事だ、亂暴とも無暴とも云ひやうの無いことだ、槍はつく可きものだ、然るに頭を殴り、足を拂ふ此様な槍がどこにあるのだ」

「これは上島氏何を云はる、凡そ戦場にをいて小軍にて大軍を敗るには、奇計妙計が無くては

なるまい、二日や三日槍術の極意を教へて何になる、たゞ身體を勞するのみ、されば木下流は斯様に致した、戦場にて敵に頭を打たれ、足を拂はれ、生捕にされて、槍は頭を打つものではない、足を拂ふもので無いと言ふて見た處で、敵が承知するか、考へて見られよ、幾萬の大軍に向ふ時は、必ず幾千或は何萬の槍組に出あふ事もあらう、其時は變化の妙味、奇略の掛引、上島氏の議論は小さい、如何でござる主水殿」

雄辯滔々と水の流るごとく、主水は眞青になつて一言もなく身をふるはして居ましたが、他の人々は木下の快辯に感じり引付けられ、口も八丁、手も八丁、とは藤吉郎のこと、織田家は、なくては成らぬ人物と、信長公も今更の様に感心せられた。

しばらく無言の上島は顔を上げ、

「此上は木下殿、御身と拙者一騎打の槍仕合を致さう、我が短槍の術を見られよ」

藤吉郎は大聲あげて笑ひだし、

「これはしたり上島殿、今日は大勢の持つ槍の御試し、一人試合ではない、貴殿は大敗一人勝負等と申すは無理だ。然し折角の申し出なれば、御相手致さう、前例により三日の後に試合ましよう」

「ウーム、宜ろしう」

信長公の御許しを受け後日の試合と定まつたが藤吉郎の一隊は、意氣盛んに引上げ一番部屋に歸ると上島方も、ふらくして部屋に歸る、生捕られた連中も共に双方へ殿様よりとあつて、酒や肴を下さる……、ところで家中の評判は一人試合のこと、なんぼ藤吉郎が智略を以て試合つても、上島には勝てまい、と集るところで話がでる。

何んで木下が三日後に延ばしたかといふに、深い考へが有つたからでした。木下は以前から上島を白眼で居た、中國の浪人で槍術の指南役に織田家へ仕へた主水が、言葉の中に美濃、濃州なまりがある。中村彌助に頼んで主水の身元を調中であつた。處が今度の長短論、一寸押へて置いたのでした。モウ二三日の内には彌助が美濃から戻るはず。夫迄延した三日が過ぎても、調へがつかない時は延期をするつもり。ところへ、彌助が歸つて来て、

「藤吉郎さん、イヤ驚いた、上島は美濃の間者だ」

「夫は兄さん御苦勞で御さつた」

「美濃の國鷯沼の城主大澤治郎左衛門の弟大澤主水だ、稻葉山の齋藤家の勇士だ。信長公の御首をねらつて居る恐しい奴だ」

「イヤ有難い、いつもく兄上の御働き、此上とも何分御願ひ申します」

扱て當日は早くから登城してこの試合をと家來衆は待つて居る、藤吉郎が殿へ御挨拶申上げる

と、

「藤吉郎、主水が最前より待つて居るぞ、休息したら試合を致せ」

「ハツ、直ぐ始めます。御覽を」

兩人は庭へ下りた。上島は九尺柄、木下は三間柄の槍をとつて、イザ、イザ、双方氣合をかけてちり、ちりと進む、名人の上島に向つても藤吉郎は平氣である、主水の裏面を知るばかりではない。槍術は、遠州濱名の松下嘉平治の處で充分習つた極意の妙手、上島にかゝつたらすぐ負ける物と思つて居た人々は、藤吉郎の槍術に感心した。木下は、一足づゝ下つてゆくから上島はすすんで来る、だんく下つて信長の座席近くになりました、一同は水をうつた様に、シンンとして見詰めて居る時、突然の大音聲

「ヤアく上島、汝は敵國の間者なり其處動くな」と其聲落雷の如く、敵の間者と云はれて上島がはつと驚くところを一ト突きくれた、倒れる主水を多數の人が押へ付けた。

「申上げます、兼て仰せ付けにより、上島を内々取調べましたところ、美濃の齋藤の家來、大澤治郎左衛門の弟主水と調べました。御當家へ間者に入込みをりませる者、殿の御活眼恐入りませる」

信長は何も知らないのですが、家來の聞く處、大將を立派にしようとして藤吉郎が斯う云つたもの、

名將の事ですから感じが早い。

「オオ、藤吉能く調べた、信長の考へは違はぬであらう」

「實に驚きました御名察」

皆主人の名智に感銘して頭を下げた。藤吉郎は両手をついて頭を下げ、笑つてゐましたが、立上り、

「主水の事は私に御任せを願ひます」

「宜きに計らへ」

二十五人若侍が廻りを取巻き、上島を引つ立て木下の家に連れて行く。奥の間に通せば、家の廻りを逃がさぬやうと見張る。木下は上島に向ひ、

「さぞ驚かれたらう。然し御身は織田家には仇なれど、齋藤家には忠臣である。其忠義に感じて御助け申す、夜半にもなれば裏口から立退きなさい。誰も氣の付かぬ様に拙者が計らひますから先づ湯にでも入り、食事をして時刻の來るを御待ちなさい」

頭を下げて聞いて居た主水は、兩眼に涙を浮かべ、

「御厚志有難く御禮申す。然しながら今更美濃へは歸れませぬ。切腹いたしますゆえ、木下殿御介錯願ひたい」

「左様か、よい御覺悟、それならば心を入れかへ、織田家に御奉公なさい。拙者御取持致さう、美濃の齋藤は親に不孝の愚將なり、信長公は天下の名將、良將でござる」

「はい……それでは木下殿の家來になります。貴殿のような名智にして情味の御方に一生仕へたさう」

「これは恐入つた。さうゆう御心なら殿の御許しを受け、主従とは名のみにて共に共に、織田家へ盡し度存ずる」

此事を信長公に申上げると大そう喜ばれて御許しとなつて、收めて主従の約束が出来ました。此人後年、木下が關白に昇進なされた時には五萬石の大名に出世して、大澤志摩守近春といひ長壽をたもつた方、現代も愛知縣名古屋市に、この名家の後胤は堂々たる名士である」と承はります。

信長公が尾州半國より成立まして、先づ最初の大敵は、駿河の今川義元侯でありました。この尾州清洲城に取つて、咽喉の要害は、尾州鳴海の城廓。此所を守つて居りますのが、山口左馬之助。此の鳴海より一里十八丁離れまして、笠寺の要所には、今川家の勇將で義元の妹婿。戸部新左衛門が守つて居る。今川家十萬の將兵の内に第一の強勇で、信長を白眼んでをる。織田家に

とつて最も強敵であります。然るに鳴海の城代山口父子は密かに今川義元に内通して主を賣らんとする奸策を、早くも発見したのが木下藤吉郎でありました。

それからは山口十郎次郎の氣嫌をとり、朝夕彼の家に訪ねては何かと、氣に入る様な話をして居た。又一方では中村彌助、浅野彌兵衛を旅商人、小間物屋等にして、笠寺、鳴海の近傍を徘徊させて、様子を探らせて居りました。

この彌助は、元中國の浪人の倅で、孤獨になつてから亡父の友であつた、尾州中村のお寺の住職を便つて來たのが縁となり、木下の姉婿となつた。正直で智のある勇者であつた。

その彌助が笠寺の要害へ入り込みまして、奥女中方へ取り入ります。尤も小間物商などは、婦人を對手の稼業ですから、其れには至極好都合です。

『如何様でございます。何か殿様のお書きになりましたものを、頂戴致し度いもので、實は額にしたいのでございます。色紙御短冊のやうなものを載く譯にはなりませんまいか』

奥女中のことですから、別に考へもなく、無頓着に二枚ほど與へました。其れが藤吉郎の手に入りましたから、喜んで、信長公御前に密議を凝らしまして、御祐筆を三人拜借して、自分の屋敷へ同道いたし、奥の八疊の間に閉ぢ籠め、秘密に、此の戸部新左衛門の色紙短冊を手本に偽筆の稽古をさせました。三人の御祐筆の中で武井竹庵といふ人の偽筆が最も巧みに出來ました。

『イヤ武井氏、誠に御筆蹟恐れ入りました。是なれば確かである。此の偽筆を以て書面一通をお認め下さる』

『長まりました。其の文は何と致します』

『文面は貴所が宜しく上手に綴つて貰ひたい。笠寺の主、戸部新左衛門が疾に御當家へ降参をして居る』

『ハア』

『先達て此方御前から萌黄絲緘銀小實の鎧、同じ毛の兜を御贈りになつた。其禮狀としての文案を御認め下さい。固よりは是は策であるから、他に漏らされてはなりませんぞ』

『長まりました』

ソコで竹庵が立派に文案をして、偽筆の書面が出來上りました。

『御大儀、各々此の事は他に決して……』と一同の御祐筆の口を留めて置いて、例の手紙を持ち、信長の御前へ出て、柴田權六勝家と三人鼎足になつて相談、勝家は其意を諒しまして、右の手紙を懐中して、自分の屋敷へ歸り、密かに山口九郎次郎を招き、邊りの人を拂つて額を寄せ『さて山口氏、貴殿の御親父左馬助殿御預りの鳴海から笠寺の間は、一里十八丁であらうな』

『左様でございます。御承知の如く笠寺は戸部新左衛門の預かり居ります所で、却々の軍備でござ

います」

「イヤ併し御當家開運の時節は又不思議なもので其の戸部新左衛門は、疾に御當家へ降伏をして居る」

「ハア、初めて伺ひました」

「勿論是れは秘密であるが、近々義元は當清洲を略せんとし、笠寺を足溜りといったす。其の節戸部が義元を討つて、首引揚げ鳴海へ引揚げる事になつてをる。其の折御親父にしる、其許にしる戸部を敵と見ては成りませんぞ。大切なる味方であるから、戸部の引揚来る節は此方も兵を出だし、彼を保護して、引揚させる策を取らなければならん。萬一やりそんじたら戸部に味方をしてやつて下さる」

「ハ、ア、其れは御開運の時節でございまするな」

「就ては先達で、此方、殿様から萌黄絲絨銀小實の鎧、同じ毛の兜を戸部へ御贈りになつた。其の禮狀が參つて居る。其の書面は斯の如くである」

と勝家、倒の書狀を九郎次郎に示しまして、

「猶御親父に是なる書面を見せて、確かめて置かんと宜しくな。左馬助殿に疑ひの念がある」と事を仕損じるから、此の書狀は其許へ預けるに依つて御親父に見せて其の手當をして下さる」

「委細承知いたしました。早速父に此の段を申し聞かせ軍備いたしまする」

心中に九郎次郎大いに驚き、此の手紙を預つて、勝家の屋敷を下り、従者四五人を連れまして清洲から鳴海へ参り、さて家來を遠ざけて父左馬助と密談、

「時に父上、人は知れんもので、戸部新左衛門が織田方へ内通をして居ります」

「ウム併し其れは疑はし」

「私も最初は疑はしく存じましたが、只今勝家が云々斯様。此の書面を御覽じろ。確かに戸部の手跡に相違ございません。花押まで斯の通り……」

「ウム成程……」

書面を示されて左馬助啞然といたしました。

「此の事を駿河様（義元）へ訴へなければなりません。併し父上、元老の柴田が私に此の密事を語るくらゐですから、我々親子が今川へ内通して居る事は未だ露顯はいたしませんな」

「勿論是は露顯する道理がない」

「猶織田を棄てまして、義元公へ隨身の場合には、結構な御土産がございます」

「何を土産に」

「木下藤吉郎です。昨今重く用ひられて居ります。此奴却々の才子で、先達て岩倉攻めの節など

も、大功を奏し、且稲葉山の間者を見出だし、望みある若者で、朝夕私方へ出入いたしますが彼の者を御土産といたしたならば、一廉の役に立つと心得ます」
「其れは不可んぞ。其の藤吉といふ者は、元遠州濱名の松下嘉平治の僕であつて彼の富士川の戦ひの節、北條の勇將、伊藤日向守を討つた奴だ。何か仔細あつて、嘉平治の許を脱し、今は信長に仕へて居る様子、駿河の君、之を聞き召し、思ふに彼は織田の間者であつたらう。其れを存ぜずして、召使つて居つたは嘉平治の不明であると、當時松下は御不興を蒙つて、隠遁して居る位、却々其方の手には乗るまい」

「イエ大丈夫、御心配なく、若し聞かねば首にして行きますが彼は今悉く私を信じて居ります」

「彼の策に掛つてはならんぞ」

「決して、御心配なく、何んの計略などはございませぬ」

どうして計略に掛つて居る最中だ。謀し合せて、九郎次郎は清洲へ歸り、左馬助は例の書面を預りまして、人知れず駿河へ参り、義元に目通しをして、戸部新左衛門が織田方へ通じて居るといふことを密告いたしました。左馬助は上々の首尾で、駿河から鳴海へ歸りました。義元は烈火の如くに怒り、

「憎むべき奴は戸部新左衛門、我が妹を嫁して、一門の席に列ね、重く用ひ居るに、何不足あつ

て、縁なき信長に降服いたしたるか」

と直ぐに軍師朝比奈備中守を呼び、

「笠寺の戸部新左衛門を討つて彼の首を上げよ」と甚だしき立服。然るに朝比奈は暫らく考へま

して、

「折角の御意なれども、戸部が織田方へ降服いたすべき謂れがございませぬ」

「イヤ確に新左衛門の手蹟、禮狀が信長へ送つてある。是れが第一の證據である」

「イエ手蹟は偽筆であるかも知れませぬ。之は暫く御待ち遊ばさるゝやう」

流石は朝比奈です。其の書面を眞とは存じませぬ。戸部の様子を探つて見やうといふ考へで、

従者四五人を引連れて、笠寺の新左衛門の所へ、機嫌聞きの體を装つて訪ねた。此方は一門、朝

比奈は元老でも其の挨拶振も大きに違ひます。

「久々にて御機嫌を伺ひまする」

「イヤ備中能く見えた」

徒然に覺える所、誠に機嫌よく、酒肴の馳走などいたして、

「さて備中、此程尾州の信長、大河内の北畠を破り、續いて岩倉山を略し、兵を練り、武を磨く

と聞く。嫩の中に对らずばなるまい。然るに殿が態々御出馬になるまでの事もなからう。新左衛

門に一萬の兵を興へ給はらば、直ちに清洲を略し、信長の首を討つて見せる。若し軍議の節は其方宜しく周旋て呉れ」と氣焰溢るゝばかり。どうも舉動を見るに、朝比奈の眼には戸部が織田方へ降服して居やうとは思はれません。

「御勇氣の程恐れ入ります。仰せの如く、館の御出馬には及びませぬ。御當家にて略すること然るべく、御邊御出馬の節は……例の黒絲織の御鎧にございませうな」

「イヤ、此後の戦ひの折着けようと存じ、鎧一領新調いたした。見せよう」

「コレ新調の具足を持て」

家來長まつて、次の間に其の鎧兜を飾りました。之を朝比奈が見ると驚いた。萌黄絲織銀子實、同じ毛五枚鍔の兜である。此れ信長から贈りし品かと、終に備中守も之を信じました。其の實、此の鎧兜は淺野彌兵衛が小間物屋になつて、笠寺の城下を徘徊して、大隅妙珍といふ具足師の許へ商ひに寄りますと、立派な鎧が出来て居りますから、

「先生、見事の鎧ですな」

「イヤ小間物屋さん、能く目に著きましたな」

「私は武器好きでございませぬので、大層立派の御鎧で、是は何方様の……」

「御領主様が御新調になつたのだ」

「ハア御領主様と仰しやるは、戸部様の御鎧ですな」

「さうだ」

「ア、結構だ、萌黄絲織銀子實ですな。鍔は五枚、御見事のものだ」
之を見て歸つて藤吉郎に話をした。木下が、

「よし、其の鎧を此方から遣つたつもりにしる」とソコで例の偽手紙、是が今川の滅する時であつたか、朝比奈備中ほどの軍師が之を信じたのは一生の過ち。つまり義元が第一に信じ、朝比奈が第二に信じた。其の家の滅する時は斯る兒戯に等しい計略でも事になりますものか。さて計略だの手品の種などは、後で聞いて見ると、馬鹿くしいものでございませぬ。所で朝比奈は其儘笠寺に暇を告まして駿河へ歸り、今川侯に申上げたから、愈々立腹なし、松倉鬼夜叉丸、庵原右近太夫に五千人を以て攻めさせようとした。朝比奈の考へでは、戸部が笠寺にて籠城の用意をし、織田方より加勢が来ると面倒になる。夫より戸部を駿河へ招いて押へるのが能いと思つて、出兵を見合せ、直ぐに戸部へ使を立てゝ召出した。新左衛門はそんな策のあるとは夢にも知らず、扱は尾張へ出陣の事に付て、何等かの御相談があることゝ心得、勇み誇つて行列を立て、得意然として乗込んで参りました。表玄關より上り、大紋立烏帽子の禮服にて、若侍に刀を持たせ後に從へ、堂々と今、廊下へ掛りますと、突然向ふの衝立の蔭から現はれたる朝比奈備中守、

『戸部殿暫らく。貴殿は御不審の廉ありて取調べねばならぬ。速かに繩を受けられよ。ソレ召捕れつ』これを聞いて物蔭より伏勢となつて居たもの大勢現れ新左衛門を取り巻いた。御用々々と打て掛る。此時に新左衛門が繩に掛つて、其上申開きをしたら疑も晴たであらうに、惜い事には此人餘りに強い猛氣のため、それには又、武士として縲綆の辱めを蒙るといふことは最も心外と思つてか、怒りの聲を張り上げて、

『無禮をするな、戸部新左衛門、繩にかゝる覺へはない、下れつ』

云ふをも聞かず打込み来る木刀の下に體をかはし、持てゐる中啓で顔をついた、アツと、眼は暗み、ドウと倒れた。尙も四五人を突いた時、中啓の要はとれてバラ／＼となつた。組付来るを蹴倒した、名代の勇力、中々召捕ることが出来ません、新左衛門はバラ／＼駈いだし大手の方に取つて返し笠寺へ引上げやうと考へたが、何を疑はれたか、何ういふ罪だか自分に覺えのないてとて、判らないのも無理はありません、跡追掛けて來た備中守、笠寺へ逃しては一大事と、

『ヤア／＼各々、戸部を討てつ』

オ、と答へて駈來りしは朝比奈彌太郎、非常に強い若侍である、三尺近い太刀を引提げて、戸部殿、御覺悟あれ御免と斬り付けた、新左衛門は主筋にも當る、今川の一門なれば彌太郎は斯う聲を掛けた。狼藉するかと新左衛門は小刀を抜いて切合つたが、彌太郎の太刀先は受け兼て、

殘念と一言が最後となつた。此時庵原右近の五千人は鬨の聲を揚げて、笠寺城へ押寄せ、鐵砲の筒口を揃へて打込み攻め立てた。時に城内に居りました戸部の奥方始め一同は、途方にくれて、何うして宜いやら分りませんから、搦め手、裏口より逃げ出した。其の跡へ庵原勢が乗込んで火を放つたからたまらない、焰々と炎の昇るを見て、寄手の同勢は手を拍ち、ドツと囃し立て、引揚げた。

木下の間者は常に往來して居りますから、戸部の討たれた事も、笠寺の焼かれた事も直ぐ藤吉郎の所へ注進が來る。

『さうか宜しツ、彌兵衛』

『ハイ』

『足輕五千人を連れて、馬を一頭引いて來い、チャ／＼馬を、さうして斯うするのだ』と耳打ちをする、

『心得ました』と駈け出す、藤吉郎は馬に跨がり、山口九郎次郎の家に乗りこみ、

『一大事が出来ましたぞ』

『慌たしい何事でございます』

『笠寺の戸部が近頃御當家へ降参をいたし居つたさうで』

「其事は元老から承はつたが、實に結構である」
「所が、戸部の内通が今川方へ知れたのです」
「ハテナ、どうして」
「ところが戸部は駿河で討たれ、笠寺は焼かれました」
「ウーム」
「今御前の評議では、之を今川方へ内通した者は、鳴海の左馬之助であらうといふ御疑念がかゝつた」

「ソ、ソレは」

「さらば九郎次郎を召捕れとあつて、今討手の者が掛ります」

「其れは、大事だ……」

「私は御別懇の間故、御知らせに参つた。早く御逃げなさい」

「ウム、千萬忝けない」

「拙者の乗つて来た馬を獻じますから是へ御乗りなさい、早く〜」

「然らば馬を借用いたす。御免」

顛へながら藤吉郎の馬に跨がつて乗り出さうとする處へ、ワアワツといふ聲が聞える。

「アレ、アノ通り押しして来た〜。早く〜」

九郎次郎は鞭をあて、逃げ出した。関の聲を擧げて押しして来るのは、浅野彌兵衛が先に立ち木下の組下足輕五十人であつた。天秤棒や六尺棒などを携さへてゐる。

「彌兵衛見ろよ、あの馬鹿者が、チャ〜馬へ乗つて逃げるは〜、あの恰好を、アハ、ハ、ハ、アツ落ちた、ア、乗つた〜、アツ又落ちた、ハ、ハ、ハ、ア。到頭逃げて行つた。サア皆んな、

道具諸式を残らず乃公の家へ持つて行け、足輕部屋へ入れてをけ」
云ひ付けて直ぐ信長公にお目通り、

「山口九郎次郎は、只今鳴海へ逃げ去りました。笠寺城は焼失、鳴海の方も程なく今川の手を以つて倒れませう。計略は充分なりました。御心配なされました戸部新左衛門も意外に早く……」

然らば直ぐ彼の近傍へ要害砦の普請等作事係りに御命じを願ひたく、猶九郎次郎の家屋敷、諸道具一切藤吉郎に下し置かれます段有難く御禮を申し上げます」
「よく計り呉れた、作事の者に申付ける。又九郎次郎のもの何程の事もあるまい、皆其方へ遣らせる」

遣らせると仰しやらない中に、皆持つて行つて足輕達に分けて與へた。
此方は山口九郎次郎、馬上で漸く鳴海へ乗り込んで、

「父上大變です」と右の話をすると、
「さうか、然しさう驚くにも及ばん、何時か一度は織田家を去るのだ。今川殿へ約束の身だ。清洲から攻めて来たら駿河から加勢を願ふ。何の少しも恐れる事はない。信長は小身大名、いや小名だ。今川殿は百萬石、駿遠参、三州の大々名だ。今川家へ従つて居れば大丈夫だ」

「それは左様です」と平氣になつた。

扱て笠寺の方では、戸部の一族は城は焼かれ、主人は討たれ、何等の御憎しみを以て、斯る次第に成りたるかと改めて様子を伺ふと、織田家へ降参をして、今川侯を討たうとした、其證據として、信長より鎧を貰つて、戸部より禮狀が信長の許へ参つて居る。其禮狀が山口父子から義元の手廻つて居ると云ふことが分つた。戸部の家來達は大いに驚き、是は以つての外のこと、其鎧は大住妙珍といふ具足師の手より買求めたるに相違なく、證人として妙珍を御調べありたし其旨を朝比奈備中守へ訴へると、流石の朝比奈も驚いた。

「これは一大事だ。扱ては織田方の策略に陥つたか、ア、我ながら淺幕の至りであつた。斯る輕しき策に乗つて、股肱の勇將を失ひ、笠寺を失ひたるは残念千萬」と後悔したが及ばない。之を聞かれた義元は、

「左馬之助親子等は、當家に降服したる者と思ひきや、さては偽りの降参であつたか。不埒至極

の曲者、彼等と呼べ」

この呼び出しの使者から、義元が怒りの口上を聞いて、親子は驚いた。

「だから伴、乃公の云はんことではない、藤吉と云ふ奴は、油斷のならん男だ。新左衛門は織田へ通じて、鎧を貰つて禮狀を出したといふ話は、皆猿面冠者の策であつた」

「ア、しまつた。扱ては藤吉に計られたか、うぬ猿めつ」

「今川へ行けば、我々の自滅、といつて織田家には行けず」と思案にくれて居りますゆゑ、今川の使者は歸つて義元に告げた。義元は愈々怒り、

「待等は當家に來らぬか。さては予を計つて戸部を失はしめ、笠寺の城を焼かした、不届き至極の奴、ソレ討ちとれ」と松倉鬼夜叉丸に五千の軍勢を授け、鳴海へ向はせた。左馬之助父子も今は是迄と、應戰數刻、家來たちは、主人が悪いのだ今川に内通したから斯ういふ驕ぎになつた。餘り欲張つたからだ、文句を言ひながら裏手の方から軍用金を奪つて逃出した。主が主なら家來迄、揃ひもそろつた不忠の連中、左馬之助九郎次郎は、終に刺し違へて最期をどげました。松倉の同勢は城を焼いて駿河へ歸り、義元へ此段報告いたしました。

藤吉郎は、信長公へ申上げ、鳴海、笠寺、上丹下、下丹下、鷲津、丸根、善祥寺に砦を造りました。其早いこと、電光の如くでありました。

さて東海道第一の雄將今川治部大輔義元より、織田信長へ書面が正式にまわりました。其文意は、近々五萬の軍を以つて、京都へ上洛いたさうと存ずる。足下は我等の旗下に従ひ、領分を通行させらるゝか、それとも敵となつて、一戦されるか、急ぎ返答これありた、といふ侮辱を含んだ書状であります。織田家にとつては重大事と、早速清洲の本城に大評定が開かれた。信長は正面に、柴田權六郎勝家、佐久間右衛門信盛、丹羽五郎左衛門長秀、池田勝三郎信輝、林佐渡守通勝、梁田出羽守清近、森三左衛門可成、塚本小大膳、不破河内守、福富平左衛門、軍師の平手堅物、外士分一同着座をした。信長は、満座を見渡し、

「兼て今日あるを覺悟いたし居つた。さて此上は、如何いたしたものであらう。思ふ旨を遠慮なく述べてくれるやう」

斯ういふ大事の評議であるから互ひに顔を見合せて一言を發する人もありませぬ。

此時、恐ながら申上げますと進み出たるは、林佐渡守、

「今川は五萬餘人、味方は八千人、勝利の見込みは、如何に戦ひましても勝利を得る處ござりませぬ。誠に残念には存じませぬが、一時のところ、御降参をなされませ。今川とて、清洲の城下

は無事に通つても、行く先々に敵は出ませう。戦ひ疲れたる其時には、再び織田家の御旗を輝かざるゝ事が出来まします。時節を御待ち遊ばされ、一と度は今川の旗下に……此儀進言仕ります」

「黙れ佐渡、日頃の勇氣に似もやらず、大敵と見て恐れたか、降参などとは思ひもよらぬ、聞くも穢はしき其言葉、目通り叶はぬ、退れ〜ツ」

遠慮のないところを述べて叱り飛ばされた。これでは遠慮のないところは、言へない。滅多に口は開けないと思つてか、佐渡の意見に同意してをるのか、なほも無言を續けてゐた。

「監物、其方の意見を聞かう、どう思ふ」

「ハツ、我君の御決心どほり、一戦然るべくと存じます」

監物の開戦論に、一同思はず座をすゝめた。

「ウム、能く申した、流石は監物、して戦略はどういふ考へだ」

「ハツ、敵は大軍、味方は小勢、御籠城が宜しうござります。堀を深くいたし、塀を高くいたし、まして」

柴田、池田、佐久間を始め、一同聲を揃へて軍師の言葉然るべく、御籠城々々と申上げた。青年血氣の信長は烈火の如き氣性を押へかね、籠城などはしたくない、城を出でての血戦が、望みである。されど多數の意見を破ることはできません。然るに、氣に入りの木下藤吉郎は末席に

控へて平氣な顔をして、無言のまま信長公を見詰めて居る。これに氣が付いて、

「藤吉郎、これへ出でよ」

「ハハツ」

「其方は未だ一言も云はぬやうだが、汝も籠城が宜いと思ふか」

「それでは私も、御遠慮いたさず思ふところを申し述べます」

ソラ、藤吉が出たぞ、何をいひ出すか、と皆木下の顔を見てゐると、

「御籠城では戦ひましても、敗するのみ、戦ふ甲斐がございません。御城を出で、敵に向ひ、此方より攻め掛り一大血戦なされてこそ、最後の勝利がございます。私は出戦を御すゝめ仕ります」

「ウム、左様か」

信長は心中に喜ばれたが、他の前があるから、ちいつと四方を見廻して、皆の顔色をうかがつた。軍師の平手監物は、藤吉郎に呼びかけた。

「木下殿、我々一同御籠城と申上げたるに何んで出戦を宜いといはれる」

「されば、籠城といふものは、何日、何ヶ月、籠つて居れば何方よりか幾千の加勢が來るとか、何百石の兵糧を送り呉れるとか、さう云ふ見込がなければ籠城は出來ぬもの。今御當家は一石の兵

糧を送りくれるところもなく、一兵の加勢もありません。敵に取圍まれて自滅を待つは策のえたるものではございませぬ」

「それは元より承知してをる。然し五萬の大軍に向ひ、御當家は八千人、其内を美濃の敵、伊勢の北畠軍の防禦、押へとして、二千人配置をすれば、残るは六千の小勢、籠城すれば百日ぐらゐは兵糧、矢玉の有らんかぎり、戦ふこと出來るといふもの、一寸延びれば、尋のびろ、と申す事もある。其内何れよりか又味方の出來らんとはかぎらぬ。夫れを此小軍にて出戦すれば、一日にて敗軍なさん。夫れゆゑ御籠城を申上げたのぢや」

「軍師の御言葉、其意を得ず」

「なんと申す」

「されば、軍師は二言目には敵は大軍、味方は小勢と云はれますが、成程六千餘人は小勢かも知れませぬが、今美濃や、北畠の押へとしては、五百か千もあれば充分と存じます。御領分の若い農夫、三千人位集め、これを教練して農兵とすれば、直ぐ役に立て、御目にかけます。又他より三千人ぐらゐの加勢を借りますれば、合計一萬二千餘、殿の御武徳、貴殿の采配、皆様の忠勇、今川の大軍恐るゝに足らず、爲に御出戦おすゝめ致しました」

これを聞いて信長は喜んだが、軍師は笑つた。

「木下氏は何を言はるゝ。この戦國時代に、我國大切、我城大事とそれ〴〵國防に務めて居る。三千どころか、百人なりとも加勢を出すところがあるか」

「イヤ、他國はしらす、隣國、近江の觀音寺山の城主、佐々木彈正大弼義秀公に御頼みあれば、必らず承知なさるでござらう」

監物は大口開いて、カラ〜と笑つた。

「さても小賢しき其言葉、御當家は平相國清盛公の御末にして、平家嫡流、佐々木家は近江源氏の末孫にて、源氏の一門、されば隣國ながら、敵々の間柄、未だ一度の挨拶だに致したることなき佐々木家より、加勢をくれる道理がない。是しきの事を知らずして、大切な御評議に助言は無用だ」

「アイヤ軍師、佐々木家へ私に御使者を仰せつからば、必ず借りて参ります」

「何、木下殿が行けば、ウム、若し借さねば何と言譯するか」

「軍中に偽言なし、正しき御使者承はり、拙者の熱意通ぜずして、借りられませぬ其時は、切腹して申わけ致します」

「ウム、左様か、それは能い覺悟だ」と信長にむかひ、

「御聞きのとほりにござります。木下を近江へ使者に、加勢御依頼然る可く、若し加勢來らば木

下の申す如く、城外へ御出戰宜しくと存じます」

「ウム、さうか。藤吉郎急ぎ使者に参つてくれ」

「ハッ、直様出張いたします」

「一同、評議はこれ迄、大儀であつた、隨意に引取り休息いたせ。藤吉郎は待て」

別間に藤吉郎をお連れになり、人拂ひをして、

「汝があゝ云ふてくれたので、予は満足した。意氣地のない、籠城などができるものか」

「御心中御察し申上げ、失禮ながら發言仕りました」

「ウム、喜んで居るぞ。然し藤吉、佐々木から加勢を得られるか」

「それは、駄目でございませう。借さぬと存じます」

「何んだ藤吉、借さぬ、それを承知で大言をしたか、切腹をせねば成らぬぞ」

「イエ腹は切りません。私切腹は嫌ひでございます」

「ウフ、。藤吉又何か奇計をやるな」

「計略は密なるをよしと申します。殿の御胸に御包み下されますやう」

「ウム、夫れは」

「尾州の海東郡蜂須賀村に住みまする、野武士の頭蜂須賀彦右衛門、其子小六正勝、其組下の者

共を驅り集めて参ります。三千ぐらゐは有りませう。強い／＼者どもにござります」

「何、野武士の一族だと、えらい者に目を付けたな。其方蜂須賀等と知り合ひか」

「ハイ、實はその、私も以前は蜂須賀の手下をやつた事があります」

「ナニ、手下をか、物騒な奴だな」

「エへ、。殿様これは御内聞に、それから佐々木家へも参ります。物の具旗馬印等を借りて、この位な事は出来ませう。野武士達は、佐々木の加勢として連れて來ます。何事も拙者に御任せを願ひます」

木下は急ぎ仕度をし、淺野彌兵衛を同道して海東郡の蜂須賀村を差してゆく。此彌兵衛は、木下の人物を見込み第一番の家來となり始めは無給で働いた、後年の淺野彈正大弼長政侯であります。

「旦那、近江へお使者と聞きました、道が違ひます」

「彌兵衛や、近江は歸りだ。蜂須賀村へ行くのだ」

「何んです旦那、野武士の處ですか」

「ア、さうだ」

「旦那は付き合ひが廣いから、だが變なところに知合がござりますねエ、野武士と頭分は中々宜

いのが居りますけれど、下の方になると可成物騒で」

「アツハツハ、彌兵衛付き合つて見ろ面白いぞ、話せる奴も居るからなア」

久々で訪ねて來た蜂須賀村、小六親子は喜んで出迎へました。

「藤吉郎さん、能く來てくれた。毎度便りをしてくれるので、忝も感心して居る。昔を忘れないで」

「親父と時々話をするが、木下さん、早い出世でお目出度う」

「イヤ、大した事もない。御兩人も御健康で何よりでござる」

話のところへ、稲田九郎兵衛、青山新七、永江半之丞、松原内匠、川口久助、日比大太夫、ぞろ／＼出てきた。

「イヤア、藤吉さん、立派になつたなア。だが見る度に小さくなる」

「馬鹿野郎、そんな奴があるかい。藤吉さんは智慧に喰はれて大きくなれないのだ。ねえお頭、さうだらう。アツハ、」

「藤吉さんを見ると、矢矧の橋を思ひ出すなア久助」

「ソウ／＼、己れが一番におどかされた。今に偉くなるだらうと思つたよ」

「皆さんも元氣で、懐しい。其節は御世話に成つたことを覚えてゐる」

「藤吉さん、何か用でもあつて見えなすつたかな」

「ウム、實は御相談があつて参つた」

「エへ、。何う言ふ話で……」

「駿河の今川義元が尾州の清洲を攻めに來る。主君信長公は血戦の御覺悟を極められた。そこで御訪ねしたのは、織田家へ加勢を御頼みに、各々方、運良くば織田家と共に功を立て、一城の主となり、又一國の主ともなれやう。運拙なくば、戦場の露と消えなん。織田家と共に倒れるか、天下の名君織田信長公と共に世に出るか、二ツに一ツ、此處が運命の岐れ路、如何でござる蜂須賀殿、宜い御返事が承はりたい」

これを聞いて彦右衛門父子、一門組下、丸く座をかまえて相談した。聽て小六は右手を高く擧げた。

「已は藤吉さんに加勢する、信長公に御味方して戦に出る。御父さん、皆んなも一緒に行くか」

「行くともく、皆んな行かう」

「さうだのう、藤吉さんの話を聞いては、行かすには居られねえ」

「頭の御先祖は大名で、斯波尾張守高經といふ御方だ。今落ぶれて野武士になぞなつて居るが、

只の野武士とは譯が違ふ。さア頭、小六さんも彼のとほり張り切つて居る。御先祖の家を起して下せえ」

「ウム、能く言つてくれた、皆んな勇ましい。行かう、戦ふとも。木下さん、宜敷頼む」

藤吉郎は喜んで、

「有難うござる。信長公もさぞ御喜びに……。就てはあの愛知川迄、繰出して拙者の行くのを御待あれ、さうして人数は多い程宜いが凡そ何人ぐらゐ」

「サア、二千五六百は集まるだらう」

「それは結構、これから近江の佐々木家へ参る。旗差物、物の具を借用して愛知川へ出張する。然らば彼處でお目にかゝる。各々御免」と別れを告げて立ち出る。

「彌兵衛待遠であつたらう、安心致せ話は整つた。是から觀音寺山だ」

「へエー、すると野武士連中は」

「加勢に頼んで來たのだ。三千近く來る」

「オー、オー大變な事になつた」

「何が大變だ、佐々木の加勢と變化するのだ。黙つて居ろよ」

「へエー、成程、いよく大變々々」

「行く大變といふ奴だ。アハ、ハ、ハ、」兄弟の様に主従が笑ひながらも急足に、近江の國觀音寺山の城に来て、佐々木の家老職、吉田出雲守へ申し入れた。織田家の使者、木下藤吉郎高吉、御城主にお目通り願ひたいと。此時佐々木家の重臣達は、相談しました。未だ一度も暑寒の挨拶さへした事もない敵々の織田家、何んで使者をよこしたか、織田家に用はない筈だ、追ひ歸さうか、免に角使者の口上だけは、聞いたが宜からう、と木下を案内することになりました。藤吉郎が廣間に出ると、出雲守が聲高く、「御披露仕ります、尾州清洲の織田家の御使者木下藤吉郎高吉殿でござる」これを聞いて上席の法師が聲をかけた。「織田家の使者、何用有つて見えられた。予は城主佐々木彈正大弼義秀殿の伯父、佐々木承禎である。城主病中なれば、代つて聞かん、して口上は」藤吉郎は頭をあげ、承禎法師の左席を見れば、未だ年も若い立派な人物、病と見えて、青い顔をしてをる、この方こそ城將義秀ならんと見た。木下の顔の可笑しさに、列座の人々思はず苦笑した。織田家に人はないものか、かゝる小身猿面の見苦しい者を使者によこすとは、と耳うちする者もあつた。

「これは、始めて御意を得ます。御一同の方々御見知りをかけて、織田家の臣木下藤吉郎でござる。さて主人の口上は、此度今川義元無名の戦ひを起して織田家を討たんと、近々大軍をすゝめて参ります。微力の信長を御助けくだされ、三千人御加勢を伏て御願ひ申上げます。御當家の御恩、永く忘却仕りませぬ。此段御承知賜はり度」

「黙られよ、織田家の使者、源平兩家に別れて祖先より、隣國ながら未だ且つて挨拶だに致せし事もなき織田殿へ、加勢等とは思ひもよらず、立ち歸られて此赴き、信長殿へ申されよ」

「成程、御尤なる御言葉なれど、今一應御願ひ申す、三千ならずば二千人は是非とも御承知願ひ度く」

「未だ申さるゝか、相成らぬ」

「然らば一千人……御返事なくば五百人にては御借くださらば」

「持國大事の亂世に一兵たりとも、加勢は出せぬ、まして平氏の信長殿へ」

「それでは最後の御願ひ、五百人分の鎧、兜、四ツ目結の御定紋ついたる、旗馬印を、御借下されますやう、さすれば武名天下に鳴り渡る、四ツ目の旗を眞先に。味方の勇氣を引立て、大敵今川を破ります、此儀ばかりは御聞き濟を、幾重にも願ひ上げます」

「エ、面倒な、借せぬと云ふたら、借さぬのじや、幾度いふても同じこと、問答無益だ立歸れ

ツ……」
「ウム、左様でござるか、宜ろしい、今は是まで立戻つて主人に此事申上げん。然し、一言まをし残してまゐらう、如何に承禎入道殿、能く御聴きあれ、若し旗馬印を御借しくだされて、信長戦ひ勝つ時は、天下の人々何と申さう、あれ、信長の勝利は四ツ目の旗の力なり、佐々木家は仁義武勇の家ならずや、敵々の中なるに弱者を助けし情の加勢、是こそ誠の武士道なり、流石は近江源氏の嫡流なりと、敬意を表しまゐらせん。

若し信長の運拙くして今川の爲亡びなば、あの四ツ目結の旗馬印は偽ものならん、敵々の家柄なる織田に加勢の道理はない、大敵に向ひ窮餘の一策、織田家が苦心の偽旗ならん、四ツ目の旗を見る時は、敵と恐れ敗走なさんと……。信長殿の猛將が、最後の際まで、深く信ぜし旗の威力、扱ても恐しきは佐々木の武勇、迂闊に兵は向けられぬと、御當家の武勇は益々天下に輝かん、之等の事も思はずして、源平の家柄などと、昨日の敵は今日の味方、これ戦國の常ならずや、モウ御頼みはせぬ、立歸つて主人をすゝめ、今川家に降参せん。そして今川の先陣となり、この觀音寺山に攻め寄せん、其時は木下高吉眞先に、承禎殿へ槍をつけん、其迄お首を御預け申す……己れ木下、憎くき悪口と思召さば遠慮はいらぬ、斬つて下さい、さうなる時は、家來の仇と、今川家を急々すゝめて攻めるでござらう。拙者を殺せば一日早く當城は亡びん、生かして返せば一

日おくれて落城なさん、殺さんと思ふならば今の内、さらば御免」と立ち上り、四方を見廻しながら行く藤吉郎の大膽に、座中の人々一言もなく呆氣にとられ、見送つてをりました。

この時、城主佐々木義秀は聲をかけた。

「織田家の使者待たれよ」

「ハツ、何か御用でござるか」

「伯父上に代つて挨拶せん、織田殿は宜い家來を持たれて幸福だ、使者の忠義に感じて旗馬印、物の具等御貸申す」

「ハ、ツ、有難く存じまする」

「充分に戦ひ、さうして勝利を他所ながら御祈り申さう」

「ハツ、主人も定めし悦ぶ事と存じます、先づ私より厚く御禮を申述べます、就きまして供の者一人なれば、御手数ながら愛知川邊迄、武器御送りを、御願ひいたします」

運送まで頼んでゐる。

「ウム……使者は高吉と云はるゝか、余は義秀といふ、秀の一字を與へん、今より改め秀吉と名乗られよ、我祖先は佐々木源三秀義と云はれた。使者殿も我等が祖秀義殿の武運に肖かり、天下に其名を揚げられよ」

「是は何よりの賜はりもの、今日よりは秀吉と改名仕る、されば之にて御暇申す、義秀侯も御氣嫌よく、入道殿、各々御免」と其座を立ち、城外にいで、彌兵衛を連れて愛知川邊に、荷物を受取り、蜂須賀一門の來るを待った。

此方は蜂須賀彦右衛門。黒皮緘の鎧、同じ毛五枚鍔の甲、黒鹿毛の駒を引いて、小六を始め一族組下二千餘人、川岸まで集まり、早くも木下主従を見付け、

「オ、來て居なすつたか」

「彦右衛門殿、御苦勞でござる、オ、小六さん、ヤア皆さん御苦勞く」

「木下さん、二千五百六十人集めた」

「ウム充分だ、甲冑はどのくらゐ有るかね」

「五百人分ほどだと思ふ」

「さうか、すると千五百個ばかり不足だ、まア宜い、皆んなに程よく着せてくれ」

「オーイ、サア鎧を着けるんだ、甲を冠つたら大袖小袖はなしに、陣羽織を着たら甲と小手當はなしに、そろつた甲冑組は廻りに並び、浴衣で甲の連中は真中へ這入れ、アハ、、、」

「清洲の城下へ入つたら、一鼓六足の調子で武者押しを頼む、一つの太鼓で六足づゝ出る、夫から出迎へが來るから、名乗る時に佐々木四郎左衛門を名乗つては不可ない、其名だけは餘りに

有名だから、子孫の方々が付けないさうだ、他の名は代々付けて居ると承はつたいさ此書つけに佐々木家勇士の名があるから、名家の勇士の御名を借りるのだから、皆其氣になつて、心を高尙に持つのだな、アハ、、、。六太夫體が堅くなつたようだなア。話ながらも、急ぐ程に早先手は清洲の城下入口まで乗こみました。木下が此事注進したので、信長公は大いに悦び、平手は驚き、家中の人々不思議な男は藤吉なりと話ながら急ぎ出迎ひの用意をなし、塚本小大膳、不破河内、一百人を従へ迎ひに出た。

「これはく、近江源氏の御一門、此度は御加勢を有難く、御厚禮申上げます、塚本小大膳、不破河内守、主人に代り御出迎ひ仕りました」

「御出迎ひは恐れ入ります、拙者は吉田出雲守でござる」

「某は建部源八郎」

「此方は佐々木太郎左衛門」

「拙者は佐々木三郎左衛門でへい」

「エ己は佐々木四郎左衛門高綱……」

「オイく、遠ふよ」

「イヤ、それは先祖で御座る、ア、苦しい」

一鼓六足の調子を揃えて、武者押入城を、信長は城の櫓から見下して、
 「皆、あれを見よ勇ましき四ツ目の旗、流石は佐々木家の勇士等、あの甲冑の見事なる、中にも
 法師武者の一段と目に立つは、珍らしや一松重ね厚の大鎧ぞや」
 さうぢやないもので、日比六太夫は坊さんで頭が光々ひかる、風邪をひいて居たから寒気がする
 と暑い氣候に、丹前を着てゐた、それが辨慶縞で、甲を猪首にして大身の槍を杖にして來たので
 す、辨慶縞を一松重ね厚と間違えられた。
 やがて信長公は重だちたる者に無禮の御挨拶があつた。ソレ、近江の加勢が本當に來たぞ、と
 勇氣盛んになつて戰の用意をつゞけました。藤吉郎は内々の御目通り。
 「殿、旗馬印だけは本物で、蜂須賀の連中でございます、御内密に」
 「ソオカ、強そうだのう、目付きが違ふのう、いや其方の働き過分に思ふ」
 時に軍師の平手監物が出で、
 「殿、私考へまするに、木下の英才膽略、織田家の軍師として然可と存じます、私等の及
 ぶ處ではござらぬ、多年御預り申したる采配を木下に譲り度、此度の大戦に、木下の作戦望まし
 く、拙者は彼の副役となり、彼の妙計戦略に助力いたして、大いに働きたく心得ます。此儀御聞
 濟を願ひます」

「ウム、さうか」
 藤吉郎を呼んで御相談になると、木下は、平手と合議の末に、采配を引受けました。
 監物さへ、斯う信じたのですから、家中一同は不服もなく、木下の采配にはたらく事になりま
 した。
 其内織田方へ注進、次々に來り、今川治部太夫義元の軍、五萬人、駿河國松ヶ崎城後の府中
 (今の静岡)を出陣、時は永祿三年五月十二日、破竹の様なる勢ひにて、武者押をなし信長を只
 一戦に亡さんと、十八日には本陣を沓掛に進め、いよ／＼總攻撃は明日と手配をしてをる事まで
 も、手に取るやうに織田軍に聞えた。
 藤吉郎の采配は電光の如くで、兼て用意の砦、鷺津には、飯尾近江守、同じく壹岐守、織田玄
 番を將として三百人、丸根の砦には、佐久間大學、山田藤九郎を守將として三百人、中島の砦は、
 梶川平右衛門、津田右近に三百人、善照寺の砦に、佐久間右衛門、佐久間左京亮の兄弟、三百
 人、上丹下に水野帶刀、山口海老之丞、下丹下には、柘植玄番介、梅ヶ壺に織田幹之助、三百人
 ツ、今川勢來るを遅しと待ち構へた。
 織田上總之介信長は、林佐渡守を清洲城の守りとし、柴田權六郎、森三左衛門等、五百の小勢
 を従へて、馬を急がせ、尾州熱田の御社前迄、清洲からは六里の道、夜明けの頃でありました。

そこへ、厩佐々木の軍勢を連れて、木下が参陣した。

「御出馬の段、大慶に存じます」

「ウム、藤吉早いろう」

それより信長は、熱田大神宮に勝軍のお祈を捧げられました、一同拜禮がすみますと、御供の武井筑後入道夕庵を召されて、

「御社へ祈禱の願書を一筆まいらせよ」

「ハッ、承知仕りました」

夕庵は矢立の筆を取出し、さらくと謹書を認め信長に御覽にされる、信長は神官に渡されて

「これを大神の御前に備へまするやう」

と捧げられました。

この願書は漢文にて長文と承はります。

折から白鳩が二羽、いづれからか、羽音も優しく飛出し、大旗の廻りを三周して、清洲の方へ飛び去りました。

鳩は軍神の御使なり、軍旗の廻りをまはつて、清洲の方へ飛んで行つた、是ぞ勝利の吉兆なり、と言ふ者が出てきました。

藤吉郎は六枚の通用錢を取り出し、

「只今目出度き吉祥拜見いたしたり。今一ツ、吉凶を占なひまする、此六枚の通用錢を、御神前に撒いて見ます、六枚文字形の出る時は味方の勝利、一枚にても波形の方が出る時は、敗軍と心得めされ、ウーム」

祈念を籠めてバラ／＼と投げました。

「ソレ各々、拜見なさい」

近寄つて見ますと六枚とも文字形の方が現れ、波形は一枚もありません。

アラ有難し、正しく味方の勝利ならん、と皆勇みに勇んで元氣十倍となりました。これは藤吉郎の考案で、鍛冶やに云ひつけ、波の方を削り二枚合せたので、どう轉がつても文字形が出る、白鳩は浅野彌兵衛が、ソツと逃したので、鳩は驚いて旗の廻りをまはつたもの、清洲の方へ飛んだのは、清洲城の屋根に住んで居たのを持つて来たのですから、我家へ歸つた譯です、一寸した考へで、勇氣を引つ立て得るものでございます。

其所へ、神官が勝豆を召上れ、と白い豆を大釜で煮立て出されたから、又喜び、勝豆とは好い名だ、神馬に與へる豆をくださったのだ。戦の先に縁起が宜いと皆よろこんで食してゐる、此勝豆は毎年の吉例となり、通用錢は、後に永樂通寶の馬印になり、本陣に建てられました。

「軍師に申上げます」

「何事だ」

「木下様にお目に掛りたいと、若い武士が一人参りました、幕外まで御出を願ひます」

「ウム、名は云はんのか、宜し今行く」

「陣外に出て見れば、馳寄て来た人は前田利家、木下とは仲が宜い。」

「オ―是は、前田殿よく御出だ」

「木下殿、面目ないが参りました、殿へ御託を願ひたい、戦場の御供が致したい」

「前名を犬千代、今は孫四郎、ふとした事から短氣な信長公の怒りにふれ浪々の身でありました

が、主君の大事と駆け付けたのだ。

「ソレは御感心、して御供は」

「長九郎兵衛一人、九郎兵衛参れ木下殿へ御挨拶をいたせ」

「ハッ」

「ヲ、九郎兵衛か、能く御供をして居るのう、忠義な者だ、さて前田殿、殿の御氣性故、今御

託致すより戦功をたてられよ、其後には、某が必ず御歸参なる様に計らひます」

「然らば何分、さうして何れの陣にか御入ください」

「夫では丸根の砦に、御加勢あれ、佐久間大學殿が守つて居る大切な場所」

「利家は心得て、用意して来た甲冑を着し、

「木下殿、他所ながら、殿の御尊顔を拜したい、或は今生の御別れにならうも知れず、密かに御

取計らひを」

「聞く藤吉郎も胸をうたれた、此度の戦ひに、自身は生きて歸らうとは思はれぬ、然も軍師の大

役、作戦敗れれば尙更の事、我君も御生存は萬一のこと、流石の木下も太息、

「イヤ、御尤も、然らば拙者御案内申さう」

「葉の紋付いたる幕の間から、信長公の御顔を見詰め、兩眼に涙を浮べ、

「木下氏、久々に御尊顔を拜し、御懐しく存じます。是にて思ひ残す事もござらん、殿へ御

宜敷言上を願ふ、さらば丸根に参らん、木下殿御氣嫌よう、と九郎兵衛が引き来る馬に乗り、槍

を小脇に主従は駆け行きました。

「藤吉郎は前田の事を信長公に申上げれば、

「ウム、左様か、利家能く参つたのう」

「時刻もよるしく、殿御出陣を」と申上げる、信長は采配を高く揚げ、バラリとふれば、燃え立

つやうな勇氣の軍勢、街道を東の方に道を取り、北井戸から上野街道を、新屋敷へとり、古鳴海

から山手に懸つて進み行く。折しも南の方に二筋の黒煙が見えた。

「藤吉郎、あの煙を見よ」

「オ、あれは」

「ウム、鷺津、丸根が早や落たるか」

「残念ながら、御意の如くと存じます」

「ウム……大學、近江も討死せしか……利家も」

鷺津、丸根の砦が落ち、佐久間大學、飯尾近江兩將の討死と注進来る。

「大學、近江等の弔合戦なるぞ、押せー、進めー」

涙をばらつて下知をなし、二本松迄来ると、又々丸根、鷺津の敗兵が二將の戦死を告げる、さ

れど前田孫四郎の消息が分りませぬ、急げくと御下知に、又も軍道ばかりすゝみて、笠寺の城

墟近くになりました時、右の方に旗一流、二三百人の一隊が堂々と控へてをりました。

「あれは何者た、調べてまわれ」

言葉の終らぬ内に、其隊中より三人近づき来る。

「御出陣、大慶に存じまする、拙者は、熱田の大官司、千秋加賀守、某は佐々軍人正政次、岩

室長門守でござる」

皆知り合の將である。

「能うこそ参られた、過分に心得る、さうして各々の戦法は」

「御采配任せでござる、この三百人の勇士等は、必死の覚悟、他の五千一萬にも向ふ者にござり

まする、我々は敵の正面より、御同勢は敵の横合より攻め立て、勝敗は一時に決せられ、必ず御

勝利と存じます」

某の弟内蔵之助、並びに一人の侍を、他日御引立を賜はり度く、これが今生のお願ひでこ

ざります、これ程の勇士も親身のためには、常に心を勞するものか、此弟内蔵之助が鬼と呼ば

れた、後年の佐々陸奥守成政であります。信長も其心中を思ひやり、

「軍人、心得て居るから安心あれ、予が生て歸らば、重く用ゐるぞ」

「ハツ、有難く心得ます」

三勇將は三百の手兵を率ゐ、敵陣さして馳せ行きました。日ざしは丁度四ツの刻(午前十時)

此日は非常に暑く、ダクダク汗を流して丹下の砦に着し、砦を守る兵の半を、我旗本の内に加へ

又々進軍して善照寺の砦に入りました信長の本陣へ、御注進と馳來るもの三騎。

「何事ぢや」

「佐々軍人正、千秋加賀守、岩室長門守殿の三百人、今川の先手葛山播磨守の五千餘人に撃つて

入り、大血戦に及びましたが、衆寡の違ひ残念ながら三將とも、見事の討死なされました。僅かに一ト時、經つか經たぬ間に、袂を分つた三將が、早くも討死の注進とは、信長公は涙を流された。

『イザ行かう、三將の弔合戦、押せー、押せ』
押せとは、進めと云ふ下知である。

織田家は今迄の戦ひに、一度も負けた事はない、ところが此度の戦ひは、朝から敗報が続いてくる。味方の大將分が次々に討死する。性急な信長は、決死の勢ひ物凄く、陣刀を引き抜き、馬を乗り出ださうとしたとき、柴田權六郎は馬の口に取纏り、

『先づ暫く、御氣性とは存すれど、今勝ち誇つた敵の大軍へ、この小勢を以て向ふは、暴虎馮河の勇、思慮ある大將の恥づるところでござる。先お止りなされませ』

權六放せ、いかに勝ち誇つた大軍でも、きつと蹴破つて見せるのだ。其所放せ』

折から戦ひの様子を氣遣ひ、清洲から馳せ來つた林佐渡守も、柴田と共に止めやうとする。藤吉郎は無言にて前方を見詰めて居た。信長は乗つたる馬を鐙で蹴り、放せ〜と出ようとする。處へ又も注進來る。

150 『前田孫四郎利家殿、丸根と鷲津の間にて、朝比奈備中守、江馬左京之進の兩軍、五六千に取り

卷かれ、只一人にて血戦いたし居りまする』

『オ、孫四郎が、未だ生きて居るか』

『ハツ、其働きは見事にて多くの敵を倒して居りますが只一人のことなれば、永くは續きますまいと存じまする』

『ウム、さうか』

助けの兵を出すことも叶はぬ場合、又しても孫四郎が討死と、注進の來るならん。家來思ひの信長は丸根の方向をちーツと見る。ところへ、御注進々々々と、御馬前へ來る。

『敵將義元は、戦ひに利を得たりと其儘、軍を納めて大高の城へ入らうとするものか、今桶狭間を進軍中でございます』

『何と申す、それは間違ひないか』

ところへ、先手から一騎馳せ戻つた梁田出羽守清近は、

『殿、今物見の者が注進の如く、義元が大高入城となりましては、今御出馬遊しても、他に作戦を御取りなされては、のう木下氏』と藤吉郎の方をも見た。

流石の信長も、心から驚かれた。敵が勝に乗じて油断をして居るところを、不意に襲つて一舉に勝を占めようと思つた。ところが敵將義元は思ふ存分味方の先手をうち破り、本陣の行かぬ中

に、早くも城へ籠つてしまふ。

大軍の籠つた城を小勢で攻める事は絶對に出来ぬもの、敵は今から城に這入つて、今日半日、今夜一夜、十分英氣を養ひ、明日は清洲へ向つて一度に攻め寄せやうとする作戦であらう、さうなつたら織田家は小勢、どうしても勝つことは出来ません。斯う考へたものと見え、皆勇氣も落ちんとした。途方に暮れた信長が、

「藤吉郎、汝の考へはどうぢや」

「大丈夫でござる。殿御安心遊ばせ、味方の勝利はこれからでございます」

いつもの大聲を出して、にこ／＼平氣で居る。此言葉に引つ立てられたか、萎れ切つた旗本の面々、顔色がなほつて來た。

「さうか、汝のことだ。能い作戦も出来るであらうか」

「ハイ、充分に、さうして敵の様子を考へますに、どうも腑に落ちぬ事がございます。今川はそれ程までに戦略の名將ではなく、我が強勇にまかせて前進する氣性、それが大高へ入城とは、どうも解せませぬ。今一度お物見を、柴田殿か池田殿に、大事のことゆえ御申付けを」

「ウム、それは宜い。權六、出羽、勝三郎、其方等三人で物見をせよ」

珍らしい斥候、大物見であります。ハツと答へて三將が馬に飛び乗り、馳出さうとするところ

へ、又も注進來る。

「只今今川義元は、桶狭間の、小松山下、田樂ヶ窪に陣をすましました。大高入りは致さぬ様子に見受けまます」

思ひもよらぬ、柵から牡丹餅のような吉報、此注進に、信長は躍るばかりに喜んで、

「オ、敵は田樂ヶ窪に本陣を移したか。これぞ熱田大明神の御加護を賜はりしと覺ゆるぞ。勝利は目前、皆の者、勇め、勇め、藤吉郎急げ、急げつ」

「ハツ、心得ました」とニツコリした。

此時まで照り付けてゐた暑い日が、俄に空は入道雲に被はれて、見る／＼一面に黒暗々、電光は物凄く、サアツと吹き來る冷風と共に、大粒の雨がバラ／＼と落ちてきた。

ソーラ、夕立が來たぞ、と云ふ間もなく、盆を覆へすやうな大雨、大雷ともなつた。

この雷雨こそ味方に取つては非常な援軍、押せや、押せやと織田勢は勢ひこんで善用寺の、砦を後に篠つくやうな大雨の中を、今州の本陣目ざして急ぎました。

此時今川義元侯は、勝に乗じて桶狭間より約十八丁、田樂ヶ窪といふ窪地に本陣を置き、勝軍の酒宴を開き、小敵と見て平然と盃をあげて居りましたは、義元程の大將も運の末でありまし

た。

義元はこの朝、即ち永祿三年五月十九日、昨夜宿りし沓掛を出て、南へ三十丁、大脇村まで來ると、向うに見えた黒煙、微かに聞える関の聲、

『オ、火の手が揚る。モウ敵は敗れたな』

味方の勝利と、旗本の勢五千人、いづれもニコニコ喜んでをります。其所へバラバラ十四五人御注進いたします。

『丸根の砦が落去、敵將佐久間大學を討取り、首級を持参いたしました。朝比奈の陣の者にござります。御大將へ御披露を願ひます』

『これは、御苦勞に存じます』

ところへ、又バラバラ、十人程馳來る。

『江間の陣の者でござる、只今鷲津の砦を落して守將飯尾近江守を討ちました。首を御實檢に供へます』

これを聞いて義元は喜び、

『ウム、余が威勢はどうだ。戦ふと同時に、然も敵方の勇將二人の首を得る。尾張の小僧、信長に何が出来る。アハ、ハ、ハ、』

それより次々に來る勝報に、

『ソレレ、首實檢ぢや、場所を選べ』

今川は敵を眼中におかず、モウ大勝利の氣で、戦場の法式なる首實檢の仕度を命じた。そこで大脇村から西北二十餘町、田樂ヶ窪といふところへ本陣を移しました。此處は低い小松山の下で二丁四方ほどの平地にて、田樂ヶ窪とは能く付けたもの、窪地であります。此所から十八丁行くと桶狭間で、桶狭間から一里行くと大高の城、今川方の將、鶴殿藤太郎長照が守つて居る城である。

この鶴殿も守將を他に代つてもらひ、先陣に出たいと願つたので、許されて城を出た。代りましたのが徳川元康、後の家康公、此頃は少年時代より今川家へ人質となつて居られたのです。さうして今川軍の兵糧を運送された。是を元康の大高兵糧入りと申します。

こちらは今川の本陣へ押掛け來るのは、近所の神職、僧侶、山伏、農家の重だたる知多郡、愛知邊の人々が、酒樽や肴、青物等をドシドシ運び挨拶に來る。戦國時代には、是等を禮の者と呼びました。

戦争次第で忽ちの中に所の領主が變つてしまひます。それ故勝利の軍の大將へは、早速挨拶をして置かないと、後日の爲に宜しくない。挨拶を受けた方では、新領土の者が歸服してゐると喜

んで、大將自身で禮を述べるのが習慣になつて居るのであります。

義元は大喜びで、床几を離れて立上り、

「お、能く来てくれた、目出度い〜。勝軍の祝ひぢや。呑んでくれ、祝ひの酒ぢや」

忽ちの中に大酒宴となつた、

義元は敵を一口呑みにした心持で、全く眼中に織田方はなかつたと見える。

其内に一天俄かに曇りきて大暴風雨とあひなつた。

「これは強い風雨となりました。御出馬は御留め申上げます。雨の罷むまで此處に御休息を願ひます」

「さうぢや、是しきの事何でもない。雨に負けぬやうに飲め〜」

時に義元の本陣は、先手〜と兵を分け五千の内を又も四千人分けて敵に向はせ、只半日に信長軍を亡さんとして、残るは僅かに千餘人でありました。

ところへ織田の旗本勢これも八百餘人、他は八方へ分けた。大風雨を衝いて、間道裏路より太子ヶ根の上に出でた。田樂ヶ窪は真下に見える。此所まで来ても敵に知れなかつたのは、嵐のためと酒宴に油断のためであつた。殊に織田方は地の理にくはしく酷い風雨の中をも泥々になつて來られたものです。

信長は大音揚げ、

「今こそ勝負の分れ路、ソレ下れツ」

ワア〜と、と鬨の聲を揚げて攻め下りました。

今川方は織田勢とは知らず、味方に謀叛の者あつて、敵に内通反忠の者かと驚きましたる處へ現れたる窠の紋の旗馬印、扱は信長の軍勢なるかと亂れたつ。

義元は陣刀をとつて立上り、

「者共驚くなア、同士討するな、折敷け、敵は小勢だ、引つ包んで討取れ」

此強い號令は、不意の亂入の中にも、流石は義元であつた。されど此號令が耳に入らず、右往左往に、我先にと逃出したのは、始めの勝利に安心したのか、酒に酔どれて居たためか、旗本の勇士達とは名のみにして、實力のない連中が、織田方の猛兵に不意をやられたからである。

義元は陣刀を頭上にふり上げ、

「逃げるとは何事だ、引返して戦へ、義元に續け、織田の軍勢何程の事やある」

大聲あげて崩れる味方に下知するところへ、織田方の服部小平太駈來り、

「ヤア〜、夫れなる大將は今川義元侯と見受たり、見參せん」と槍をしていて突つ掛る。
「推參なり、退れ〜」

『何を、覺悟あれ』

突き出す槍、體をかはして義元は、松倉郷の義弘の太刀にて槍を切拂ひ、小平太の左の膝へ切付けた。あつと叫んで仰向に倒れた。

それ大將を討てと、左右よりかゝるを、バタリ／＼と切拂ふ。見る／＼内に七八人血煙りたつて倒れるところへ、毛利新助が後から組付いた。

『下郎退れ』と組むうちに、小平太が起上り横に廻つて脇腹を一ト太刀、グサと貫いた。さしも強勇の大將も、遂に二人に首をあげられた。可惜最期を遂げました。義元侯は此時四十歳でありました。

毛利新助、服部小平太は、木下の計ひでこの戦功を、相功名として功名帳に付けた。今川方は總敗軍、四分五裂になつたるを、朝比奈備中守が退口を上手に、駿河へ退却いたしました。討死二千六百人と數へられた。朝比奈が居なかつたら、五萬の内残るものは幾千と無かつたらうと後に評されて、大敗しても朝比奈の名は、今川家に過ぎたるものと謳はれたのでした。

前田利家が大血戦大功は、勘氣を免されお目通り、孫四郎の生存を信長公は大喜び、此大功は前田家、百萬石の御家を建てる根元でありました。

信長は勝つて甲の緒を緩めず、勢ひに乗つて長追ひをせず、全軍を纏めて熱田に歸り大明神様

に御禮詣りをなし、御神馬を献納。其日の内に清洲城へ歸られたは、誠に不思議の大勝利でありました。

蜂須賀一門の大働きは、御氣になつて多大の賞を頂き織田家へ仕へる約束が出来、一ト度、海東郡蜂須賀村へ歸りました。

信長公は今川五萬の大軍を、只一日に破つて海道一の剛將を討取り、織田家の武名は一時に高くなりました。續いて木下藤吉郎も此度の采配に、益々殿の御覺え目出度く、家中の信用厚くなりました。

桶狭間、田樂ケ窪の古戦場には、今もなほ、今川侯の墓標が二基建てられてあります。『今川治部太夫義元之墓』少し上の方に『天澤寺殿四品前禮部侍郎秀峯哲山大居士』とございます。

是にて桶狭間の巻を終ります。次は竹中半兵衛といふ、大學者大智者を、藤吉郎が向ふへ廻す美濃攻と相なりますが。

桶狭間の合戦に、大高城に居られました、徳川藏人元康は、今川方の大敗走後、我居城なる三河國岡崎の城へ、難をのがれて入りました。其後、信長と和議を結び、徳川家の安全を計り、さ

うして信長を兄の如くに尊敬を致しました。
さても其後、織田家の威勢は隆々旭日の昇るやうな勢にて、大戦後の英氣を養ひ、元氣益々盛んとなりました。

さア、斯うなると信長公、美濃征伐の氣分で心の内は一杯である。

それは、どうかと申しますと、隣國美濃の稲葉山の城主、齋藤山城守入道道三、美濃全國の領主で、信長の舅である。道三が其子義龍の爲め殺された。されば舅の仇を討たうと心掛けて居たが今川が白眼で居たので軍を出す事が出来ずに居つた。其内に新九郎義龍は病死して、其伴龍興が家を繼いで居る美濃の勢力は大したものである。

信長は、今川を破つた其勢ひに乗つて愈々美濃征伐に掛らうといふのでございます。
清洲城に諸將を集め、

「此度こそ美濃へ出陣せんと思ふ。皆はどう思ふ、意中を述べてくれよ」

柴田勝家進み出で、

「仇討の合戦然るべく、美濃征伐の先陣承り度存じます」

つゞいて池田も丹羽も、諸將言葉を揃へて同意々々と申上げた。中に藤吉郎一人は無言。

「藤吉郎、其方は發言せぬやうだが異存はあるまいな」

「ハイ、拙者は御同意出来ませぬ」

諸將は座をすゝんで木下を睨んだ。名智の藤吉郎が不同意とは、只旋毛曲りの言葉とも考へられぬ。深い意見のあらうかと、その發言を待つた。

「一同が同意と云ふに、其方一人の不服とは、してどう云ふ意見ぢや」

「稲葉山の城主、齋藤龍興は愚將にして恐るゝに及びませぬ。然し金華山稲葉山は天下の名城、軍師竹中半兵衛重治は、軍學兵法の大學者にして大智者、古今にまれなる采配取、又西美濃の三人衆、稲葉伊豫守、安藤伊賀守、氏家常陸介、尙ほ日根野備中守、同彌次右衛門、其外猛將勇士雲の如く……残念ながら只今の御當家に勝利の見込はございませぬ。時の來るを御待ちあそばせ」

「汝は敵の智勇を擧げて、味方の勇氣を挫かんとするか、我方にも敵に勝れし智勇の者數多あり、桶狭間の戦を考へよ、小勢を以つてあの大軍を敗つたではないか。今は三倍にも餘る軍を以つて美濃と戦ふに、何故それ程恐れるか」

「御言葉を返し恐れ入りますが、それは些か違ひます。義元は猛將にて、旗本には勇將もありましたが、美濃の將達は又一段勝れたりと存じます。然かも大軍師とも云ふ可き竹中半兵衛あり、又今川勢の如く、長驅し來りし敵に非ず、我より不知案内の敵地にいる、敵は居がならにして戦

ひを待つ、之大なる利益、今川と同日の論には成りませぬ」

「言ふな藤吉、此戦國時代に、何れの國にも勇將智將のない事があらうか。それを一々恐れては軍が出来ると思ふか。それ程齋藤勢が恐ろしくば、供するには及ばぬ。留守居を申し付ける。重ねて意見は無用なるぞ、美濃攻と決したぞ」

藤吉郎秀吉の云ふ事は、何んでも用ゐられる信長公が、珍しく此時ばかりは御聞きにならぬ。美濃攻めは、餘程前から望んで居られたものとみえます。

「それでは是非に及びませぬ。併しお留守は御免を願ひます。どうぞ御供を」

「アハ、ハ、ハ。矢張出陣するか、許す」

「今一ツ御願ひがございます、後陣締備を仰せ付けられ度存じます」

「宜しそれも許してやる」

諸將は口々に、木下の變つた言葉を、何か考へのあるものかと語りながら退出した。

扱て此度の軍勢は、二萬八千餘人、愈々出陣と成りました。先陣は相變らず柴田勝家、二陣は池田信輝、三陣は丹羽長秀、四陣は佐久間信盛、五陣は總大將の本陣、前後合せて十三陣の大軍となり堂々と繰り出した。

金華山稻葉山に向ふ道は二筋であります。一筋は新加納芋島村街道を通つて城の正面大手に出

る道、一筋は南宮山から城の搦手へ出る道、芋島街道は道が廣く平らにて、戦ふには最も便利である。南宮山道は道路険悪にて、行軍に困難でありますから、芋島道を進軍することとなり、ドシ／＼行くと先手から物見の武者が本陣へ注進した。

「只今敵の一陣、城を離れて陣を立てゝをります。旗の様子では、牧村牛之助美濃方の先陣と心得ます」

「何んと、城内から出て來をつたか。それは宜い敵ながらも勇氣のある感心な奴、城内に籠られては、申々の苦戦と思つてゐた」

早其内に戦ひが始まつた。柴田、池田の軍と牧村勢は烈しく攻め合つた。猛烈な織田方の勢ひに城兵はドーツと崩れだした。

柴田、池田の兩軍は崩れる敵を追撃して、ワアーツ、と勝鬨をあげた。

第一戦に勝利を得て、信長は得意満面、ふと味方の後陣の方を見てあれば、こはそも如何に、本陣の印と同じ、青黄赤白黒、五色の吹貫が立てゝある。

「出羽、出羽は居らぬか」

軍目付の梁田出羽守清近が馳來り、

「ハツ、御用にござりますか」

「あれ、五色の吹貫を見よ」と後方を指した。

「これは怪しからぬ」

「我が本陣に紛らはしきは何者の陣だ」

「木下藤吉郎の陣と存じます」

「ウム、不都合な奴だ。予に一言の断りもなく、其方參つて叱つてやれ、直ぐ引下してしまへ」

「心得ました」

出羽守は馬を飛して木下の陣へやつて参り、

「木下殿」

「ヤア、梁田氏吹貫のことをごさるな」

「殿は御怒りである。なぜ斯ういふ事をしたのだ。吹貫の事をごさるな等と、平氣で居るのは圖

圖しいぞ。引下せとの御錠である。直ぐ下しなさい」

「折角ながら、其儀は御許しを願ひたい。今に之が大役を努めますから」

「何、馬鹿なことを、殿の御言葉を何と必得てをる」

「ではござるが」

「エ、面倒な、下さなければ」と陣刀を抜きうちに、竿の中央からバサリと切つた。

吹貫はドーンと落ちた。

「さらば」

「彌兵衛、どうだ見事に竿を切つて行つたなア、アハ、ハ、殿の御立腹、出羽も怒つて居つたな、サア又立て、くれ」

「こんな事をなすつて能い物ですか」と云ひながら今度は、五色に彩つた鎗旗を立てた、出羽守は本陣に戻り、

「藤吉郎でございました、直ちに引下しまして恐縮、いたし居りました、何卒御許しを」

御主人が怒らぬようにと、藤吉郎を庇護つて斯う申上げた。

「ウム、不埒な奴だ」

と云ひながら、又後方を見ると、五色の大旗が翻へつてゐる。

「出羽、あれを見よあれを」

「ハッ、實に困つた奴です、彼はどうかして居ります」

「怪しからん、藤吉を連れて参れ、清近急げつ」

清近も立腹して馬を走らせた。

「木下殿、困るじやアないか、御怒りを静めたのに、又斯様なものを立ては、此度は本當にお怒

りて、藤吉を引ッ立つて来いと仰せだ。サア一緒に来なさい』

『ハア、夫では参りませう』

平氣な顔をして、出羽守清近と共に本陣へ、

『藤吉、汝は予を嘲弄するか、本陣より外に立つる事を許さぬものを、兩度迄立てるとは予を輕蔑にするか』

『左様な御無禮、不埒なことは致しませぬ、私深き考へがござります、何卒今迄御許しを願ひます、日暮になりませれば必ず御役に立つ事と存じます』

『何を申すか、あの葎旗が何の役に立つものか』

『それが御役に立ちます。殿御敗軍の場合に』

『何を申す』

『味方敗軍の際は、あの旗が殿の御危急を』

『黙れッ、敗軍危急などと、先手を見い味方は勝ちに乗じて居るぞ』

『今に負けませぬ』

『黙れ黙れ、不祥のことを言ふと許さんぞ、若しあの旗が役をせぬ時は如何いたす』

『其節は腹を切つてお詫を仕ります』

『確乎と申したな、宜しつ、今夕まで許すぞ』

『有難く存じます、それでは御免を』

戦はますく激しくなり、城兵は崩れるかと思れば人数を増し、必死の戦ひを仕掛けて来る。織田の先陣二陣はこれを敗つては、追撃する、折から一發の烽火が空中高く、ドドドーンと揚がつた、これが合圖と見えて、四方八方に金鼓の音亂調子に響き渡り、ワアー、ワアーと山も崩れる様な開の聲、みるゝ間に前面へ乗り出したる一軍は、角取額三の字の紋付たる旗馬印を押立、先に出たる大將は、赤糸織の鎧、同毛絲五枚鍔の甲、黒鹿毛の大馬に跨り長槍を掲げ、威風四方を拂ふ武者振にて、三千餘騎を従へ、織田方の本陣目掛けて押寄せたは、これこそ西美濃の三人衆の一人、稻葉伊豫守正道である。

ついでに聞える太鼓の音、左手の方より現れたる一隊は、眞先に白地へ藤の丸の紋付いたる大旗一流、金藤の丸三方見込みに猩々緋赤馬籠の馬印を押し立てたるは、是れも西美濃三人衆の安藤伊賀守、旗下には三千餘人、ついでに出でたる右手の軍は、急の間の太鼓を、ドーン、ドーン、ドンドン打ち立て、紺地に白く三ツ石疊の紋付いたる旗、白銀團子の馬印は是れも西美濃三人衆の家常陸介、二千餘人の荒武者なり、又も聞ゆる太鼓と共に、旗差物を翻へし、美濃の強勇と聞えをとつたる長井隼人正の千五百人、信長の後を断ち切らんと砂煙を揚げてすゝみ来る。其早

い事風の如くだ、と見る間に又も小牧源太左衛門、安藤九右衛門の兩軍二千餘人、右手の林からドツト関の聲をあげて打て出た。見る／＼うちに織田勢を四方八方から包圍いた、無二無三に攻め立てる戦ひ上手の美濃方に、流石の織田勢も浮き足だち防ぎ兼ねてみえたるは、これこそ、竹中半兵衛が見事な作戦、十面埋伏の戦法、二萬餘りの軍勢を二三十萬の様に見せ掛けて巧みに兵を配置したるもの、これぞ、古唐土の諸葛亮孔明軍師の軍略に習つたもの、犇々と攻たてながら口々に、信長は何れにある、見参く、信長の首を渡せ、と呼はり／＼打ちかゝる。

今は全く敵の計略に陥たる信長は、

『ソレ、戦ひは是迄なるぞ、要害の地まで引き上げろ、引けー／＼』
柴田、池田、丹羽、森、林、佐久間の諸將、手勢を指揮して死の防戦と、其甲斐なく打ち破られて、黒鬼と呼ばれた柴田も、赤鬼と云はれた池田も、揉みに揉まれて散々の敗北、信長の本陣にも美濃勢が雪崩の如くに押し寄せれば、旗本勢も亂れ始めた。信長自ら陣刀を振り、漸く一方の血路を開いて五六町退却、ホツと一息する間に又もや出たる敵の一隊は、美濃方名代の勇將日根野備中守、弟彌次右衛門、信長殿に見参せんと鐵の棒を振り廻しながら呼ばはるは、彌次右衛門であつた、信長は戦ひながら走るところへ、全身に血を浴び兜は飛んで亂髪となつた、梁田出羽守清近が馳せ來り、

『殿、思ひ掛けなき今日の敗戦、残念ながら少しも早く御引上げを』

『ウム、残念だ、出羽傷を負ふたか』

『イエ、ホンの薄傷でございます、サアお早く』

『思ひも寄らぬ敵の計略に落ち入つた、それに就いて先刻藤吉郎の言ふたこと、彼の事ゆゑ何か考えて居らう、藤吉の陣へ参り、早く此危急を救ふ工夫をせよと申し傳へよ』

『ハツ』

清近は馬を煽つて遙かの後陣へ來て見ると、木下の三百人は味方の總敗軍も知らぬ顔にて、何處を風か吹くかと云はぬばかり平然と控へてゐる。

『木下氏、味方は残念ながら總敗軍だ、御本陣も崩れた』

『左様か、さう思つた、さうだらう』

『何を云つて居るんだ、殿も自ら御奮戦、藤吉郎が葦旗を役に立てると申して居つた、早く役に立てよと仰せでござる』

『成程、然し未だ少々早い』

『早いと云ふが、味方は敗軍ではないか』

『いや、最前御約束申上げましたは、夕刻日没の時でございます。まだ日が少し高い、拙者の旗は日

没でないと役をなさぬ、もう少しの間戦ひを御続けなさい」

「夫まで持ちこたえが」

「まだく、大丈夫、もう一ト苦しみます」

「イヤに落ついて居る奴だ」

出羽守はブツ／＼云ひながら引返した。

「オ、出羽どうした、藤吉に會つたか」

「ハイ、藤吉は日没まで御待ちを願ひたい、さう御約束を申上げたと答へました」

「ソウか」

こういふ内にも苦戦難戦をつゞけて居た。

「出羽、日暮れちやぞ、藤吉に催促せい」

「心得ました」

又々馬を飛して來ると、藤吉郎が聲をかけた。

「梁田氏、未だ生ておいでか」

「何を、木下、モウ日没だ、殿の御催促」

「ウーム、清近殿され見られよ、日輪は西にだん／＼傾き、あら有難や、さらば是からだ」

「こんな時に、冗談ではない早く出来ぬか木下氏」

「宜しい、我君は戦へば勝つものとのみ御考へなされて、敗ける事を考へられぬから、此度の敗

戦は能い御意見となる」と言ひながら振り返つて浅野彌兵衛を呼んだ。

「彌兵衛、ソレツ、宜いか」と目配せすれば、

「ハイ、心得ました」

彌兵衛長政は、五色の旗竿に手を掛けて、ウーーン、と力の限り振り動かせば、左右にバラバラ閃めきわたる建旗の動きに連れて、如何なる合圖のあつたるものか、稲葉山城の背面、南宮山を始めとして、遠近の山々に、一時に翻へる五色の旗、幾百流といふ數を知らず、數千數萬の松火は夕闇の空に燃え輝き、うーわーと揚げたる関の聲は、稲葉山も崩るゝかと疑ふばかり、其凄じさは、何んに例へ様もなき有様。

これを見て、今迄勝ち誇つたる齋藤勢、寝耳に水の驚きで。さては敵の計略に落ち入つたぞ、我本城を空虚にしてゐる其隙を窺ひ、敵の大軍搦手より城攻めすると見えたり、本城を奪はれては一大事、退け、退き上げろ、と、周章狼狽して各陣ともに退却する。モウ少しで總大將を討取ることが出来る、鐵棒を振るつて居た日根野兄弟も、ズンズン、スタ／＼引上げた。齋藤方の大軍師、竹中半兵衛は、小手をかざして見て居りましたが、

「あれは敵の計略なるぞ、瑞龍山の峰傳ひ、南宮山より搦手へ、攻め来るやうに見せ掛けるが、あれは偽りの軍勢なるぞ、静まれ、止まれ、後の旗や松火に目を付けず、信長を討取れ、織田勢を倒せ、押せ、押せ」と聲を濁して下知をしたが、周章亂れた軍勢は、軍師の下知が耳に入らず、我先きにと雪崩の如く本城へ引上げてしまつた。

織田方は漸く陣所へ歸ることが出来ました、辛くも虎口を遁れた信長は、殘兵を纏めて梁田清近と顔を見合せて、大息した、處へ木下秀吉が罷り出ました。

「藤吉郎、今日の戦、汝が居らねば、味方の諸陣はどう成つたであらう、予も其方の力で九死に一生を得た、其方は命の恩人ぢや」と藤吉郎の手を取つて喜ばれた。

「これは勿體なき仰せ、私如きものが、殿の御武運に……依るところにござります」

「そうして今日の計略、遠近の山々にあの軍勢は如何したのだ」

「此度の御出陣を御留め申上げましたが、お聞入れなく、味方の安危心元なく存じました。夫故例の蜂須賀小六の一味に申し付け、また近方の農夫達に一人につき永樂錢一貫文づゝを與へ、數百人を驅り集め、五色の菟旗激しく前後左右に動くを合圖に、同じく菟旗、紙旗等を懸へし、鬨の聲を揚げ、松火を振り照すやう命じ置きましたのでございます。昔、楠正成公が戦はずして、宇都宮公綱の大軍を走らせましたる御智を些か學びましたるものでござります」

「オ、左様か、其方は勝れた軍略家ぢや」

「恐れ入ります」

それより程なく織田方は、敗軍を纏めて清洲へ引上げました。

其後、軍の休養も終りましたので、清洲城中に軍議評定を開きました。

「先頃美濃の敗軍は、味方に足溜りのなきも一ツの原因かと思ふ。依つて洲股へ砦を出來、足溜りを構へて後、美濃に向はんと思ふ、一同の考へはどうか」

洲の股は敵の領地、之は中々六ツケしい、誰一人可否を答へる者もない、暫くして森三左衛門進み出で、

「洲股へ砦は無益の事と存じます、洲股は美濃の地で御座る、若し洲股川等出水の場合は、兵糧彈藥等、川を越えての運送に差支、敵の爲忽ち討破らるゝは必定、御妙計に似て宜しからず、それより他に御作戦の計を御立てが然るべくと存じます」

三左衛門の言葉については、

「それこそ宜しう御座いませう」と一同揃つて申述べた。

信長は不満な顔をして、此考案に誰か一人ぐらゐ賛成するものが有さうなものだと、座中を見まはしたが、木下を見て、

「藤吉郎、其方はどうぢや」

「ハア、御一同が斯う述べられましたを私が……」

「遠慮はいらん、其方が評議ぢや、言ふてくれ」

「餘り遠慮する風でもない、何を言ひ出すかと皆、木下の顔を見て居る。」

「夫では御免を」と座をすゝめ「申述べます、森氏の御言葉一應御尤ものやうに存するが、又考

へますと、出水洪水は三日か五日のもの、兵糧なども四五日たてば水が引きます故、運送に差支

もありませぬ、援軍を送ることも何の仔細もござらぬ、敵地へ特、至極よろしいと心得ます」

「木下氏、如何に殿の仰せなりとも味方に不利と存すれば御止め申すは臣の道。御一同が申上げ

たるを、至極よろしいとはどう云ふ事だ、洪水は三日五日で必ず引くといふ手本があるか」

「ハ、ア、手本、然らば森氏、三日五日にして引かぬといふ手本もござるまい、戦をなす者が

洪水などに恐れては、一日も戦は出来ませぬ、私、は宜しいと信じをります」

三左衛門も、一同も無言となつた。

「いや論はそれ迄、予は築いて見たい、不満もあらうが同意してくれ」

其思召なれば御意に従ひます、と一同。

「然らば誰か勇氣のある者は洲股へ行つてくれ、砦を築いて參れ」

佐久間右衛門信盛が出た。

「某に仰せす」

に帰して多
と清洲へ歸つて信長公に御評をしました。

誰か右衛門に代つて洲段に行く者はな、早く
森田勝家は、

「要害堅固に夢

數永きは敵地の事とて間違ひを生じやす

五日にイ

「ウム、七日間にして木材等は矢張り筏に組んで送るのであらうな」

「イエ、美濃國にも木材は澤山ありますゆえ、材木はすべて敵地のものを使ひます」

「さうか、藤吉郎の考へは、予には判らん萬事を任す、充分遣れ」

信長は木下を信用してゐられるから、すぐ任せます、尤も藤吉郎の仕事はいつでも成功してをります。重役達も、何んだ猿めが、又出しや張り居る、などと悪口はするが、心中には恐れて居たり、口惜しがつたり、又大事の場合には頼みに思つたりして居る。然し洲股の普請に、五百人と七日間には呆れ、何んば藤吉でも此度ばかりは失敗だらうと話してゐる。

佐久間だけは、我慢ができないか。

「木下、拙者は敗軍の將だ、敗軍の將は兵を語らず、一言も無いが然し木下、五百人とは何んだ、七日とは何んだ、餘り口が過ぎようぞ、傍若無人だ、若し出来なかつたらどうする、其時の事を聞かう」

「アハ、、、御重役、御家老方の御立腹では恐れ入ります、然し自信あつて致すこと、出来ざる時は此首を進呈いたしませう」

「うんさうか、首をくれる、其時は黒焼にして吞まう、猿の黒焼は薬になるかも知れぬ、ウフ、、、」

佐久間の雑言を談笑の中に聞き流して、我家へ歸り準備をととのへ、五百人を引率して、洲股へ出張した。モー其時には城が半分出来てゐた。

木下の考へでは、誰が行くとして普請の出来るものではない、必ず失敗して歸つてくるに違ひない、結局は自分に廻つて來ると思つてゐたから、佐久間柴田の遣り損じて居る間に、蜂須賀小六の一門に命じて、築城の下拵へをさせてあるので、それを運んで來て、相印通りに組合せて、仕上げをすればいゝやうに拵へて有つたので、それを……、晝夜も分たずに組上げて、仕上も終り、七日目の夕刻には全く出来しました。

美濃方では、二三十日抛つて置き、半分も出来た時分に攻めてやれ、木材石材の十分集つたところを分捕つてやらう、と暢氣に考へて居たところ、もう出来上つて居ると斥候の注進に、サア大變、これは一大事、これは不思議、と驚いて、俄かに集まる一萬餘人。それ一揉みに揉み潰せと、三方から攻め寄せたが、どうして今度はさうは行かぬ、蜂須賀一味の野武士隊三千餘人、どつとばかりに討つて出で、美濃勢を滅茶々々にうち破つた。齋藤勢もこれ迄とや思つたか、稲葉山へ引揚げてしまつた。

そこで、洲股城は見事に出来した、信長は喜ばれて木下を城主になされた、柴田佐久間を始めとして家中の家來は木下の神變不思議の早業に、驚き呆れて目を見張るのみでありました。藤吉

郎が小さい城でも、一城の主、城持となつた始めである。擬是からが、本格的稲葉山攻めといふ御話にすゝみます。

洲股城が出来したので、いよく美濃國へ攻め入らうと、信長は焦心りましたが、秀吉は中々同意しないのです。何故同意しないかと申しますと、前申述べた、竹中半兵衛重治といふ大軍師が居るからです、其の智恵袋の深い事を流石の秀吉も氣にしてゐる。又西美濃の三人衆、稲葉伊豫守、安藤伊賀守、氏家常陸介の三豪を味方に引入れてからの事も考へて居る、そこで一計を案出、大澤主水を呼んだ、前上島主水。

『さて大澤、貴殿に相談がある、一杯呑みながら緩くり語らう』

『これは恐入ります、貴殿などとは、主従でござるから其様に御話を』

『アハ、ハ、ハ。さう固くならぬ様に、己は友達と思つて居る。然し相談は外でない、貴殿の兄の大澤治郎左衛門殿を、御主君が御執心で、どうか藤吉郎、主水にも話して兄を予に歸順させるよう、然れば重く用ゆる、と度々の仰せである、相なる可は、否是非とも織田家へ隨身されるよう配慮を頼む』

『さう成ますれば私も安心仕ります、舊主を誹謗いたすやうなれど、齋藤龍興侯は、日夜酒池

肉林にのみ心を置いて、忠臣の言葉を御用ひなく、軍事の御研究もなく、到底將に將たる器でない事は兄も心得てをります。御當家の御取持にて、信長公に仕へられますようなれば兄も満足致すことと存じます」

「ウム、夫では早速兄に面會して、一骨折つて貰ひたい」

「ハイ、鶉沼へ參つて、必ず兄を連れてまゐります、其節は兄の身分を宜敷御願ひ申上げます」

「さうか、何分頼む、殿もさぞ御喜びにならうと存ずる」

直に主水は仕度して、兄の居城、美濃の鶉沼へ出掛けました、幸ひ在城して居ります故、

「御無沙汰を致しました」

「やい主水、珍しいな、兄弟でも妙な間柄となつて、會ふ事もできぬ。注意して来いよ、何か用でもあるか、其方は齋藤家に見切をつけて、織田家の器量人、木下に仕へたので、己も安心して居る、前途に望みがある、此方は世に云ふ馬鹿正直か、亂暴で愚將の殿に一身を任せては、此後の成行も如何かとも思ふ、妻の兄、竹中半兵衛先生にも御氣の毒だ、日本一といつても能い、竹中先生の様な智者の言葉を御用ひがない、呆れた事だ、先生も、御諫めしたが駄目ぢやと諦めて、近頃は栗原山に隠遁をされたやうな始末だ、齋藤家ももう永い運命はないと思ふ。さう考へると、餘りよい氣持でないのう」

「ハア、夫では齋藤家に見切をつけておいでですか」

「ウム、でも今更どうにもならぬ、其内織田家も兵を出すであらう、兄弟で敵見方ぢや、望む事ではないが、是も戦國の運命だ、致し方もない、拙者は戰場に屍を曝す覺悟だ、お前は天晴出世して大澤の家名を天下に揚げてくれ、御両親なき今日、名を揚げるのは孝の終りをととのへるといふから、イヤ淋しい話ばかりをして、アハ、ハ、ハ。久し振りだ、主水一杯呑もふ」

「ウム、さう云ふ御決心ですか……兄上、實は内々の御相談があつて罷り出しました、此際他に御決心を御代へに成りましては」

「何、他に決心とは」

「私同様、織田家へ御隨身なされては如何でござる」

「エツ、織田家へ」

「信長公は兄上の武勇を聞き召され、非常にお慕ひなされます由、主人木下殿へ内々御沙汰、主人より私へ此御話がありました、御爲になる事を申上げて御聞入なき愚將に仕へるより、名君へ御仕へになつては如何です、最初より一城の主とは參るまいが、御奉公を續けて二三年後には、貴方の事です、相當の御出世は目のあたりです、御決心を御すゝめいたします」

「ウム、さうか……本當に木下殿が取なしてくるかな、織田家で重く用ゐるかなア」

「エ、木下殿が萬事心得てをらるゝ。先づ木下殿に御會見をなさい」

「さうか、宜しつ、承知した、會はう」

其氣分のあるところへ、勧められた、治郎左衛門は、直様承知をして、洲股城へ、木下を訪ねました。

將を射んと欲せば先づ其馬を射よとか、竹中を味方に抱き込もうとした秀吉は、先づ大澤を生捕にしたものです。大澤を見ると、下へもおかぬ大歓迎。

「これはく大澤殿、よく御出でくださった、木下藤吉郎でござる」

「木下氏、始めて御意を得ます、主水が一方ならぬ御厚志を給はり有難く存じ居ります、將來宜敷御指導を願ひます、尙此度は拙者の儀につき數々の御配慮、御言葉に従ひまして」

「イヤ、其御挨拶では恐入ります、主君は、貴殿を御懇望で、何とかして味方に御入したいと、度々の仰せでござる、此事をお聞きになつたらさぞ御満足と心得ます、早速清洲へ明日にも御案内致させませう」

「何分よろしく御願ひ仕る」

「萬事心得て居ります、先づ御緩りと休息あられるよう」

叮嚀なる待遇に、治郎左衛門はすつかり安心して、鶴沼の城内から妻子を呼び寄せ、全く尾張

の人になつた氣分で、喜んでしまつた。それから秀吉は大澤を同道、清洲城に参りますと、豫ねてうち合せてあつたから、出迎ひも十數人、大廣間に案内、信長に披露をしました。

「これに同道の御人は、濃州鶴沼の城主大澤治郎左衛門殿にござります、此度殿 歸服仕り、永く御奉公忠勤いたしたき望み、何卒相當の御役仰せ付けられ度此段、拙者よりも御願ひつかまつります」

治郎左衛門は平伏して、定めし優遇の御言葉があらうと、楽しみに待つて居た。

ところが信長公は不満な顔、

「藤吉郎、齋藤の家臣大澤治郎左衛門は其者であるか」

「御意の如くでござります」

「ウム、こりや大澤、汝は齋藤家の忠臣と聞く、さう容易く織田家へ歸服すべき者ではない、察するに降参と見せ掛け、油断を窺ひ、予の寢首でも取らうとする所存であらう」

「ア、イヤ、殿、左様な事では」

「イヤ、さうだ、藤吉其方は欺かれて居るのだ、斯様な人物を伴ひ來るとは何事だ、早々下れ、立てつ」

「これは、御考へ違ひで、先づ暫く」

と留める内に、信長は立上り、さつさと奥へ引込んで行かれた。列座の方々も皆退座をして、残されたのは二人限り。

『これはどうした事でござる、何か御話の屈がぬことでも有りますか』

『大澤氏、とんだ事に相成つて、何共御氣の毒に存じます、どうした事か、斯様な譯は無いはづですのに、兎に角退出して御相談を致さう』

兩人は這々の體で洲股へ戻つてきた。

『誠に困りました、今更鷲沼へは歸られず、清洲へは仕へられず、家はあれども歸られず、國あれども走り難しと云ふ事は、これであらう、木下殿、私共は此先何として能い物か御力を拜借いたしたい』

大澤主水も心痛して、秀吉に頼みますと、

『まア心配するな、然し治郎左衛門殿、妙案とすれば、貴殿の降参が偽りでない、誠であると云ふ事を御信用を願ふよりしかたがない、まア靜かに考へませう』

『ハア、ハア、』

三日ばかり過ぎると秀吉が、

『大澤殿、やうやく一策を考へ付きました、これならば』

『ハア、どう云ふ策でござるか』

『それは竹中半兵衛先生のことです、貴殿の御縁者ださうで』

『ハア、妻の兄です』

『其竹中先生を主人が御慕ひ申してをらるゝ。さながら大旱に雨を望むが如く』

『どうも當になりませんですな』

『イヤイヤ、今度は間違ひない、あの大先生を貴殿の力で御當家へ隨身、いや御客分として御優遇いたすゆゑ、御迎へ出来る様に、一ツ御骨折下さい、さうなれば御疑ひは晴れて、二心なき者と重くお用ゐるにならるゝ事は申す迄もない』

『それは宜いに違ひないが、先生は今栗原山に閑居をして御いでだが、齋藤家は見限つても二君に仕へる御方ではござらぬ、拙者が説いても御耳には入れますまい』

『さア其處だ、一ト通りや、二タ通りの話で到底従ふべき人ではあるまい、御身一人では駄目だ、拙者が先へ参つて、充分説いて見やう。先づ荒ごなしをして置く、其後へ行つて説くのです、其説きかたは、先生が織田家に居れば、齋藤殿が最後の場合、家名も命も残ると云へば、必ず御承知なさると思ふ』

『成程、御名論だ、木下氏は御器量人だ、ア、後世恐るべし、なア主水、能い御主人を持つて幸』

福ぢや、木下殿は天下の人傑だ」

「アハ、、、イヤさう言はれては赤面の至りだ、ウフ、、、、」

其日は大澤を客として、木下一家の小宴を開き、治郎左衛門一家を慰め、翌朝は藤吉郎只一人、栗原山の竹中を訪ねて行きます、是からが秀吉の雄辯、栗原問答になります。

さて栗原山中へ分け入つてゆく。秀吉は、黒木綿の野袴を穿き、身體に不似合ひな、引摺る様な長大小を差して、風呂敷包の小さいのを背負ひ、深編笠を冠り、どこから見ても武者修行の者である、竹中の庵は何處かと、あちこちと道をさまよつて居ると、麓の方から十二三の子供が一人、大きな瓢箪を背負つて、スタ／＼上つて来た。

「あゝ其所へ来る童子、物を訪ねたい教へてくれよ」

「ハイ何を御訪ねですか御武家様」

「私は諸國修業の者だが、此御山に迷ひ入つて困つて居る、何處かに一ト夜泊て呉れる家はあるまいか、存じて居らば教へてくれよ」

「それは氣の毒ですが、この山の中には泊るところは一軒もありません、先生の家へ来てもらいなさい、先生が泊めてくれるかも知れませんよ、頼んでもらいなさい」

「それは忝けない、先生に頼んでおくれ」

竹中重治の召使であらうと、童子の跡から付いて行くと、七八町にして見へる一軒家、竹の柱に萱の屋根、聖人君子の住居かと思へる、山中らしい風雅な庵。

「此處ですよ、小父様少し御待なさい」

秀吉は合點して門口に待つて居る。

「先生只今、お酒を瓢に一杯買つて來ました」

「オ、戻つたか、御苦勞ぢやつた、ナニ／＼鮎の干したのを求めたと、能く氣がつくのう、疲れたであらう」

「先生途中で旅の武士に會ひました、道に迷つて難儀の御様子です、一夜泊てあげてください」

「さうか、それは御困りであらう、泊てあげなさい」

「はい。侍の小父様、泊てあげると先生がおつしやつた、さア足を洗つて御上りなさい」

童子の案内に、家の中へ入れば、多くの書籍を堆たかく。床の間には山水のかけもの、圍爐裏を前に座して居る人は、未だ四十には間のある、眼光鋭く、立派な人物、これこそ名高い竹中重治と見て、兩手をついた。

「これは御當家の御主人でござるか、拙者は諸國修行の者にて、中村彌十郎と申します、山中に

難儀の折柄、御泊め下さる御厚志、有難く御禮申上げます」
「御遠慮なく、何もお構ひは出来ませぬが、瓢の酒でも召あがれ、山中のことゆえ、御馳走は焚火ぐらゐで」

「イヤ、とんだ御厄介に相成ります」

鮎の煮浸し、山の芋、酒の燗をして取持つてくれる其温情は、始めて會つた人のやうではなく、座談のうちに引き付けられてゆく、流石は竹中先生と、無遠慮にするつもりでも、何となく身體が固くなつてくるやうです。

「何處から何處の方へお廻りになりました、御修行は武道でござるか、文道ですか」

「いやなに、文武二道を兼ての武者修行でござる、多年廻國を續けてをります」

「それは宜しい、ア、コレ、童子や食事がすんだら此所へ来て、御修行者の御話を承まはるがよ、後學せよ」

「ハイ、承まはります」

「可愛い御子で、何歳になられます」

「十二歳です」

「イヤ、恐入つた十二歳、御主人の御仕込みが宜いからでもござらうが、行儀のよい、末頼もい

ことで」

「子供のようではなく、能く氣を付けて働きます、さうして御修行者の兵學は」

「されば兵學軍書と申しても廣いものでござるが、先づ六韜三略、孫子、吳子、學ばずといふものなく、心得ずといふことなく、實に萬卷の兵書に、アハ、これは申過ましたかな」

そろ／＼無遠慮になつて來たのを、半兵衛はにこ／＼しながら聽いて居た。

「それは御豪い、貴殿のやうな軍學者が、今この戰國時代に、諸侯は争つて人材を求めてゐる、その時に當りな浪人をして居らるゝか些か腑に落ちぬ次第でござる」

「イヤ、御尤、然し某は此人ならば奉公して、粉骨碎身の忠を盡して見やうと思ふ大名が諸侯の中に見當らないのでござる、木ツ葉大名などが大祿をやるからと申しても、此方から御免を蒙つてゐるのでござる」

「これはしたり御修行者、名將良將がないと云はるゝが、今天下は麻の如くに亂れ、俗に申す二十八天下とやら、何れの國へ參つても群雄雲の如くに起つてをる、其中には古今に傑出したる英雄、武將無しとは申されまい、然るを悉く愚將なり、暗將なりと言はれるか」

「さればでござる。試みに御主人へ御問ひ申さう、傑出したる武將が何れの國に居りまするか」
「イヤ、それは拙者より其許に御問ひ申さう」

「ウム伺ひませう、御答へ申す」
「それでは、甲斐の國には武田信玄と申す名將がござるが、此人へも仕官なさらぬか」
「イヤ成程、武田信玄、名將でござらう、弓矢の聖人と呼ばれ、軍略優れし天下の智將、しかし人物が氣に入らぬ、今川と謀つて實父を追出し、それは父も悪いが、又同じ十八源氏の内、信州の村上義清と大義名分のなき戦を起して領地を掠め、或は近親の諏訪頼茂を滅ぼし其領地を得る、此不仁がいやだ、爲に從はれませぬ」

「然らば越後の上杉謙信は」

「ウム、上杉は義勇の名將、曲つた事には決して兵を出さぬ。然し仁義の良將ではあるが、あの潔癖にてはこの戰國亂麻の世に、餘りに一本氣、ゆえに拙者は仕へぬ」

「ウム然らば相模の北條はいかに」

「さやう、北條氏康は名將でござるが、伴の氏政が好かぬ、表裏の多い不仁の將、某が頭を下げる人物ではない」

「それでは駿河の今川氏實は如何か」

「いやはや論ずるに足らぬ。父義元が桶狭間の一戦に討たれても、甲合戦の軍を起す勇氣もななく、優柔不斷の愚將でござる。父義元が遠ざけたる松下嘉平治と申さるゝ軍師あり、御主人の様

に、いづれかの山中に住まひ浮世をさけて居らるゝとか、さう云ふ軍師を禮厚く迎へて、軍事を練るやうと、重臣の意見を耳にも入れぬとか、聞きをよぶ」

「ウム、中國十餘洲の大守毛利は」

「偉い、これは優れた名將だ、然しあれ迄だ、拙者は出掛ける氣にはなれませぬ」
「ウム、成程、それでは九州の雄たる島津は如何に」

「これも偉い、然し如何に雄たりと雖、惜しいかな、邊土に片寄り過ぎて居る。餘りにも遠い、地の理を考へても亂世を統一出来ぬ。然れば仕へられませぬ」

「ウフハ、ハ、ハ、中々文句が付きませぬ。然らば當國の太守稻葉山の齋藤兵部太夫龍興はどうですか」

「アハ、ハ、ハ、これこそ愚將の見本、大馬鹿大將、聞く處によると、只酒色に溺れ、忠臣の諫めを容れず、賞罰正しからずして臣下の名ある人々は、次第次第に去りゆくとか、之にても暗愚の將といふ事が出来る。齋藤の家は本年中に滅亡でござらう」

「ウム、然し其許のやうに言はれては、天下廣しといへども、主と仰ぐ人物は一人もありませんの——」

「イヤイヤ、ただ一人だけ御座る」

「ハ、ア、それは何人でござるか」

「御主人には御心付きであらう」

「心當りはない」

「それは燈臺下暗しの警のとほり、隣國尾張の清洲城の主、織田信長、これは見込のある大將、臣下を愛し農夫商工を愛し、文武を錬り人の見分けを能く心得、北畠の大軍や、今川の巨萬の軍勢を一蹴し、將來天下に名をなす良將と存する」

「アハ、、、、木下藤吉郎殿、話は中々御上手ぢやなア」

「エ、、さては御承知でありましたか」

「ウム、逢ふは始めてなれども、顔色は猿に似て辯舌爽か、能く人を引付ける人とは兼て聞きよぶ。先刻より詭辯を設け、我田に水を引かんとする。人を惑はす其辯法」

「これは恐入りました。先生には勝てませぬ。木下藤吉郎で御座る」

「天下の諸將を眼中にをかす、信長一人を賞揚して、拙者に隨身をすゝめに來られたか。齋藤龍興殿を見限り、此山中に匿れ居るが、一旦恩祿を食みたる竹中が、今更他家へ仕へる心は少しもない、齋藤家と共に倒れんは豫ての覺悟、重ねて多言は無用でござる。それよりは酒でも呑んで御休みあれ」

「今一言、竹中半兵衛先生の御言葉とは思はれぬ。主人の爲に、共に倒れんとならば、何故飽迄稲葉山の城にあつて智計を廻され、主と共に倒れられぬ。龍興殿を賢明の將と思ふての御退身ならば聞えてをるが、愚將と承知で御隠退は心得ぬ。暗愚の將をすて、身を退くは、これ其家と思はざるも甚し、不忠の臣と申さねば成りませぬ、此儀を伺ひたし」

「その不審も一應は聞えるが、龍興殿は我諫を三度まで斥け、遂には目通さへ遠ざけられた。依つて斯く山中に隠遁したり、然れども我此國に人となり、御先代山城入道道之候には種々の教へを受けし事あり、その恩誼を思ふて、齋藤の家と運命を共にせんとする所存ぢや。是非はともあれ、二君に仕へる心はなす」

「それは先生、一を知つて二を知らず、と申すもの。夫では齋藤家の成立を御存じないかと申したい。抑々、齋藤道三殿は西近江松波村の出生にて、松波庄九郎と云ふ油商人。其頃稲葉山の城は、金華山相國寺の城と云ひし由、城主長井筑前守且興といふ御方、松波庄九郎を召出して武士となす。松波は武道に達して齋藤の家を興し、筑前守病死の後、其家を横領し長井の勢を齋藤と改めた。其子義龍と云ふは前名信村といひ筑前守の遺子、道三とは生さぬ仲、後年、道三殿は我主人信長を殺して尾張の領地を得んと、娘美濃姫どのを、先づ信長の嫁になされたり。富田の正法寺にて信長に會見せられ、殺さんとせし主人を厚く信用なされた。然るに義龍はこれを不